

平成31年度

第25回 日教弘教育賞

教育研究集録

研究主題

学校の実態を踏まえ

明日の教育を考える



第25回日教弘教育賞 教育研究集録発行に当たって

公益財団法人 日本教育公務員弘済会
理事長 岩田 將之

教職員には、いつの時代にあっても教職経験年数や職務に応じた資質、能力、指導力を高めるため研修に努めることが求められています。

しかし、教職員の大量退職、大量採用に伴って、平均年齢の低下及び年齢構成が変わるとともに世代交代が進み、加えて、働き方改革が推進され、教職員の勤務、研修の在り方も改善が必須となっています。

一方、わが国では、これまでの「情報社会」から更に進んで「超スマート社会」(Society5.0)という新たな社会を目指すことが提唱されています。今、学校で学んでいる子どもたちが活躍して担っていくことになる社会です。そのため、子どもたちが、何を、どのように学び、何ができるようになることが求められているのかを明らかにし具現しなければなりません。幼稚園教育要領及び各校種の学習指導要領が改訂され、順次本格実施が進められています。正に、新たな社会で生きる子どもたちに必要な力を育むために「主体的・対話的な深い学び」という観点から授業改善を図っていくこととなります。

教職員には、これまで以上に高い資質、能力、指導力等が必要になると思います。

さて、当会は、奨学金の貸与・給付、学校・教職員・教育関係団体の教育研究・研修等への助成・支援を行っております。これらの事業は、「次代を担う子どもたちの健やかな成長のために尽力する」ことを志し、すべての事業の評価基準は「最終受益者は子どもたちである」ことを前提として、21世紀に生きる子どもたちの教育に寄与・貢献するという使命を果たすために行っているものです。

教育研究助成事業の一つとして行っている教育論文募集事業「日教弘教育賞」は本年度で25回目となりました。「教育愛に燃え、子どもたちの未来のためにひたすら努力している教職員の教育実践と研究意欲に対する奨励」を趣旨としたものです。

「学校の実態を踏まえ、明日の教育を考える」という立場から、応募者が具体的な研究主題を決めて、園児児童生徒の具体的な成長を具現する実践と成果を論文にまとめることとしています。

本年度も都道府県支部へ2000編を超える論文を応募いただきました。ご応募いただいた論文は、質、量ともに充実したものが多く、かかわられた教職員の皆様の旺盛な研究意欲に心より敬意と感謝を申し上げます。

その中から各支部推薦の教育論文(学校部門73編、個人部門51編、総数124編)を慎重に審査し、別掲の結果となりました。

審査に当たられた皆様とお力添えをいただいた関係者の皆様に心から敬意を表し、ご協力に感謝申し上げます。

本研究集録は、変化の激しいこれからの社会を子どもたちがたくましく生き抜いていくために学校、家庭、地域が連携・協力した教育実践集となっています。

本研究集録が各学校等での研修・実践に広く活用され、今後の教育の着実な発展に寄与できれば幸いです。



際限のない営み

選考委員 文部科学省初等中等教育局

主任視学官 長尾 篤 志

平成31年度第25回日教弘教育賞を受賞された皆様、誠におめでとうございます。これまでの実践を論文としてまとめたことで、今後のさらなる取組の方向も明らかになったのではないのでしょうか。今後の一層の取組を期待しています。

さて、新学習指導要領は今年4月から小学校で、来年4月から中学校で全面実施されます。また、再来年4月から高等学校は学年進行で実施されます。新学習指導要領は、「地域に開かれた教育課程」の理念の下、各教科等で「育成すべき資質能力を明確化」し、「主体的・対話的で深い学びの実現」、「カリキュラム・マネジメントの実現」を目指しています。また、小学校では、3・4年生の外国語活動と5・6年生の外国語科の導入、プログラミング教育の導入、高等学校では、公民科に「公共」を新設、共通教科「理数科」の新設など、過去の改訂よりも大きな改訂になっています。したがって、それぞれ学校現場では新学習指導要領の実施を見据え様々な取組がすでに行われています。

一方で教員の勤務実態を改善すべく「教員の働き方改革」も強く求められています。「教員の働き方改革」を実現するには、教員や保護者を含め多くの方々の意識改革も必要とします。難しい面もありますが、一人一人の教員がワークライフバランスを実現し、やりがいを感じながら生き生きと仕事をするためには、現実的な働き方改革を実現していかなければなりません。

今回、日教弘教育賞に入賞した論文はこれらのことを踏まえたものが多くみられました。ここでは最優秀賞を受賞した2点について述べておきます。

一つ目は、兵庫県洲本市立加茂小学校美濃正明校長の「Society5.0を生き抜く資質・能力の育成」です。学校と地域社会の現状や課題を共に視野に入れ、学校をどのように変えていくかがまず、考えられています。また、学習指導要領が改訂されたとき、その趣旨を各学校のこれまでの実践に結び付けて授業改善の方向などを検討していただきたいと考えていますが、美濃正明校長の取組はまさにその方向であると感じます。

二つ目は、石川県白山市立松任中学校平真由子教諭の「生徒の「主体的な学び」を追求した歴史的分野の授業づくり」です。平教諭の「主体的な学び」という視点から授業改善を図るという意識が明確で、「主体的に学ぶ生徒の姿」を明記して具体的に実践をされています。「主体的に学ぶ生徒の姿」は他教科でも参考になるもので、実践も他の教科でも工夫すれば実施できるものではないかと感じます。

私は、教育は際限のない営みだと考えています。十分準備をして授業をしても振り返ってみると「あの場面ではこうすべきだった」という思いは多くの場合に残ります。また、全員で検討を重ねて取り組んだことも振り返ってみると計画段階で見落とししていたことがあったことに気付くことがあります。教育の実践はほとんどの場合そうではないでしょうか。しかし、実践を振り返って改善点を明確にし、さらに実践を積み重ねていく。そのような実践が広まれば、それぞれの地域に合った実践となり、新たな視点を獲得してより広い範囲で質の高い実践が展開されることになると思います。この日教弘教育賞が、それぞれの学校で一人一人の先生方の実践を後押しするものとなることを願っております。

第25回日教弘教育賞 選考委員

(順不同 - 敬称略)

《選考委員》

文部科学省初等中等教育局主任視学官	長尾 篤志
日本大学文理学部教育学科教授	佐藤 晴雄
前ぐんま国際アカデミー中高等部校長	吉田シヅエ
日本教育新聞社取締役兼編集局長	矢吹 正徳
公益財団法人日本教育公務員弘済会常務理事	鈴木 岐

《第一次選考委員》

委員長	堀竹 充
委員	大橋 明
委員	高橋 秀美
委員	新藤 久典
委員	天野 光芳
委員	中村 秀行
委員	大井 靖
委員	岡田 哲也
委員	鈴木 岐

《目 次》

◇あいさつ

公益財団法人 日本教育公務員弘済会 理事長 岩田 將之 …………… 2

文部科学省初等中等教育局 主任視学官 長尾 篤志 …………… 3

◇「日教弘教育賞」受賞論文一覧…………… 6

●『最優秀賞』2編

《学校部門》 兵庫県洲本市立加茂小学校 校長 美濃 正明 …………… 16

《個人部門》 石川県白山市立松任中学校 教諭 平 真由子 …………… 20

●『優秀賞』6編

《学校部門》 山形県長井市立伊佐沢小学校 校長 鈴木 義明 …………… 24

群馬県富岡市立富岡小学校 校長 吉田 悟 …………… 28

富山県氷見市立宮田小学校 校長 櫻打 佳浩 …………… 32

《個人部門》 岩手県盛岡市立河南中学校 校長 岩崎 雅司 …………… 36

大分県津久見市立第一中学校 教頭 永松 芳恵 …………… 40

沖縄県立中部農林高等学校 教諭 平良 一郎 …………… 44

●『優良賞』7編

《学校部門》 茨城県行方市立玉造中学校 校長 小野口吉政 …………… 48

静岡県浜松市立西小学校 校長 加藤志緒里 …………… 52

静岡県立富士宮西高等学校 校長 嶋 照生 …………… 56

兵庫県佐用郡佐用町立利神小学校 校長 桑田 隆男 …………… 60

《個人部門》 秋田県立視覚支援学校 教諭 深川 亮 …………… 64

富山県富山市立堀川中学校 教諭 浜井 理 …………… 68

鹿児島県奄美市立金久中学校 教諭 久保 秀仁 …………… 72

平成31年度・第25回「日教弘教育賞」受賞論文一覧

◎学校部門

◆最優秀賞

【兵庫県】 Society5.0 を生き抜く資質・能力の育成
～子どもの未来に責任もてる教育活動をめざして～
兵庫県洲本市立加茂小学校 校長 美濃 正明

◆優秀賞

【山形県】 自ら英語でコミュニケーションを図ろうとする子どもを育てる
～ Let's have fun learning English! ～
山形県長井市立伊佐沢小学校 校長 鈴木 義明

【群馬県】 働きがいのある職場環境づくりを目指して
～「時間」「人」「環境」に着目した組織的な働き方改革～
群馬県富岡市立富岡小学校 校長 吉田 悟

【富山県】 コミュニケーション能力の育成を目指す外国語活動の実践的研究
～言語活動を軸とするカリキュラム・マネジメント(カリマネ)の取組～
富山県氷見市立宮田小学校 校長 櫻打 佳浩

◆優良賞

【茨城県】 生徒が主体的に取り組み「わかった」「できた」と実感できる授業を目指して
～授業力向上を図る校内研修の工夫を通して～
茨城県行方市立玉造中学校 校長 小野口吉政

【静岡県】 グローバル社会を生きる子供を支える新たな外国語教育の創造
～系統性と必然性のある外国語の学びを通して～
静岡県浜松市立西小学校 校長 加藤志緒里

【静岡県】 読書活動を活発にする取り組みについて
～朝読書、ビブリオバトルを通して～
静岡県立富士宮西高等学校 校長 嶋 照生

【兵庫県】 「視点」と「問い」の質を高めることで追究する子どもを育てる
～「社会的な見方・考え方」を働かせた社会科の授業づくり～
兵庫県佐用郡佐用町立利神小学校 校長 桑田 隆男

◆奨励賞

【北海道】 めざす中3の姿「生きる力を身に付け 他者と共に よりよく生きる」を求めて
～比布町の小中一貫教育～
北海道上川郡比布町立中央小学校 校長 紺野 元樹

【北海道】 教育カウンセリングの発想を生かした、インクルーシブな学びの場の創造
～すべての子どもが主体的に「わかった・できた・楽しかった」を見出す授業作り～
北海道富良野市立鳥沼小学校 校長 内藤 晃宏

【青森県】 主体的に学習する生徒を育成するための小中一貫教育等の推進
～自己有用感を養い、学校満足度を高めることを通して～
青森県青森市立三内中学校 校長 渡邊 諭

【青森県】 特別な教育的支援を必要とする生徒への関わり方
～生徒に寄り添った指導を目指して～
青森県立五所川原工業高等学校 校長 幸山 勉

【岩手県】 児童生徒が自分の良さを発揮できる授業づくり
岩手県立宮古恵風支援学校 校長 坂井 廣幸



【岩手県】	一人ひとりが希望と自信を持ち、郷土を愛し、復興発展を支える児童の育成 岩手県八幡平市立松野小学校	校長 齋藤 卓也
【宮城県】	進んで関わろうとする児童の育成 ～外国語に慣れ親しませる工夫とコミュニケーション活動を大切に授業づくりを通して～ 宮城県登米市立佐沼小学校	校長 高橋 正則
【山形県】	真にこれからの地域社会を担う生徒の育成を目指して ～6年目からの学校改革～ 山形県酒田市立東部中学校	校長 舟山 邦彦
【福島県】	「復興の最大の拠点」としての学校の在り方 ～「授業」を軸に据えた学校運営を通して～ 福島県福島市立福島第三小学校	校長 佐藤 秀美
【栃木県】	学力向上に向けて ～東陽小スタンダードの設定と実践～ 栃木県那須郡那須町立東陽小学校	校長 深谷 雅明
【栃木県】	総合学科の「学び」を生かした進路指導 ～志望理由書を軸に進路選択の焦点化～ 栃木県立茂木高等学校	校長 大山 優
【群馬県】	問題解決に向け、主体的に取り組む児童の育成 ～自然の事物・現象に対する探究心をもてる導入の工夫～ 群馬県前橋市立駒形小学校	校長 高木 恵一
【埼玉県】	自己の生き方についての考えを深める「特別の教科 道徳」の授業づくり ～評価を核とした授業づくりと家庭・地域との連携による道徳教育の充実～ 埼玉県川口市立青木中央小学校	校長 大竹 伸明
【新潟県】	「探究力」を育成する総合的な学習の時間の取組 ～児童が資質・能力を統合的に発揮、育成するカリキュラム・マネジメント～ 新潟県上越市立大手町小学校	校長 塚田 賢
【新潟県】	「強み」を活かした学校課題解決のアプローチ ～地域人材との協働による学校課題解決の取組～ 新潟県新潟市立内野中学校	校長 藤本 洋則
【長野県】	思考・判断・表現の力をつける「喬木ドリル」 ～ICTを活用したドリルシステムが「ねらう力の伸長」を促進させる～ 長野県下伊那郡喬木村立喬木第二小学校	校長 竜野 正英
【長野県】	子どもも教師も“学び”をつなげよう ～「自ら考え、学びをつなげていく力を育む授業作り」3年目の挑戦、 失敗こそ、次へのステップに～ 長野県飯山市立東小学校	校長 中沢 裕子
【茨城県】	不思議を糧に、考えを深め合う児童の育成 ～自然の事物・現象との出会いや学び合いを通して資質・能力を身に付ける～ 茨城県水戸市立笠原小学校	校長 片岡 寿夫
【東京都】	児童のプログラミング的思考を育てる教育実践 ～主にアンプログド教材を使った取組を通して～ 東京都中央区立阪本小学校	校長 小川 優
【神奈川県】	思考力・判断力・表現力が高まる指導法の工夫 ～主体的・対話的で深い学びをめざして～ 神奈川県南足柄市立南足柄中学校	校長 野崎 智
【神奈川県】	子どもたちの自己肯定感を高め みんなが元気になる学校づくりをめざして ～子どもたちの「こころ」と「からだ」を元気にする方策～ 神奈川県相模原市立中央小学校	校長 今井 勝明

【千葉県】	記述力・表現力を高める実践 ～全国学力・学習状況調査結果を生かした、「サク作タイム」を中心とした取組～ 千葉県夷隅郡大多喜町立大多喜中学校	校長 佐久間靖夫
【富山県】	授業力の向上で学校の教育力を高める ～教師集団の力を生かした実行力ある研究推進～ 富山県富山市立新庄北小学校	校長 相川 仁
【石川県】	地域から学ぶ「地域学」の取組 ～飯田高校総合学科の地域連携活動を通して～ 石川県立飯田高等学校	校長 佐道 正春
【福井県】	地域を大切に作る心とこれからを生きぬく力の育成 ～殿下PR 活動をとおして～ 福井県福井市殿下小中学校	校長 真弓 淳
【福井県】	地域とともに歩み、未来を切り拓いていける鷹巣っ子 ～地域資源の活用と学びに向かう力を高める授業づくり～ 福井県福井市鷹巣小中学校	校長 土橋 雅実
【岐阜県】	変化が大きい時代を生き抜き、ふるさとの未来を担う子どもの育成 ～建設的な話し合いにより、他と共生する力を育むとともに、自己の成長に気付き、主体的な学びを生み出す子の育成～ 岐阜県郡上市立川合小学校	校長 佐橋 孝典
【愛知県】	関わりの中で互いに高め合う生徒の育成 愛知県名古屋市長良中学校	校長 鈴木 健
【愛知県】	第4次産業革命の経済社会を担う創造的な地域職業人の育成 ～AI,IoT と共存していく中での取組～ 愛知県立豊橋商業高等学校	校長 白井由美子
【三重県】	読書活動の広がり充実をめざして ～生徒の自主的活動による学校図書館運営を通して～ 三重県四日市市立朝明中学校	校長 海戸田恵一
【三重県】	地域社会を動かすエンジンとなる生徒の育成 ～総合的な学習の時間「ふるさと学習」を通して～ 三重県多気郡多気町立勢和中学校	校長 北村 幸洋
【滋賀県】	歴史文化豊かなまち「長等」を愛し自分のよさを発揮する子どもの育成 ～支持的風土を基盤に～ 滋賀県大津市立長等小学校	校長 脇 淳子
【滋賀県】	「風にのり 風に向かい 風をおこす 子どもの育成」 ～社会に開かれたカリキュラムマネジメント～ 滋賀県大津市立小松小学校	校長 安田 美幸
【京都府】	1000年時代を超えて学び、世界へ ～平安時代の文化を守り、そして未来の時代へ世界へと発信していく力の育成～ 京都府京都市立高雄小学校	校長 坪内 昌子
【京都府】	地域・学校連携で豊かな感性を育む教育活動の推進 ～地域ボランティアと協働した学校園整備の取組を通して～ 京都府向日市立第6向陽小学校	校長 廣川 伸一
【大阪府】	「産業社会と人間」から社会参画へ ～生徒主体の学びと地域連携の20年～ 大阪府立松原高等学校	校長 平野 智之



【奈良県】	外国語を用いて楽しみながらコミュニケーションを図ろうとする児童の育成 ～外国への興味・関心を高め、主体的・対話的に学べる授業づくり～ 奈良県北葛城郡上牧町立上牧第三小学校	校長 秋田 知美
【和歌山県】	ふるさとに支えられ ふるさに貢献できる学校づくり ～地域の強みと学校の底力を生かした農園活動を通して～ 和歌山県有田郡湯浅町立山田小学校	校長 愛須 一弘
【和歌山県】	幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けて ～認定こども園と小学校の交流活動を通して～ 和歌山県日高郡印南町立印南小学校	校長 藤川 誠
【鳥取県】	豊かな人間力をそなえた生徒の育成 ～考える力・伝える力・創り出す力の向上による「主体的・対話的で深い学び」 の実現を目指して～ 鳥取県米子市立後藤ヶ丘中学校	校長 山本 正史
【鳥取県】	カリキュラム・マネジメントと教科横断授業 ～Iwami 10 Skills を軸として～ 鳥取県岩美郡岩美町立岩美中学校	校長 福田 浩則
【岡山県】	キャリア意識・自己肯定感の向上と社会の構成者としての意識を高める探究サイクル ～これからの社会に求められる資質・能力（エージェンシー）の育成を目指して～ 岡山県立瀬戸高等学校	校長 乙部 憲彦
【島根県】	子供の「考える」を支える道具を手渡す学習指導のあり方 ～「思考スキル」の育成とシンキングツールの活用に関する一考察～ 島根県出雲市立荘原小学校	校長 中井 浩二
【島根県】	認め合い、高め合い、主体的に行動できる生徒の育成 ～自己有用感の育成をめざした取組を通して～ 島根県仁多郡奥出雲町立横田中学校	校長 内田 和男
【広島県】	主体的・対話的で深い学びを目指した授業の創造 ～【1年次】～「選択・決定」・「多様な他者との対話」による「主体的・対話的な学び」の創造～【2年次】～「多角的・多面的・多質的な教材研究・児童の反応想定をもとに「深い学び」を求めて～ 広島県福山市立春日小学校	校長 佐々木智明
【山口県】	チーム上宇部で挑む「自己の目標を高くもち、共に感動できる生徒の育成」 ～地域と連携した取組の深化・充実を通して～ 山口県宇部市立上宇部中学校	校長 師井 浩二
【山口県】	小中一貫教育に向けた「コミュニティ・スクール」の取組について ～「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて～ 山口県光市立浅江中学校	校長 伊藤 幸子
【香川県】	附属高松小学校 投能力向上プロジェクト ～子どもの投能力の現状を踏まえて～ 香川大学教育学部附属高松小学校	校長 永尾 智
【香川県】	教員の業務負担の軽減と児童への指導の充実をめざして ～子どもも教員も充実した学校ライフを送るための中央小ミライ・プロジェクト～ 香川県高松市立中央小学校	校長 大出 茂晴
【徳島県】	『社会の一員として、自立して・社会に役立ち・幸せに生きるための基盤づくり』 ～可視化・共有・ファシリテーションを合言葉にしたチャレンジを通して～ 徳島県美馬市立穴吹中学校	校長 濱田 雅子

【徳島県】	できる自分！に 気づく自分！ ～目標設定にとことんこだわり、自己肯定感を育てる～ 徳島県板野郡板野町板野中学校	校長 山田 匠
【愛媛県】	全ての児童が参加し「分かる・できる」授業の実現を目指して ～UD化の手立てを共通実践して～ 愛媛県四国中央市立寒川小学校	校長 石津 善久
【愛媛県】	自助・共助の力を育てる学校安全教育の在り方 ～「災害安全」領域における防災教育・防災管理・組織活動の充実を通して～ 愛媛県今治市立伯方小学校	校長 赤宗 和照
【高知県】	教職員の自我関与を促進する地域連携のシステム構築 ～地域連携担当教員の配置と協働連携部会の設置～ 高知県高知市立城西中学校	校長 吉本 恭子
【大分県】	近未来を見越したキャリア教育の推進 ～高校卒業後の追指導「30歳のレポート」10年間の軌跡～ 大分県立日田三隈高等学校	校長 小池 楠男
【福岡県】	たくましい体を育む学校づくり ～4つの組織的・協働的な経営行動を通して～ 福岡県糟屋郡篠栗町立勢門小学校	校長 稲津 一徳
【福岡県】	学校を活性化し地域に信頼される学校づくりの推進 ～組織力を高め、特色ある教育活動の充実を図る取組をとおして～ 福岡県朝倉市立十文字中学校	校長 井手 眞理
【宮崎県】	総合制専門高校における地域の未来を担う人材の育成 ～教科「家庭」における郷土学習の展開～ 宮崎県立日南振徳高等学校	校長 奥村 昌美
【熊本県】	「学ぶ楽しさ」を味わわせ、確かな学力を育む授業の創造 ～小中連携を基盤とし、主体的・対話的で深い学びを目指す『一のみや学習』の取組を通して～ 熊本県阿蘇市立一の宮小学校	校長 宮本 哲也
【熊本県】	各部会の機能と連携の強化を柱とした組織的・計画的な進路指導の充実 ～子どもたちを自立に繋ぐ進路指導の取組を通して～ 熊本県葦北郡芦北町立田浦中学校	校長 畑口 益喜
【鹿児島県】	働き方改革における業務改善に関する取組 鹿児島県出水市立米ノ津東小学校	校長 池浦也寸志
【鹿児島県】	インクルーシブ教育の視点に立った指導・支援の研究 ～算数科の実践を通して～ 鹿児島県伊佐市立羽月西小学校	校長 岩屋 高広
【佐賀県】	多様な人々と共生社会を実現するためのシビックプライド（Civic Pride）の醸成 ～国際交流を中心に、郷土の発展に取り組む学校を目指して～ 佐賀県嬉野市立吉田中学校	校長 池田 朋子
【長崎県】	自分の考えをもち、友達と学び合う子どもの育成を目指して ～言語活動を効果的に位置付けた授業づくりと学力向上への取組を通して～ 長崎県松浦市立星鹿小学校	校長 坂東利久子
【沖縄県】	新学習指導要領本格実施に向けた取り組みの推進 ～新学習指導要領本格実施に向けた本校のプロジェクト～ 沖縄県宮古島市立久松小学校	校長 砂川 茂和

◎個人部門

◆最優秀賞

【石川県】 生徒の「主体的な学び」を追求した歴史的分野の授業づくり
～認知や感情への効果的な刺激を考慮した単元構成の工夫～
石川県白山市立松任中学校 教諭 平 真由子

◆優秀賞

【岩手県】 「まず安心 わかった・できたを どの子にも」生徒一人ひとりを大切にする学校づくり
～少人数指導学級・個別指導学級の設置を通して～
岩手県盛岡市立河南中学校 校長 岩崎 雅司

【大分県】 地域と子どもをつなぐ地域素材を活用した教科融合型授業への挑戦
～ふるさとへの思いをフレスコ画で表現する～
大分県津久見市立第一中学校 教頭 永松 芳恵

【沖縄県】 主体的・対話的で深い学びを目指した農業教育の取り組み
～沖縄伝統野菜「クワンソウ」の特産品開発及び地域連携を通じた人材育成～
沖縄県立中部農林高等学校 教諭 平良 一朗

◆優良賞

【秋田県】 視覚障害教育におけるイメージの形成を目指した三角関数の指導
秋田県立視覚支援学校 教諭 深川 亮

【富山県】 「遊び」の出前授業を通じた集団づくりの推進
～人と関わる楽しさを共有できる学級集団を目指して～
富山県富山市立堀川中学校 教諭 浜井 理

【鹿児島県】 理科の「見方・考え方」を働かせる授業を目指して
～粒子概念を通して実践する主体的・対話的で深い学び～
鹿児島県奄美市立金久中学校 教諭 久保 秀仁

◆奨励賞

【北海道】 「主体的で対話的な表現活動を意識した英語授業の展開」
北海道松前郡福島町立福島中学校 教諭 會津 聡子

【宮城県】 自分の健康は自分で守る児童の育成
～初任養護教諭が挑んだ3年間の歯科指導のあゆみ～
宮城県石巻市立鮎川小学校 養護教諭 河村 明穂

【宮城県】 課題研究指導における定量的事象の取り扱いと考察の指導について
～生徒研究に科学の要素をプラスするには～
宮城県利府高等学校 教諭 中村 亮

【山形県】 地域とともにある学校づくり
～学校の統合・開校に向けた取組みを通して～
山形県鶴岡市立朝陽第五小学校 校長 工藤 健一

【福島県】 望ましい人間関係を育てる学級集団づくりの実践
～教師と子ども、子ども同士のつながりを深めるために～
福島県二本松市立東和小学校 教諭 高島 竜一



【栃木県】	社会参画への意欲を持ち、よりよい社会を創ろうとする生徒の育成 ～地域人材と連携・協働した主体的・対話的で深い学びを通して～ 栃木県宇都宮市立星が丘中学校	教諭	鈴木 京子
【埼玉県】	国語表現とフードデザインの新しい授業展開 ～コラボレーション授業の実践から見えてきたこと～ 埼玉県立入間向陽高等学校	教諭 教諭	関根 和毅 伊藤 彩
【埼玉県】	『『できるかも』と期待感を抱き、『できるようになってきた』を実感できる』国語の授業づくり 埼玉県新座市立大和田小学校	主幹教諭	石川 周
【新潟県】	郷土の音楽に親しむ生徒の育成 ～誰もが3校時で指導できることを目指した民謡の教材化～ 新潟県見附市立今町中学校	教諭	上村由紀子
【長野県】	どの子ども「わかる」「できる」「つながる」喜びを感じ「もっとやりたい」という意欲が持てる授業づくり ～協同学習を通して自分も友だちも高めあえる授業をめざして～ 長野県伊那市立手良小学校	教諭	有賀 祥子
【茨城県】	自分の思いを語り合い、自己の生き方についての考えを深める道徳 科学習指導の在り方 ～児童の発達の段階や実態に応じた多様な学習指導方法の工夫を通して～ 茨城県常陸太田市立太田小学校	教諭 教諭	石井 隼人 小林 宏美
【東京都】	これからの時代に求められる学びの在り方 ～「深い学び」となるためのアクティブ・ラーニング型の授業提案～ 東京都立国際高等学校	主任教諭	宮崎三喜男
【神奈川県】	いじめや暴力のない学校づくりのために ～一人ひとりの生徒を大切にし、問題行動の未然防止を目指して～ 神奈川県川崎市立南菅中学校	総括教諭	中澤 英之
【千葉県】	小中英語教育におけるスムーズな接続を目指した、小学生へのアルファベット読み書き指導 ～ローマ字は日本語の表記方法であることの明示的指導とシンセティックフォニックスの導入～ 千葉県松戸市立第五中学校	教諭	岡本 小枝
【静岡県】	小学校外国語教科化に向けた評価方法の提案と実践 ～「できてうれしい、楽しい」を大切にする評価～ 静岡県静岡市立末広中学校	教諭	塩澤 純世
【福井県】	新しい時代を生きる生徒たちの「思考力・判断力・表現力」を高め 社会のイノベーターとしての「資質・能力」を育成する英語授業の実践 福井県立三国高等学校	教頭	山内 悟
【岐阜県】	発達の段階に応じた「主体的・対話的で深い学び」の究明 ～子どもたちがタブレットPCを文具のように活用する学校をめざして～ 岐阜県岐阜市立徹明さくら小学校	校長	笠原 康弘
【岐阜県】	全教職員による組織的で開かれた学校経営の推進 ～校内組織と学校評価を活用したPDCAサイクルの確立を通して～ 岐阜県大垣市立興文中学校	校長	清水 昭治



【滋賀県】	保護者と連携することによる学校&家庭の生徒指導 ～保護者と特別支援（知的障がい）学級担任が連携する際の連絡帳 と学級通信の有効利用について～	滋賀県栗東市立栗東西中学校	教諭	村田 義典
【京都府】	エネルギー環境教育における手作り教材開発と授業実践 ～生徒自作作品による、より深い学びの実践～	京都府京都市立大淀中学校	教諭	八日市律子
【兵庫県】	忘れてはならない「水俣病」 ～環境教育の原点を振り返る～	兵庫県神戸市立渦が森小学校	主幹教諭	神田 孝治
【大阪府】	教員の心理的安全性を高める組織マネジメントについて ～「確かな学び」を育むための土台作りとしての職場環境の形成～	大阪府泉佐野市立新池中学校	教諭	徳留 宏紀
【大阪府】	多面的な視点で思考判断する「これからの食料生産」 ～専門性を生かした T.T における食に関する指導～	大阪府東大阪市立加納小学校	栄養教諭	伯井 祥子
【奈良県】	地域協同型科学研究実践課外活動を通して ～教科書を飛び越えた研究活動を通して生徒の主体性を引き出す～	奈良県立西和清陵高等学校 サイエンスチーム担当教諭	早川 純平	
【岡山県】	学校図書館利用を組み込んだ世界史探究学習論 ～不読率の改善と「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて～	岡山県立倉敷天城高等学校	教諭	小山 大輔
【岡山県】	対話的な学びによる批判的思考力の育成 ～高等学校外国語科（英語）における「書くこと」の学習指導を通して～	岡山県立岡山朝日高等学校	教諭	藤原 絵美
【広島県】	ふるさとを愛し、誇りに思い、社会に貢献する志をもった生徒の育成 ～地域探究学習を通して～	広島県三次市立布野中学校	教頭	益田 英樹
【広島県】	ループリックを活用した「適切な読み」の育成に関する研究 ～新学習指導要領の全面実施に向けて～	広島県広島市立皆実小学校	教諭	原田 啓
【山口県】	地域とつながり、地域に学ぶ社会科授業の開発 ～小学校第4年生「地域の防災とわたしたち」の実践を中心に～	山口県岩国市立中洋小学校	教諭	福村 優
【香川県】	主権者教育を通して課題解決力を育てる社会科の授業の取組 ～模擬住民投票の実践を通して～	香川県坂出市立岩黒中学校	講師	渡村 武弘
【徳島県】	自らの学びをデザインし、粘り強く取り組む生徒の育成 ～社会とのつながりを意識する課題設定と教科横断的な取組を通して～	徳島県徳島市上八万中学校	教頭	大井 育代



【愛媛県】	シビックプライドを持ち、高い専門性や行動特性を身に付けた生徒の育成 ～フィッシュガールの活動を通して～	愛媛県立宇和島水産高等学校	教諭	鈴木 康夫
【高知県】	災害はチームの総合力で乗り切るぜよ!! ～緊急時を想定した実践的な研修体制の構築～	高知県高知市立秦小学校	主幹教諭	徳橋 容子
【高知県】	運動の特性や魅力を味わわせ、運動技能を高める指導の研究について ～運動習慣への発展を目指して～	高知県吾川郡いの町立伊野南小学校	教諭	二宮 健輔
【大分県】	学校スローガン「地元で学び、地元で活躍、地元と共に」を掲げての地域貢献活動 ～「足元の平和」を感じる「宇佐市平和ミュージアム」建設準備応援活動を通じて～	大分県立宇佐産業科学高等学校電子機械科	学科主任	梶原 満
【福岡県】	人口減少地域における総合型高等学校活性化の取組についての一考察 ～学科の特性を生かした特色化と「主体的に学習に取り組む態度」 の育成、広報活動の改善を通して～	福岡県立筑前高等学校	校長	真海 誠司
【宮崎県】	児童の承認感を向上させるための常時指導 ～称賛活動と教室掲示を通して～	宮崎県宮崎市立潮見小学校	教諭	吉野 了太
【宮崎県】	部活動におけるスポーツ合宿を通じた効果的な食に関する指導の在り方 ～チーム学校での食育をめざして～	宮崎県宮崎市立本郷中学校	栄養教諭	宇戸紗耶子
【熊本県】	高等支援学校における社会自立・職業自立を目指す進路指導の在り方について ～個々の実態・ニーズを踏まえた生徒と企業をつなぐ進路指導の実践～	熊本県立ひのくに高等支援学校	教諭	西生 元喜
【佐賀県】	「将来につながる生活力を育む支援の在り方」 ～子どもの主体性を考えた寄宿舎生活づくり～	佐賀県立伊万里特別支援学校 寄宿舎指導員	寄宿舎指導員	大草 香織
【長崎県】	「社会参画力」を育成するためのカリキュラム・マネジメント ～「地方創生」の実現へ向け、「教育」に何ができるか～	長崎県長崎市立茂木中学校	教諭	竹田 詳平
【長崎県】	病弱特別支援学校における授業改善 ～「現代社会」アクティブ・ラーニングの試み～	長崎県立桜が丘特別支援学校	教諭 教諭	菅 達也 稲垣 友里
【沖縄県】	科学クラブによる ESD の実践研究 ～アクアポニックスシステムの探求と活用を通して～	沖縄県沖縄市立越來中学校	教諭 教諭	大城 拓馬 山口 大輔

賞 育 教 弘 教 日

賞 秀 優 最

賞 秀 優

賞 良 優

Society5.0 を生き抜く資質・能力の育成

～子どもの未来に責任のもてる教育活動をめざして～

兵庫県洲本市立加茂小学校

校長 美濃 正明

1 はじめに ～地方こそ先に動くべきだ～

地方の学校こそ、積極的に先に動くべきである。

下記の表にもあるように、本市の将来の高齢化率は国の平均よりも約10%高く、児童生徒数は25年後、約半数になる。このような課題先進地域では、国よりも早く動き、将来予想できる課題に対し、早く手を打ち、人材を育成しなければ、街全体が行き詰まってしまうからである。

【洲本市の人口と児童生徒数の変化及び高齢化率】

	2020年	2045年
1学年あたりの児童生徒数	約3000人	約1500人
洲本市人口	約41000人	約26000人
高齢化率	約37%	約47%

(総務省 国勢調査及び国立社会保障・人口問題研究所より)

今は非常に便利である。ICT やインターネットを活用すれば、国の教育施策に関する情報も入手できるし、優れた実践に触れることもできる。さらに指導も支援も受けることができる。

ICT は時間と場所という制約を解消してくれるツールである。あれもこれもないと言うより、子どもたちの未来のために、勇気をもって一步を踏みだそう。

これは淡路島の小学校の取組である。

2 本校の現状

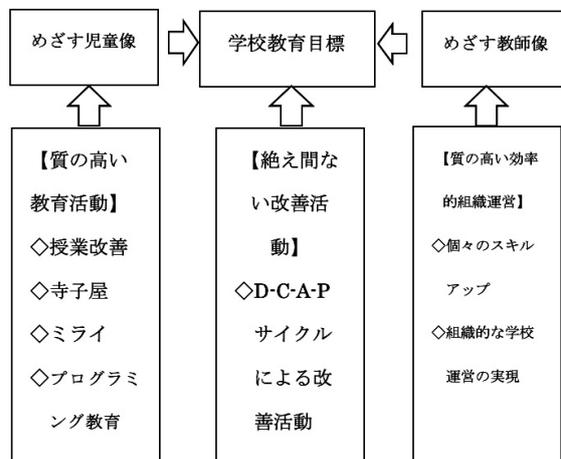
「校長先生、僕わからなかったら、YouTube で見るよ」これは算数の授業中、子どもが私に言った言葉である。また、職員の「ここに線を引いて。これを覚えてきたら、70点ぐらい取れます」というような指導もあった。どちらも衝撃的な言葉であったが、全職員、子どものために職務に精励しているのは理解できた。

ただ、進むべき方向性を共有しておらず、組織としてどう動くかという意識は乏しいように思えた。

着任して一ヶ月が過ぎた頃、全国学力・学習状況調査や市独自で調査している学力調査、本校の生活アンケートから以下のような課題が明らかになり、再度、学校経営案を示した。

- ・学力4層分析では下位2層の割合が高い。
- ・自尊感情についても肯定的に答えた児童は42%と低い。
- ・授業は一斉指導が中心で「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業とは言い難い。児童も48%しか、授業中、話を聞いていないことが明らかになった。

3 学校経営の概要



子どもは「未来からの留学生」である。だから、学校は子どもが社会に出たときに、必要な資質・能力をつけることなくしてはならない。それも子どもが生きる時代は Society5.0 とよばれる新しい社会である。社会が変われば、暮らしも変わる。だったら、教育も変わるのが当然である。

しかし、私たちは今、子どもの未来に責任のもてる教育を行っているだろうか。

来年度から全面実施される学習指導要領は、

Society5.0 を生き抜く子どもたちに必要な資質・能力を育成するための改訂だと認識している。

また、校長は職員の意欲的な教育活動が子どもの成長に繋がるよう、学校経営を行う責務があると考えている。このような考えのもと、日々学校経営を行っている。

4 具体的な取組

今の学校で新たな取組を行う場合、カリキュラム・マネジメントが必要不可欠である。

本校のように「授業改善」、基礎学力育成のための「寺子屋」、さらには本校の教育の特色である情報活用能力育成のための「ミライ」の時間の創設など新たな取組を行う場合、思い切った業務改善も必要である。

これまでも学校教育目標の目的達成のために、最適の手段でないとは判断すれば、学期の途中であっても、思い切った「校務改革」に取り組んできた。

(1) 授業改善～自分にしかできない教師の一大事業～

校長として赴任した当初、授業中、教室から抜け出す子どもなど、授業規律が甘く、教育活動が正常に行えているとは言い難い学校であったが、授業規律の確保に全職員足並みを揃えて取り組み、ある程度の教育活動はできるようになった。

しかし、授業は一斉指導が多く、子どもの学習意欲は低く、教師の話もきちんと聞いていない状態であった。教師の授業力の有無が、子どもたちの意欲・学力に直結していた。これは仕方のないことだろうか。

日々、授業観察を行うなかで、疑問が次第に大きくなっていった。

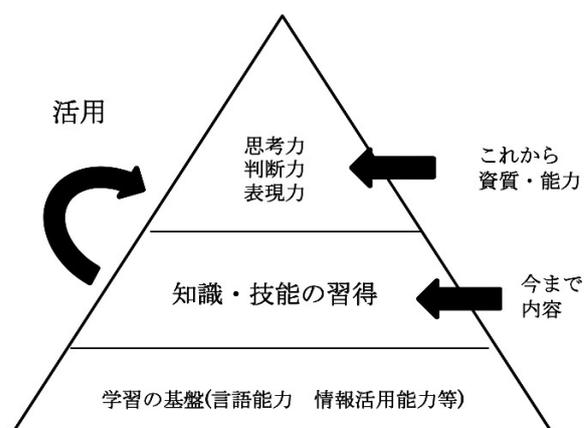
そんなとき、ある私立の小学校を訪問した際「本校は明日、どんな教師が赴任してきても、授業の質は落としません」と言う言葉を聞いた時、大きくひらめくものがあった。これだ。授業をある程度システム化すれば、誰が担任になっても授業の質は落ちない。毎年新学期になると、教師によって授業の進め方も違う、ノートの取り方も違う、子どもが教師に合わせる。これはおかしい、教師が子どもに合わせるべきなのだ。

そんな簡単なことに気づかなかった自分が情けなかった。

それから、過去に全国学力・学習状況調査の結果が思わしくなく、授業改善によって、学力向上に成功した学校を何校か探し、訪問させていただいた。この実践に本校の特徴である ICT の長所を加えて、本校のモ

デルをつくり、取り組もうと決意した。しかし、急にそんなことを提案しても職員は反対する。そこで、学習指導要領の理念を職員に周知するところから始めた。

【学習指導要領総則のイメージ】



職員に話したのはこれから来るであろう Society5.0 とはどんな時代か、そしてこの時代に必要な資質・能力とは今までと違うということである。これまではコンテンツが大切であったが、今後はコンピテンシーが重要であることを説明した。最後に学習指導要領には当然のことながら、法的根拠があることを説明すると、若手職員はほとんど、納得した。

残るは中堅からベテランである。今まで、自分なりの授業実践があり、子どもに学力をつけてきたという自負があるのだろう。取組のスピードは鈍かった。これらの職員には先進校を私と一緒に訪問し、そこでの子どもの様子を見学させた。これは非常に効果的であった。

こうして、本校での授業改善の取組が始まった。

本校の授業改善の主な取組は以下のとおりである。

○子どもたちに学び方を指導する教科経営を大切にする。

これまで教員は教科教育を学んできたが、教科経営を学ぶことはあまりなかった。しかし、「主体的・対話的で深い学び」の重要性が提言された今日、学び方の指導は必要である。そのため、学び方をまとめた「学習過程スタンダード」を作成した。

○基本的な授業過程を①問題提示②問いをもつ③学習課題の設定④問いの共有で「見通し」を立てる⑤自力解決⑥集団解決⑦価値の共有（まとめ）⑧振り返りとする。

特に「学習課題の設定」では今回の学習指導要領では、問題発見・解決能力等が学習の基盤として位

置けられていることから、子どもたち自ら課題が設定できるようにした。また、「見通し」も次の自力学習ですべての子どもたちが取り組めるようにし、「振り返り」では自分の学びを豊かにし、可視化し、学びに向かう力を育てるため、重視した。

○研究授業は全員参加が原則であるため、特設の6校時を設定した。

○指導案はA4版1枚のワンペーパー指導案とした。それは研究授業は授業が終われば終了ではなく、事後研修後、改善策を実践してはじめて終了である。

その研究授業も本校では1人1年に数回行うため、指導案づくりにあまり時間をかけず、授業準備に傾注させるためと、複数回の研究授業で課題解決が図ればよいと考えているからである。

○言語能力育成のため、「言語わざ」を大切にす。

「言語わざ」とは「学習用語」と学び合いを深めるための「対話言語わざ」からなる。本校がめざす授業は、子どもたちが主体的



に対話し、学ぶ授業である。そのため、学び合いの型を大切にしてきた。司会を立てる学び合い、グループ学習での学び合い、言語わざを使った学びなどである。子どもたちは言語わざを駆使し、自分たちだけで、意見交流ができるようになった。

○事後研修は①課題を出す②改善案を出し合う③助言をする④改善プランをまとめるのワークショップ型で30分という短時間で行った。また、ここでは改善案まで討議されるので、内容のある授業改善プランを作成できるようになった。

(2) 寺子屋の開設

～校門を出るまでに基本的な知識と技能を習得～

本校児童の学力面の課題は学力低位層がやや多いこと、計画を立て、自ら学ぶことである。

これらを解決するために放課後、児童支援担当教員が中心となって、デジタルドリルサービス「やるKey」を活用した「寺子屋」を設立した。子ども一人一人にIDとパスワードを配布し、インターネットが使える環境であれば、どこでも学習できる。

子どもたちは放課後、競うようにコンピュータ室に

やって来るようになった。

ここでは、予め担当教員から配信された問題に取り組み、できると答え合わせもコンピュータがやってくれる。問題を間違えると、コンピュータがどこでつまづいていたか判断し、それを解決できる問題が自動的に出題され、問題に取り組むというものである。

教師は子どもたち一人一人のつまづきや学習状況を把握でき、必要に応じて指導できる。

このように一人一人の学習履歴が分かれば、子どもたちに基礎学力を育成していく上で、非常に効果的である。

(3) 情報活用能力育成のための「ミライ」創設

～自分の構想を可視化できる子どもに～

「ミライ」創設の理由

は次の二つである。

まず、情報活用能力が学習指導要領では学習の基盤として位置づけられたことにより、この能力は「育成できたらいいな」というものから、「育成しないと、子どもたちが生き



ていく上で、必要不可欠である」というふうに変ったからである。次に、本市は少子高齢化の先進地域であり、将来、ロボットや人工知能、ICTなどを上手く活用し、社会の課題を解決していかなければ、社会そのものが成り立たない状況であることが予想されるため、子どもたちには将来「こんなものがあつたら、便利だな」と思えるものをつくることができる子どもになってほしいからである。

ミライでは「コンピュータの基本的な操作」「プログラミング的思考」「情報モラル」などを育成している。

本校ではまず、コンピュータで文字を入力する基本的な操作を「キーボード島アドベンチャー」を活用し、技術を習得させている。

プログラミング教育で学ぶ子どもの姿を見るとこれがコンピテンシーベースの今回の学習指導要領の理念そのものであると感じる。体験しながら色々なことに気づき、友だちと共有し合う。

課題が出てくれば、それを友だちと頭を突き合わせながら、話し合い、課題を解決していく。そして、自分が学んだことを振り返ることで、メタ認知して、学

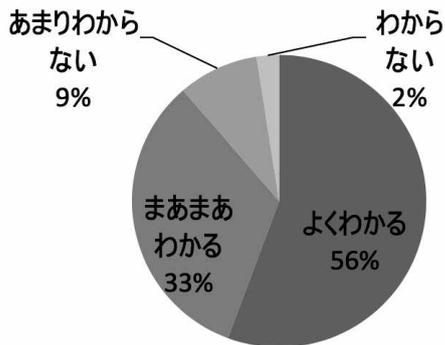
びを進めていく。

さらに、メタ認知したものを職員が共感的に理解することで、またやってみたいという学びに向かう力につながっていく。こういった授業を見ると、感動で胸が熱くなる。プログラミングの体験は新しい学びのモデルになることは間違いない。

5 成果と課題

(1) 授業改善

【子どもたちの授業理解度 生活アンケートより】



授業改善の結果、3学期末に授業が分かると肯定的に答えた子どもたちの割合が57%から89%に急上昇した。また、授業中、話を聞くというのも48%から89%に、さらに学校が楽しいと答えた児童が61%から、91%に上昇した。

これらは授業改善がすべてとは言いきれないが、授業が教師主体の一斉授業から子どもたち自ら学ぶスタイルに変わったことが大きいのは確かである。

また、授業過程をある程度、職員が統一し、子ども自身が学び方を知っていると、学校経営上、様々なメリットがある。

例えば、どのクラスも4月から学級経営が非常に安定するということである。特に本校のように職員の異動が多い学校にあっては担任の学級経営力の差によって、様々なトラブルが生じていた。しかし、子どもたちが授業の進め方を熟知しているので、授業が非常にスムーズに進む。子どもの在校時間の70%は授業である。

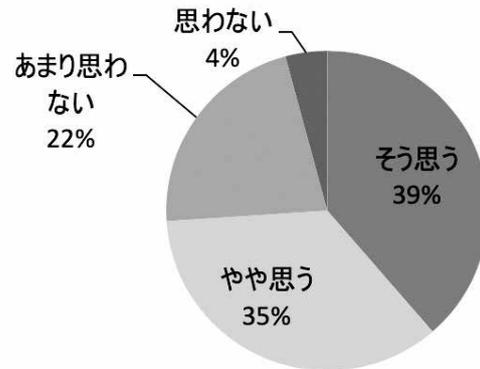
その授業が安定することのメリットは、学校経営上とてつもなく大きい。

(2) 寺子屋

計画を立てて、自ら学ぶという児童も42%から「やるKey」導入後、74%と大幅に改善された。しかし、本校の課題である、学力低位層に占める子どもの割合が多いことについてはかなり改善された学年とできな

かった学年に差があった。これは学校全体の取組として組織的な取組になっていないのが一因であろう。

【自ら学ぶ時間に関する調査】



反面、デジタルドリルサービス「やるKey」を活用した寺子屋については子どもや職員、保護者も非常に有効であるという結果が出ている。調査結果をさらに分析すると「やるKey」によく取り組んでいる子どもは職員や保護者からのかかわりが、よくあることが判明した。今後、子どもたちの学習履歴を分析し、それぞれの子どもたちにあった、きめ細かな指導が必要である。

(3) ミライ

児童のコンピュータで文字を入力する技能は著しく上達し、学習の道具としてコンピュータを活用できるようになっている。将来、1人1台、コンピュータが使えるようになって、授業に支障が出ることはないだろう。

「レゴWeDo」や「Ichigojam」を使ったプログラミング学習では子どもたちの発想の豊かさは大人顔負けである。

きっと将来、こんなものがあつたら便利だなというものをつくり出せる大人になるだろう。

6 終わりに

学校はその時代の最先端の知識と技術を学べる場所ではなければならない。そういう思いで職員とともに学校経営にあたってきた。

だから、いい実践があれば、喜んで、出かけていった。幸い、そういった優れた実践をされている方は、私にも丁寧に指導して下さる方ばかりであった。本当に有り難いものである。

最後に私の学校経営をいつも支援して下さった洲本市教育委員会、地域・保護者の方、教頭をはじめとする職員に感謝の気持ちを捧げたい。

生徒の「主体的な学び」を追究した歴史的分野の授業づくり

～ 認知や感情への効果的な刺激を考慮した単元構成の工夫～

石川県白山市立松任中学校

教諭 平 真由子

1 研究の目的

近年、学校現場では、「主体的な学び」が重視されており、授業研究や研修会が全国各地で開催されている。これを機に、自分の授業を振り返ると、生徒の主体性を引き出す授業をしているつもりが、実際は教師が作った枠に当てはめ、主体的な学習者を演じさせているのではないかという疑念が生まれた。主体的というのは、「なる」ものであり「させる」ものではない。そのことに気づき、生徒が主体的に学ぶ授業について熟考し、授業力向上に繋がりたいという思いが高まった。

また、今年度の4月に社会科の授業に関するアンケートを実施したところ、歴史的分野に苦手意識を抱えている生徒が多いことがわかった。理由は、「歴史は漢字が多く、覚えることも多い」、「学ぶ意味がわからない」、「過去に何が起きたかは今の自分には関係ない」などだった。新学習指導要領では、歴史的分野の目標を、「社会事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」となる、知識・技能、思考・判断・表現力、そして学びに向かう力、人間性等を育成することとしている。生徒の歴史学習の認識を変えなければ、この目標に到達することはできないだろう。

以上のことから、生徒の「主体的な学び」という視点から授業改善を図り、歴史的分野に対する苦手意識を減らし、歴史学習の意義を生徒自身が獲得できるようにしたいと考えた。これが研究の目的である。

2 「主体的に学ぶ生徒の姿」の定義

生徒が主体的に歴史的分野について学ぶ姿とはどのような姿なのかについて、様々な文献を参考にして、定義することを行った（資料1）。

- ・ 歴史的事象に対して疑問や課題を見出している
- ・ 学習内容や学習方法を自ら選択している
- ・ 積極的に情報収集している
- ・ 学びを積極的にアウトプットしている
- ・ 意欲的に思考課題に取り組んでいる
- ・ 歴史的課題に対して自らの思いや考えを持って、積極的に他者と議論している

資料1 歴史的分野を主体的に学ぶ生徒の姿

3 実践内容

本実践は、新学習指導要領の歴史的分野の大項目C「現代の日本と世界」の(1)近代の日本と世界の内容のうち、1926年（昭和元年）から1945年（昭和20年）の内容である。この単元は、世界の国々が世界恐慌を機に大きく変化し、世界戦争に突入した経過と、戦争が人類全体に惨禍を及ぼしたことについて学習する単元である。この単元において、先に定義した姿が授業内に出現するように単元構成をデザインした（図1）。その際、心理学や教育学の研究成果に基づき、認知や感情に、適切なタイミングで刺激を与えられるよう工夫した。

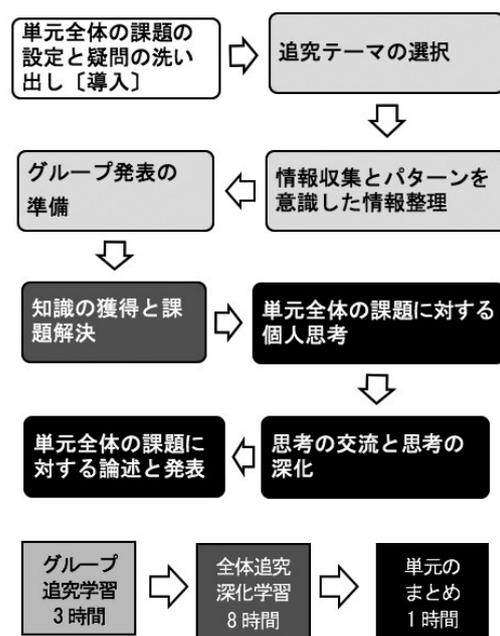


図1 歴史的分野の単元構成

(1) 単元の導入

まず大正時代のイメージを聞いた。生徒からは、「エネルギー」「明るい」「活気がある」といった回答が返ってきた。そこで、「大正時代が終わり、20年たったある日、日本で撮影された1枚の写真があります。」と切り出し、



資料2 『焼き場に立つ少年』

ジョー・オダネル氏が撮影した『焼き場に立つ少年』の写真を提示した(資料2)。

「2分間をとります。その後で、写真を見て気がついたことを教えてください。」と生徒に投げかけた。2分間の沈黙の時間が流れた。

- T: では、気がついたことを教えてください。
C1: 男の子が裸足で手をピンとして立っています。
C2: 周りに建物がありません。
C3: お母さんがいません。
C4: 服がボロボロです。
C5: おぶっている赤ちゃんがぐったりしています。

C5の意見が出たところで、ジョー・オダネル氏の語りが書かれた資料を読みあげた。教室の空気は一気に固くなり、生徒達は写真が示す状況を理解した。少年が背負っている赤ん坊はすでに亡くなっており、少年は火葬のために、焼き場にやってきたのだ。生徒の中には、泣き出しそうな顔をしている生徒もいた。

「大正時代が終わってから、この20年の間に、一体何が起きたのでしょうか。なぜ、少年はこのような状況に置かれることになったのでしょうか。そして、このような状況を阻止することはできなかったのでしょうか」と投げかけ、単元全体の課題を提示した。

<単元全体の課題>

- ・この20年の間に、世界や日本に何が起きたのか。
- ・この少年のような状況を阻止する選択肢はなかったのか。

(2) 疑問の洗い出し

次に、1926年から1945年に、世界や日本に何があったのかを年表で確認した。それを踏まえて、「自分が学びたいこと、追究したいことを、できるだけたくさん書き出しましょう」と指示を出した。多面的・多角的な視点で、数多くの疑問が出てきた(資料3)。

- ・なぜこの20年こんなにも戦争があったのか
- ・なぜアメリカのニューヨークで起こったことが、世界に影響を与えたのか
- ・なぜ日本は国際連盟を脱退したのか
- ・なぜ総理大臣が暗殺されたのか
- ・なぜ、ソ連は中立条約を結んでいたのに、日本に宣戦布告したのか
- ・なぜ、広島と長崎に原子爆弾が投下されたのか
- ・当時、国民はどう思っていたのか
- ・なぜ事件名が数字なのか

資料3 生徒から出てきた疑問の一部

(3) 追究学習

生徒から出てきた疑問を学習課題とし、歴史的事象の理解や、自分なりの解釈を深める追究学習を行った。具体的には2つの学習方法を用いた。1つ目は、歴史的な事象を背景→経過→結果→影響の視点で捉える“ロジカルプレゼン学習”、2つ目は複数の資料から当時の状況を具体的に把握する、“資料活用レポート学習”である(図2)。

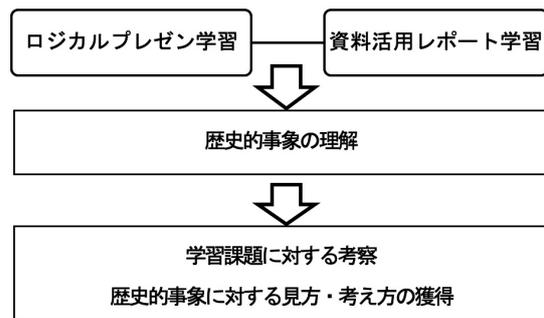


図2 課題追究の方法

ロジカルプレゼン学習

STEP1: 学習テーマの選択

生徒一人一人が追究したいテーマを、満州事変からポツダム宣言受諾までの14個の歴史的な事象の中から1つ選択した(資料4)。



資料4 テーマ選択の時の板書

STEP2: グループでの情報収集と発表準備

同じテーマを選んだ者同士でグループになり、情報収集と整理、発表準備を行った。その際、できごとの

背景→経過→結果→影響の枠組みで情報整理、発表することを条件とした。グループ内の学び合いでは、結果と影響の区別や、できごとの前後の関連性などについて、活発に意見交換をしていた。その中で、ほとんどの生徒が、背景→経過→結果→影響の枠組みで歴史的事象を捉えることができるようになった。

STEP3: グループ発表による知識の獲得と課題解決

1時間の授業の中で、2～3グループが担当した歴史的事象について、背景→経過→結果→影響の枠組みで発表をした。その際、教師の役割として、発表内容の簡潔な板書、曖昧な部分の問い返し、映像や当時の日記などの補助資料の提示などを行い、全員が理解し、課題に対して自分の考えを持てるようにフォローをした。

毎授業の終末では、ペアになって、学習した内容を2分間でスピーチするアウトプット活動を取り入れた(資料5)。繰り返し行うことで、背景→経過→結果→影響の枠組みを用いて、ロジカルに説明できる生徒が増えた。



資料5 2分間スピーチの様子

資料活用レポート学習

当時の国民生活を象徴する10以上の資料の中から、適切な資料を選択し、レポートにまとめる学習活動を行った。(資料6)。

仮説「戦時中の国民の生活は我満 だった」を証明しよう!

この仮説を証明するために、資料の中から適切な資料を選び、その内容に基づいて、戦時中の国民生活を「我満 だった」と証明しよう。

資料	証拠	証拠	証拠	証拠
資料1: 戦時中の国民生活	資料2: 戦時中の国民生活	資料3: 戦時中の国民生活	資料4: 戦時中の国民生活	資料5: 戦時中の国民生活

私はこの証拠1から5によって、戦時中の国民生活は **我満** だったと言えようと思います。

資料6 戦時下の国民のくらしのレポート

“適切な資料を選択する”という行為は、その過程で、資料を読み込み、比較や関連させる技能を駆使することになる。また、クラスメイトのレポートを見合うことで、同じ学習課題でも、学習者によって選択する資料が異なることや、同じ資料でも着目する視点が異なることに気づき、学びの深化につながった。

(4) 単元のまとめ

単元のまとめの授業では、再度『焼き場に立つ少年』の写真を見せ、「どの時、どのような判断をしていれば、悲惨な結末を阻止できたのか」という課題を提示した。

既習事項を活用して、1926年から1945年までの流れを確認した後、“どの時”を各自選んで、ネームプレートを貼った(資料7)。



資料7 “どの時”の個人判断場面の板書

満州事変、五・一五事件、国際連盟脱退、太平洋戦争開戦、ポツダム会談などにネームプレートが貼られていた。その後、フリーディスカッションに入った。

- C1: 7月のポツダム会談の時に、受諾していれば、原爆による被害は防げたと思う。
- C2: 確かに、原爆による被害は防げたかもしれないけど、そこまでの犠牲についてはどう考えるの？

こうした議論があちらこちらで行われていた。途中、ネームプレートを動かす生徒も何人かいた。フリーディスカッション後に、具体的に“どのような判断”をしていればよかったのかについて、自分の考えをワークシートに記述する時間を確保した(資料8)。

どの時、歴史を動かせた? ~15年戦争編~

課題: 年表中のどの時、どのような判断をしていたら、(悲橋) 結末を阻止できたのか考えてみよう!

学習のstep

- step1: テキスト(ノート、教科書、資料集)を参考に、どの時、どのような判断すればよかったかを自分なりに考える。
- step2: 自分の考えをワークシートにまとめる。
- step3: 自分の考えを発表し、クラスメイトの発表を聞き、考えを深める。

1. 年表中から、(悲橋) 結末を阻止できるとするならば、どの時、どのような判断をすればよかったか自分なりに考えよう!

昭和恐慌が起きた時、
 “下力との身を守る、満州の資源を確保すべき”という判断では、
 “国内の充実にもつなげない”
 という判断をすればよかった。

2. なぜ、その時、そのような判断をすれば、(悲橋) な結末を阻止できたと考えたのか、根拠を明確にして、理由をまとめてみよう!

昭和恐慌時、資源不足に悩んでいた中、下力との戦争に備える準備をしたことで、状況が良くなるわけにはいかないから、国内の充実をはかれば国民の不安・不満を解消し、開戦への世論もおさまりやすくなると思う。

国民の不安・不満は危機に起因する戦争の根本原因であり、これを解決しなければならぬ。

資料8 ワークシート

その後、全体討論に入った。根拠を明確にした主張がなされ、聞いている生徒たちの思考が深まっていく様子が見られた。最後に、ペアで自分の考えを伝え合う場をとった。このことで、全員が自分の考えを他者に語る事ができ、達成感の獲得につながった。

4 成果

(1) 社会好きの増加

7月に校内で実施した授業アンケートを分析すると、「社会科が好きだ」と肯定的に回答した生徒は、全体の85%で、他教科に比べ、高い数値だった(図3)。また、「あてはまる」と回答した生徒の割合を、昨年度(2年時)の7月と比較すると、今年度の方が10ポイント高かった。

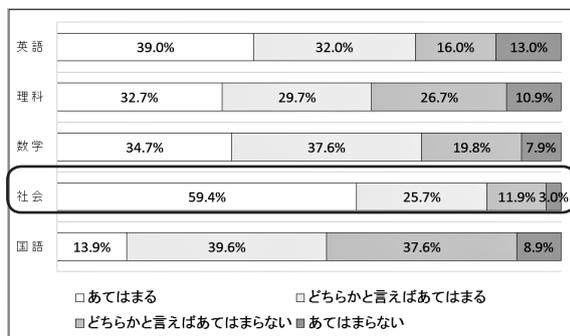


図3 「○○科が好きだ」の3年生のアンケート結果

(2) 自分の考えを持って、生き生きと語り合う生徒

全ての生徒が、思い付きではなく、根拠や理由を明確にして、他者と意見を交流させる姿が見られた。学習に対して苦手意識が高かった生徒が、「今日は自分の考えを持つことができ、うれしかった」と振り返り用紙に書いてあった。生徒にとって、自分の考えが持てること、それを他者と交流できること、議論をして考えが深まることは、ポジティブな感情を生起させることが示された。

(3) 歴史を学ぶ意義の獲得

歴史的分野の学習の最後に、「あなたが考える歴史を学ぶ意義は何ですか」と質問した。全ての生徒が自分なりの意義を記述することができた。一部紹介する。

- ・同じ失敗を二度と繰り返さず、良かったことをこれからの社会や自分の人生に生かすため。
- ・成功したこと+αを考えて、日本や世界を進化させていくため。
- ・人間の生き方を知って、自分はどうのようにして生きるのかを考えて学ぶため。

また、「歴史学習を振り返って、思ったことや考えた

ことを書きましょう」という欄には、多様な記述があった。一人一人の中に、歴史学習に対する考えや思いが醸成されたことが読み取れた(資料9)。

・辛い出来事から逃げるのではなく、受け止めて、今までつないでくれた昔の人たちはとてもすごいと思った。自分もそのような人になりたい。
 ・最初は何のために、昔のことを学んでいるのだろうと思ったことがあったけど、現代に近づいてくると、これからは生かすという目的が見えてきたような気がした。歴史を学習して、人間はどこまでも成長できる動物だと思った。
 ・現代の私たちからすれば、「あの時こうしていれば…」と思うことはいくらでもあるけれど、それは結果を知っているからで、過去に生きた人たちは、皆個々で考え方が違って、よりよい未来を目指して、それが巡り巡って、今の日本や世界の形ができたと考えると感慨深いなと思った。
 ・家でスマホをいじって、ネットに書いてあることだけ見ていてもつまらないと思った。こうやって昔のことを学校に来て知って、そのことについてどう考えるかを一人一人が発言して、その意見で自分の考えが変わって、学校に行かないとできないことだと思った。

資料9 歴史学習全体の振り返り記述

5 まとめ

今回の研究を通して、生徒の「主体的な学び」という視点で、心理学や教育学の知見をもとに、授業改善に取り組んだ。その結果、生徒の歴史学習に対する認知や感情が高まることが検証された。教師の役割は、知識や技術の伝達だけではなく、生徒の認知や感情に刺激を与え、生徒自らが知識や技術を獲得し、学びを深化できるようにすることだと再確認できた。それ故、私自身にも大きな変化が生まれ、授業準備において、「いかにわかりやすく教えるか」から「いかに生徒が学びを獲得できるか」を深く考えるようになった。

授業中に、生徒が生き生きと議論し合ったり、論理が繋がったときに晴れやかな顔になったり、他者の意見やレポートから必死に学ぼうとしている姿が目に入ると、授業者として心の底から喜びを感じる。今後も生徒と共に、教師も生徒も「主体的な学び」ができる授業を創造していきたい。

<参考文献>

- ・Joe O' Donnell 他,「トランクの中の日本」,小学館,1995
- ・溝上慎一,「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの展開」,東信堂,2014
- ・ピーター・M・センゲ,「学習する学校—子ども・教員・親・地域で未来の学びを創造する—」,英治出版,2014
- ・櫻井茂男,「自ら学ぶ意欲の心理学」,有斐閣,2009
- ・田村学,「深い学び」,東洋館出版社,2018

自ら英語でコミュニケーションを図ろうとする子どもを育てる

～ Let's have fun learning English ! ～

山形県長井市立伊佐沢小学校

校長 鈴木 義明

1 はじめに

本校は全校生徒51名、4・5年複式学級を持つ小規模校である。以前から地元伊佐沢地区の方々と一体となった伝統芸能活動や国の天然記念物にもなっている樹齢1200年の久保桜にかかわる特色ある活動を多く取り入れてきた。また、本校のある長井市では、地方に居ながらも世界を相手に活躍できる人材の育成を目指している。

平成27年度から、英語活動に係る「教育課程特例校」として研究を進めてはどうかとの打診を受けて、子どもたちが母語とは異なる言語と出会い、それを使ったコミュニケーション活動を充実させることで、異文化や言語に対する気づき、人と関わることの楽しさを育むことができると考え、校内研究の核を「英語学習」に据えて、1～2年生担任も含めて全職員で取り組むことにした。3・4年生は年間35時間、5・6年生は70時間の外国語活動を行うことにし、新たな挑戦が始まった。

2 本校が進める英語学習のあり方

(1) 学校研究主題

進んで英語に慣れ親しみ、自らコミュニケーションを図ろうとする子どもを育てる英語活動のあり方
～ Let's have fun learning English ! ～

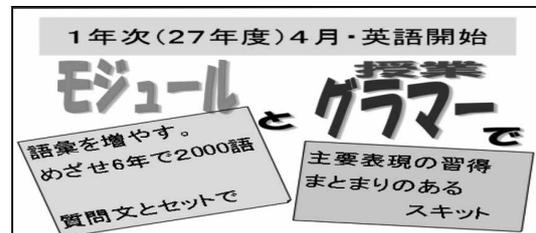
(2) 求める子ども像と研究推進の柱

- 進んで英語の音声やリズムに慣れ親しみ、簡単な表現を聞いて理解したり、簡単な表現を使って話したりする子ども
- 自国と他国の文化の違いや共通点に気づき、それらを認めながら関わりを持つ子ども
- ふるさと伊佐沢を愛する子ども

「楽しくたっぷり英語」を児童と職員の合言葉にして、まるで英語のシャワーを浴びるようにたくさんの言葉に触れ、いずれアウトプットできるようにすることが大切と考えて、次の3つの形態を柱に決めた。

【1年次・2年次の取り組み】

- ① モジュール（9分間の短時間学習）週4日の朝活動を行い、6年生まで2000語を目指す
- ② ファン・グラマー 教材に示された主要表現を聞き、使う時間（45分授業）



【3年次・4年次の取り組み】

- ③ イマージョン・アクティビティ
覚えた英語を使って、他の教科でオールイングリッシュで行う体験型活動をつけ加えた。英語を聞き、必ず話す場面を設定した。



(3) 研究の視点

- ① 児童の興味・関心を高め、持続させる教材・教具の工夫
- ② 量と質を確保した活動の工夫
- ③ 英語を通してお互いの考えや思いを伝え合う場の工夫

3 学ぶことはまず真似ることから

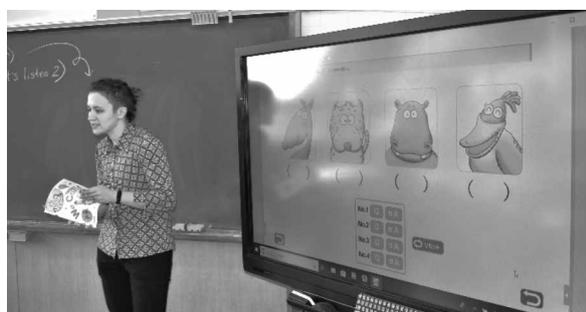
(1) 英語学習先進校の視察と共有する研修会

英語を教えるということは英語専科教員のいない小学校にとってはかなり高いハードルである。そこで特色ある英語学習を行っている立命館小学校の研究会に参加した。複数の教員で出かけた。そこで見たのは、短時間の中でスピードあふれる単語の学習であり、子どもたちの発音の素晴らしさである。

まずは、その姿を目に焼き付け、無理を言って動画も撮影させていただいた。戻ってからの校内研究会では、映像を見ながら、その授業と子どもたちの育ちを共有した。そして、スピードあふれる短時間英単語学習を真似して、朝の活動を設定することにした。モジュール学習の始まりである。

(2) ALTとの連携で授業を確かなものに

課題はもう一つあった。正しい発音とモジュールの教材作成である。不慣れで自信のない発音に不安を持っていた私たちは、アメリカ人ALTのカリーナ先生に見本を示してもらうことにした。特例校ということで中学校だけでなく本校にも週5日勤務していただけるようになった。学校の教育活動のいたるところで、自然な形で外国の言葉と文化に触れることができるようになった。モジュール学習でスピードをつけて行くには、絵カードがあれば効果的であるが、作成もALTの先生にお願いした。絵も上手で、自分で書いた絵で作成し、教材はどんどん整っていった。さらにデジタル教材化して、今では、6年生までの2000語以上のモジュール学習教材を種類・学年ごとに作成し、授業や児童の実態に合わせた英語の写し書きのオリジナル教材も作成するほどである。この協力で本校の研究は加速度的に進んでいった。



4 実践の概要～研究の視点に沿って～

【視点1】児童の興味・関心を高め、持続させる教材・教具の工夫

登場人物になりきり、犯人を探すために意欲的に英語でのやりとりを行った実践例

<6年イマージョン・アクティビティーの授業>

- (1) 題材名 Let's play "CONAN Mystery Game" ～『コナンミステリーゲーム』をしよう～
- (2) 活動の内容
児童がテレビアニメキャラクターの「コナン」に

なりきり、ストーリー中の犯人を推理するゲームである。児童は犯人の手がかりとなるものを知るために、英語で質問を行った。ケース1の場面ではALTに質問し、ケース2では児童の中の1人を秘密で犯人に設定して児童同士で質問と応答のやりとりをさせた。そして、授業中でのコミュニケーションのステップアップをねらった。

(3) 主な成果と課題

- 話す必要感に繋がるような授業の仕組みだった。
- パターンを変え、ケース1で子どもとALTの会話、2では子どもと子どものやり取りが効果的であった。繰り返すことで、発話も増えていった。



- 必ず一つの文型を使って尋ねなければならないという固定的なものでなくいろいろな尋ね方ができた。子どもは柔軟な発想で安心感を持って問いかけることができた。子どもたちの英語を聞き取る力が育っており、ALTの発する「Classroom English」をよく聞き取っていた。

【視点2】量と質を確保した活動の工夫

友達との質問を繰り返すことで、英語での会話の量を確保し、自然なアウトプットができるようになることを狙った実践例

<3年 ファン・グラマーの授業>

- (1) 単元名 What ~ do you like ?
～なりきり クイズをしよう～
- (2) 活動の内容

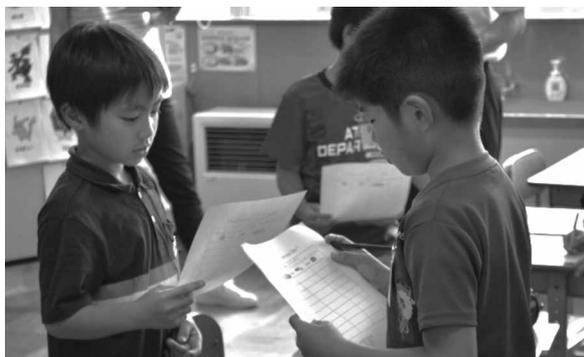
「What ~ do you like?」を使ってインタビューし、友達の情報たくさん集め、プリントに記録し、その後、プリントをクラス全員で交換し、受け取った友達になりきる。そして、お互いに質問し合い、友達が誰のプリントを持っているか当てるゲームをすることで「What ~ do you like?」を何度も活用した。

(3) 主な成果と課題

- 子ども同士のインタビューでは、回数を重ねることで自然に声を発することができていた。

『What ~ do you like ?』の言い回しの必要感や利便性がよく表れた内容になっていた。

- 教科書を使ったことが、動から静へのメリハリをつけるうえでも効果的だった。



短時間で毎日英語に触れさせることで語彙を増やすことを狙った実践例

<全学年 朝のモジュール>

(1) 活動の内容

フラッシュカードやALT自作のプレゼンテーション資料で、テンポよく繰り返し英単語を言わせ、自然に身に付くようにさせる。

(2) 主な成果と課題

- 短時間でも、テンポよくスピード感をもって発音させ、多くの単語に触れることができる。
- 身に付けた英単語が、45分の授業の中でスムーズに出てくるようになってきた。モジュールと授業がリンクしている。
- テンポよく言わせることに教師も慣れることが必要である。お互いにモジュールを見合いながら、教師の技能向上も図っていくことが今後の課題である。



学年を越えて活動することで、より良い英会話の仕方を学ぶ実践例

<全学年 全校モジュール>

(1) 活動の内容

テンポよくモジュールの活動を行っている教員が全校生に行うことで、より良い発音の仕方や英語での受け答え、そしてスピードを学年を越えて学び合う。

(2) 主な成果

- 自信を持って声を出したり、テンポよく発音したりしてどの学年も刺激を受けることができた。



【視点3】英語を通してお互いの考えや思いを伝え合う場の工夫

今まで学んだ英語を使って授業を行い、自然な形でお互いの考えや思いを伝え合う実践例

<全学年 オールイングリッシュデー>

(1) 活動の内容

市内8校から8名のALTが本校に来てもらい、全学年の全ての授業をALTがメインとなって、図工や家庭科、理科等の授業を行うイマージョン・アクティビティを全学年が午前中かけて行う。ALTは全て英語で授業を進めていくが、優しい英語や身振り手振りで児童に教えていくようにした。

(2) 主な成果と反省

たつぷりと英語に浸り、児童は楽しく活動することができた。分からない英単語があっても繰り返し耳にすることで理解し、授業の終盤には英語の指示で行動



することができるようになった。1・2年生はジェスチャーを参考に、わかる単語を聞き取りながら動いていた。また、決まった返答はできるようになったが、突然の質問等に、臨機応変に答えることにはまだ課題が見られる。

<桜っ子ガイド in English >

地域の宝でもある久保桜の案内と紹介を行う「桜っ子ガイド」は観光客から大好評だ。学んだ英語を何とか多くの方々に話してもらいたいと、「桜っ子ガイド in English」を提案した。児童からは「日本人しかいない。外国の人たちがいたら英語で話しますよ。」まさに、必要感が求められた。「じゃあ、連れてきましょう。」早速ALT全員の協力をとりつけ、アメリカ人の保護者も招くことにした。「Hello! Do you like our kubozakura?」「It is an Edohiganzakura tree. It is 16meters tall and 9meters wide.」等と子どもたちは英語で説明を行った。当日集まっていたALTの皆さん、観光客の皆さんにも大好評であった。子ども達も「何回も繰り返すうちにだんだん楽しくなってきた。」「英語も大きな声で言えた。」と大きな自信をつけたようだ。



5 児童・職員・保護者も成果を実感

(1) アンケートの結果から

【学校評価アンケートの結果から】

数字は%、「そう思う」と「ややそう思う」の合計

質問項目	児童		職員		保護者	
	H30	R1	H30	R1	H30	R1
学校は楽しい	92	96	100	100	100	100
授業は楽しい	98	100	100	100	97	98
英語は楽しい	94	98	100	100	87	90

【全国学力・学習状況調査 児童質問紙から】

質問項目 (現6年生回答)	児童
外国のひとと友達になったり、外国のことをもっと知ったりしてみたいと思いますか	自校 91.7(75.0) 山形 67.5(37.3) 全国 68.6(39.2)

日本やあなたが住んでいる地域のことについて、外国の人にもっと知ってもらいたいか	自校 83.4(66.7) 山形 80.1(50.5) 全国 76.1(46.7)
---	---

※()内数字は よく当てはまるの回答

子どもたちは英語を楽しんでおり、保護者にも伝わっていることがわかる。外国に向けて関心が高まり、自慢の地域を発信したい心が醸成されていると感じられる。東京五輪・パラリンピックに向けて、外国の選手と児童の交流が予定されており、楽しく英語で交流する姿が今から楽しみである。

(2) 「環境は人を育てる」を実感する

ほぼ毎朝、モジュールで英語を教えると子ども達はどんどん多くの単語(言葉)を身に付けていく。特に1年生の発音は見事である。「バナーナ、アポー、キューカンバー」アクセントも正確で、耳で聞いた音をそのまま発音していく。

今年から赴任した職員も英語は毎朝やるものだと覚悟が決まると、最初は教材を使ってその通りに行っていたものが、自分からどんどん発音していき、最近はわかりやすく何か工夫をしてみようと指導方法も変わっていった。毎朝のように行う9分×100回のモジュールの効果は絶大で、子どもだけでなく、職員の英語の力をも確実に向上させていった。まさに「環境は人を育てる」を実感している。

6 おわりに

こんなに笑った校内研究は初めてというぐらい事前研究会は楽しいものだった。誰もやっていない教材・授業の創造は、子どもの学びの姿、笑顔を想像しながらの話し合いとなり、アイデアが飛び交い、「ああでもない、こうでもない」「それは面白いかも」と盛り上がった。私たちの土台となる考えは「誰もやっていないことに挑戦するってドキドキする。」「間違えても大丈夫。」ということだ。先生が間違う、先生も間違う、先生の方が間違うことで子ども達も思い切って活動できると確信しているからだった。教員の本務である教材研究を楽しむ姿がいつも見られるようになったことも大きな収穫である。

これまで教材開発などの新たな道を切り開いてきた。今後は誰でも通れるように道幅を広げ、転ばず歩けるように路面を固めること、つまり誰でもできる方法に一般化することにも取り組んでいきたい。

働きがいのある職場環境づくりを目指して

～「時間」「人」「環境」に着目した組織的な働き方改革～

群馬県富岡市立富岡小学校

校長 吉田 悟

I はじめに

本校では平成 29 年度より学校経営の基本方針を「最高の学校を目指す」とし、教育活動に取り組んできている。「最高の学校」とは、児童にとっては学びのある楽しい学校、保護者にとっては子どもを安心して通わせることのできる学校、地域・関係機関にとっては応援したくなる学校、そして、教職員にとっては働きがいのある学校であると考えている。それは他との比較ではなく、年度末に振り返ったとき「最高の一年だった」と思えるような学校経営を行うことである。

また、「教育は人なり」と言われるように教職員は子どもたちにとって最大の環境である。教育の充実のために職員が常に自信をもち、はつらつとして子どもたちの前に立てるようにすることは、学校の大きな使命であると考えている。

しかし、平成 28 年度の平均最終退庁時刻は 22:16 であり、100 時間以上の時間外勤務が行われていたと推計される。また、子どもたちのためなら労をいとわず働いてしまう教職員の特性から、疲労が蓄積している職員も見られた。さらに、本校は大規模校から中規模校への転換期を迎えており、大規模校のシステムでは立ち行かなくなっている部分も出てきていた。

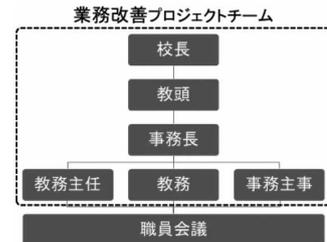
そこで、平成 29 年度から、教育の充実と職員の健康管理を目的として、働きがいのある職場環境づくりを目指して働き方改革に取り組むこととした。

II 視点を明確にした働き方改革

物事を考える際には「三問」が大切であると言われる。「時間」「空間」「人間」のことである。そこで、学校における働き方改革を推進するために、「時間」「人」「環境」という視点から現在学校で行っている業務を捉え整理することとした。そしてそれらの業務を根本的に見直し、「やめる」「減らす」「変える」「始める」という手法で業務改善を行うこととした。このことにより、働き方改革を推進し、働きがいのある職場環境づくりを目指すこととした。

III 推進組織

本校では、平成 30～令和元年度、群馬県教育委員会により、「教員が専門性を発揮できる環境の整備や学校の組織力向上」を目的として、「チーム学校」学



図：プロジェクト組織図

校事務職員特配事業により、事務職員が二人配置されることとなった。そこで、事務長を中心として「業務改善プロジェクトチーム」を立ち上げ、業務の実態把握、課題の洗い出し、原因の追究、課題改善策の立案、実践により持続可能なシステムづくりに取り組むこととした。

IV 具体的な取組

1 「時間」に関する取組

やめる	職員朝会の廃止
変える	出退勤時刻の設定 会議の効率化 校時表の変更 登下校時刻の変更 校内研修の焦点化
始める	期末事務処理日 クリーンタイム クリーンタイムα（定時退勤日） 出張出発時刻の明記 勤務時間の記録 時間外勤務の見える化

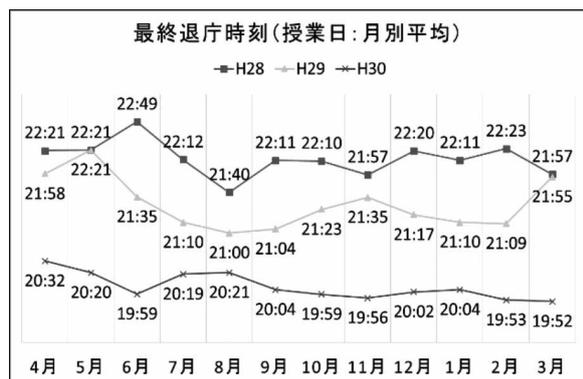
(1) 出退勤時刻の設定

本校の勤務時間は 8:15～16:45 であるが、6:00 以前に出勤したり、22:00 以後に退庁したりする職員が見られ、中には出勤後ランニングをしたり、夕食を食べてから業務をしたりしている職員もいた。

そこで、在校時間に対する意識を変えるために、出勤時刻は 7:00 以降、退勤時刻は 19:00 までを目標とした。

これを「7to7の原則」と呼んでいる。しかし、いきなり目標を達成することは難しいと判断し、やむを得ない場合のみ前後1時間までの延長を認めるが、20:00までには全職員が退庁するようにした。

その結果、平成29年度の年間平均退庁時刻は21:29となり、平成30年度には20:05となった。職員からは、「家庭でゆっくり休め、翌日元気に子どもたちの前に立つことができるようになった。」「以前よりも気持ちに余裕が出てきた。」などの感想が聞かれた。しかし、持ち帰り仕事や週休日の出勤などの課題も見えてきた。



図：月別最終退庁時刻 (H28～H30)

(2) クリーンタイム・クリーンタイムα

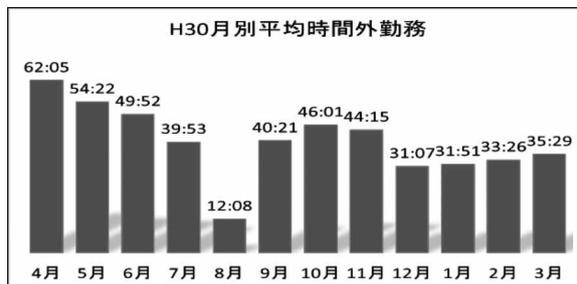
清掃の時間は週時程で定められており児童への指導に当たっているが、職員自身が職員室の机上やパソコンなどを整理整頓する時間は設定されていなかった。そこで、毎週金曜日の退勤5分前(16:40)になったら職員室内に音楽を流し、5分間自分の机上やパソコンの整理整頓を行う「クリーンタイム」を導入した。このことにより、常に整理整頓する意識が高まるとともに、翌週の業務を気持ちよく行うことができるようになった。

また、月に1回「クリーンタイムα」として定時退勤日を実施した。「そんなのは無理だ。」という意見もあったが、「絵に描いた餅にならないためにも、クリーンタイムαが楽しみになるように、見直しをもって業務を行う」ことを目標とした。初めのうちは「家に帰ってもやるのがなかった。」といていた職員もいたが、徐々に趣味や余暇として有効に活用できるようになってきている。今では、クリーンタイム終了後、17:00までには全職員が退庁できるようになった。

(3) 勤務時間の見える化

平成30年度から、パソコンによる勤務時間記録が行われるようになった。その結果をグラフ化し、毎月

職員で情報共有した。学年別や個人別、月別の平均時間外勤務、平均退庁時刻などを見る化したことで、自分たちの勤務実態を客観的に把握することができ、成果を実感し、勤務時間への意識が大きく変化した。



図：月別平均時間外勤務 (H30)

2 「人」に関する取組

やめる	PTA学年委員会の廃止
減らす	校務分掌の整理統合
変える	教科担当制の充実
始める	学校支援ボランティア(とみさぼ) ローテーション給食 ローテーション道徳 SSSの活用

(1) 学年委員会の廃止

PTA学年委員の選出は、紙上投票を基に担任が電話連絡をして依頼しており、忙しい年度始めの負担となっていた。そこで、PTA会長と協議した上で学年委員会そのものを廃止し、学校支援ボランティアを募集し対応することとした。このことは、特に異動したばかりの職員にとって、大きな負担の軽減となった。

(2) 教科担当制の充実

以前より音楽については専科教員が配置されていたが、それ以外の教科については学級担任が指導していた。学力向上特別加配教員2名を活用し、平成29年度は3年生以上の理科と音楽を教科担当制とした。また、平成30年度からはそれに加えて5・6年生の社会も専科とするとともに、3学級編制の強みを生かして5・6年生において3人の担任がそれぞれ国語、算数、図工、家庭、外国語活動を分担して担当し、8教科での教科担当制を実施することができた。このことにより、職員からは「教科が絞られることで、同じ時間でより深い教材研究が行えるようになった。」「同じ授業を3回行えるので、効率である。」「同じ基準で評価を行うことができる。」「学年全体の児童と関わることができ、積極的な生徒指導につながっている。」等の感想が寄せられている。また、児童にとっては、より専門的な授業を受けること

ができ、学力向上にもつながっている。児童からは「いろいろな先生に教えてもらえる。」「中学生になったみたいで嬉しい。」と好評である。

(3) ローテーション給食

平成30年度の3学期から、担任外の職員が学級担任に代わって各学級で給食を食べながら給食指導に当たる「ローテーション給食」を導入した。毎週、火・水・木曜日の3日間、1学年ずつ実施し、1週間で3学年を、2週間で6学年を一度ずつ実施できるようにした。



写真：ローテーション給食（学年会の様子）

このことにより、同学年の学級担任が一同に職員室等で打合せをしながら給食を食べることができ、学年の打合せ時間の縮減につながっている。また、担任外の職員が給食指導に当たることで、本校の「給食スタンダード」の共通理解を図り、給食指導のスキルアップを図ることができている。さらに、児童にとっては、担任以外の先生と給食を共にすることで、多くの先生方とふれあう機会となっている。



写真：ローテーション給食（学級の様子）

実施に当たっては、担任と担任外との間で、食物アレルギーを有する児童に対しての情報共有を確実にを行うことを徹底している。特に、アレルギー対応食の児童については教室で担任と担任外と一緒に確認し、教室に指導者が不在となる時間を作らないよう留意している。

(4) SSSの活用

平成30年5月から、スクールサポートスタッフ（SSS）が配置され、学級事務や主任業務を代行してもらえるようになった。この時期、業務量はあまり減らないのに退庁時刻が定められてジレンマに陥っていた職員にとっては、まさに「渡りに船」であった。

SSSの業務は、次のとおりである。

- ・授業で使用する教材等の印刷や物品の準備
- ・統計情報や校務支援システム等のデータ入力
- ・名簿の作成補助
- ・家庭への配付文書(学年だより・週予定等)の印刷
- ・各種配布物の各学級への仕分け作業
- ・各種個人記録カード・教材等への氏名記入押印
- ・集金袋の内容・金額の記入、会計簿の入力
- ・会議・研修等資料の印刷製本
- ・掲示物の掲示・取り外し 等

SSSは様々な取組の中で、最も効果が大きかったと思われる。職員は、自分の業務に見通しをもって依頼できるようになり、今では本校にとってなくてはならない存在となっている。

3 「環境」に関する取組

やめる	学級だよりの廃止 保護者のプール監視廃止
減らす	指導案の簡略化 長期休業中の会議縮減 夏季休業中のプール実施の縮減 地域関係者への学校だよりの配布縮減
変える	休暇簿の個人ファイル化 印刷室の棚の整理 文書サーバの整理 学年会計処理のシステム化 週案の改善 職員室の環境整備 整理整頓の励行 文書管理の徹底 FAXのデジタル化 校内研修紀要のデジタル化
始める	学年会実施場所の提示 電話連絡ボードの設置 学習の仕方・給食・清掃スタンダード化 学校預かり金マニュアル化・口座振替業者支払いFAX振込化

(1) 職員室の環境整備・整理整頓の励行

まず、職員室の机上にはノートパソコン以外は置かないことを原則とし、作業スペースの確保と互いに顔が見える環境づくりを



写真：職員室の机上

行った。また、ロッカーや棚の中で不要な物を整理し、

必要な物の整頓を行い、新たに物を置くことのできるスペースを確保した。さらに、職員の動線を考え、机や書棚、プリンタなどの配置替えを行うとともに、電源コードやLANケーブルなどについて使用していな



写真：職員室の後方棚

いものは撤去し、見通しの良い環境づくりを行った。このことにより、必要なものだけを残し、いつでも誰でも使いやすい環境を整えようとする意識が高まった。また、お互いの顔を見ながらコミュニケーションが取れることで、よりよい人間関係の構築につながっている。

(2) 学校預かり金のシステム化

学校で集金している預かり金については、金額や集め方、集計の仕方、入金・出金の方法、業者への支払い方などについて、事務職員と担任外が一手に引き受け、学級担任の負担を軽減した。また、集金日を設定し、紙幣のみで集金することで、保護者の負担も軽減している。さらに、業者への支払いについては、FAX振込を導入し、現金を扱わずに行っている。

今後は、口座振替を導入し、さらに安全性と正確性を高めていきたい。

V 取組の成果と課題

平成30年12月に、職員へ働き方改革の取組に関する意識調査を行った。その結果、40項目にも及ぶ取組の中には、全員が効果を感じたものもあるが、あまり効果を感じられなかったものもあった。効果があったものは継続・充実させ、効果がなかったものは、その原因を追及した上で、改善・廃止を検討した。

また、「それぞれの項目について、どのような効果をねらって改善していったのか、理解していなかった。」との指摘もあり、新たな取組を実施する場合には、その目的・目標・手段について明確に示していく必要があることが再認識された。

そして、何よりも大きな成果は、働き方に対する職員の意識が大きく変化したことである。「職員の意識が大きく変わった一年だったと思う。これを来年度以降も継続していくことが大事だと思う。」「自分の中でも業務改善や勤務時間などについて意識が変わった。これが今年度の中で一番大きい。」「他人事のように考えていた働き方改革が自分事として捉えることができる

ようになり、業務改善への意識が高まった。」「働き方改革を通して縦のつながりや横のつながり、チームワークの大切さを改めて実感した。」「一人では行動に移せなかったり、改善しようとしていなかったりしたことも、学校全体で取り組んだことで頑張ることができたように思う。」「チームワークがとても良く、職員が分掌に責任をもって取り組んでいる成果だと思う。」という意見にもあるように、職員全体がひとつのチームとして同じ方向を向いて実践できたことが、働きがいのある環境づくりにつながったと考える。

VI おわりに

この2年間、働きがいのある職場環境を目指して、様々な取組を行ってきたが、働き方改革を推進していくポイントは以下のとおりである。

1 大胆かつ慎重に

働き方改革は、常識にとらわれず大胆に考えることが必要である。今まで当たり前とされてきたことについて、本当に必要なのか？別の方法ではダメなのか？という視点で考え直して試みるのが大切である。一方で、その推進は慎重に行うべきである。職員全体の雰囲気や地域住民の理解を得るために、ていねいに説明しながら進めなければならない。

2 目的・目標・手段を明確に

働き方改革には特効薬はなく、小さな一つ一つの取組を積み重ねていくしかない。そのためには、取組の目的・目標・手段を明確にし、職員全体で組織的に協働していく雰囲気を作り出していくことが大切である。そして、やるからには徹底する。例外を許さない覚悟も必要である。

3 成果の実感を

何よりも、職員一人一人がその成果を実感することで、自分事として捉えていけるようにすることが大切である。また、職員からの提案を積極的に取り入れ、ボトムアップで推進していくことも重要である。

働き方改革とは、時間外勤務を縮減しながらも職員が業務にきちんと取り組める働きがいのある職場環境を整えることが目的であることを念頭に、さらに組織的に働き方改革に取り組んでいきたい。

コミュニケーション能力の育成を目指す外国語活動の実践的研究

～言語活動を軸とするカリキュラム・マネジメント（カリマネ）の取組～

富山県氷見市立宮田小学校

校長 櫻打 佳浩

1 はじめに

小学校に導入された外国語活動のねらいは、新指導要領にも引き継がれた「コミュニケーション能力の育成」にある。本校の教員は、外国語活動の授業に少なからず慣れてきてはいるが悩みや課題も多いという。外国語活動が小学校に導入された頃より、子供が「何らかの英語を発すること」に一喜一憂しスキルの習得に専心してきたと振り返っている。けれども、コミュニケーションという視点から授業を捉えたとき、課題がみえてきた。それは概ね次の3点に集約された。

＜外国語活動における実践上の課題＞

- ・ 定型文のパターン・プラクティスに終始し、実際に英語を使う柔軟な言語活動にはなっていない。 **A**
- ・ 所与の教材ありきの単元構成とALT頼みの学習に、担任の主体性が発揮されているとはいえない。 **B**
- ・ そもそもコミュニケーション能力という汎用性のある資質・能力のゴールの姿が共有されていない。 **C**

本稿は、これら3つの課題の背景と改善策を探り、子供と教師の変容を記録し授業改善に取り組んできた実践的研究の足跡である。

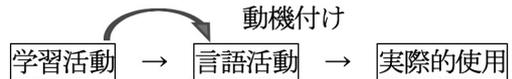
2 研究の視点

グローバル社会を生きていく子供たちに求められる外国語の力は、「異文化を背景にもつ他者を理解し互いの思いや考えを交流し、関わりや認識を深めていくコミュニケーション能力の基礎を育成すること」である。研究の始めにこのことを確認し、次の4点を視点として授業実践を行い、課題の解明に取り組むこととした。

視点1 英語を使うことの重視 ……課題 **A**
外国語活動において、子供たちにとって意味のあるやりとりと即興性を意識した言語活動を行う。

新指導要領解説において、「実際に英語を使用して行う言語活動を通して」コミュニケーション能力を育むことが明示されており、英語の知識やスキルを知る「学習活動」と「言語活動」を区別している。

浅野博は、言語活動の条件として、①学習者に主観的判断が入る、②既習の言語材料を自由に使える 2点を挙げている。(浅野『言語活動の考え方』東京書籍 1976)



練習で覚えたことをそのまま発話するのではなく、他教科や行事等で学んだ「言いたい・聞きたい」ことを伝え合う意味のあるやりとりや、即興性のあるやりとりを工夫するなかで、子供が言葉を選択し考えながら話したり聞いたりすることが、使う状況をつくり豊かな話し手を育てることになると考えた。

視点2 ストーリーの重視（バックワード・デザイン）
外国語活動において、異文化を背景にもつ他者と関わり交流するという見方・考え方を生かした単元づくりを行う。 ……課題 **A B**

地域の学習材や学校生活等、子供たちに身近なテーマを示し、ゴールで行うコミュニケーション活動の内容を理解することから単元を始める。ALTとのやりとりのなかで英語や異文化に親しみ双方向で活動することを通して内容理解を深めていくことが、外国語を使って伝え合う見方・考え方の育成に繋がると考えた。

視点3 コミュニケーション能力のスクール・スタンダードの作成 ……課題 **C**
実践を通して育むコミュニケーション能力の具体的な姿を見取り、スタンダードを作成する。

英語の知識やスキルを使ってコミュニケーションを図るときに必要なってくる資質・能力の具体を共有し、それらに照らして評価することが授業改善に繋がる。ここでは、どれだけの英語を覚えたかという英語の語彙数ではなく、コミュニケーションを進める言葉の働きに着目し、使う言葉の質についても見取り、獲得していく場の設定に取り組むこととした。

視点4 カリマネの視点による単元構想
主体的な指導者としての単元づくりや授業づくりについて、子供の姿で話し合う場をもつ。… **B C**

外国語活動主務者を中心に、放課後のミニ研修、授業研修、外部講師を招いての公開研修等を全校体制で進めた。子供や教師の実態と変容を明確にし、カリマネの視点から教科横断の取組、地域の資源活用、PDCAサイクルの確立等により、教師の指導力を付ける

べく単元構想の工夫と授業改善を図った。

3 取組の概要

(1) 視点1：英語を使う状況をつくる

生活科と外国語活動を関連付けるなど、教科横断的な実践により、「言いたい・聞きたい」ことを伝え合う豊かな言語活動を行いたいと考えた。

事例1 2年生がトンボ池で見付けたことを、簡単な英語と絵で伝え合う活動を行った。

Ex. A: I found *zarigani*. Red. Big.
B: Red. Big



生活科の学習で学校近くの「トンボ池」を探検した後、見付けたことをALTに教えるやりとりを仕組んだ。子供たちは、トンボ・ザリガニ・草花等、見付けたものを簡単な英語と絵等を用いて紹介し合った。

この言語活動が楽しかったという子供は100%
見付けたことを伝えられたという子供は100%

楽しかった要因として、「やりとりのなかで無理なく英語に親しんだこと」や「一定の自由度があるなかで交流の相手が代わり、単純な繰り返しではなく、わくわくしながら伝え合えたこと」が挙げられた。

事例2 3年生が、自分の好きな果物や動物を、色・形・数等の親しんだ英語を使ってクイズを楽しんだ。

Ex. A: What's this?
B: Hint please.
A: Hint1 (It's) yellow.
B: Yellow. OK.
A: Hint2 Monkey. B: Monkey. (It's) banana.
B: That's right.



この活動は、本校が外国語活動の時間のなかで設定している「短時間の帯学習」で行っているものである。

参観後、やりとりを活発にさせている要因として「子供たちが知っている色や形、数等の英語は身近にかなりあり使えること」「好みを尋ね合うことは、友達を知る楽しさが動機付けを高めていること」が挙げられた。

資料1【即興性をつくる帯学習】

- ・既習の英語を使って、ペアで簡単なやりとりを行う
- ・担任とALTが「今ここ」を大切にやりとりのモデルを示す
- ・本時の学習課題と繋がるやりとりの場を工夫する

ペアを代えながら自由度のあるやりとりにすることで、「考えることが楽しい」という子供がいる。

(2) 視点2：交流のストーリーをつくる

校区には、自然や歴史・文化等魅力ある教材が多くあり、これまで継続して行ってきたふるさと学習を通して、子供たちは地域への愛着を深めている。

資料2【ふるさと学習とリンクした外国語活動の設定】

- ※言葉の働きに着目し構想
- 3年：ふるさと宮田の大好き
- 4年：トンボ池の環境
- 5年：氷見・宮田の食
- 6年：氷見・宮田の福祉

そこで、このふるさと学習と外国語活動を繋げ、ALTと「ふるさと」を話題に交流する単元を構想した。

事例3 3年生は、What's this?を使い、「ふるさとの大好き」をヒントにして尋ね合うクイズを軸にして、次の単元を構想し、やりとりの場を設定した。

第1次(1時間)	第2次(1時間)	第3次(2時間)
ALTと自己紹介し合い、ALTやALTのふるさとについて知り、宮田の大好きを伝える意欲をもつ。	ALTのふるさとクイズに答えたり、クイズに挑戦したりして、もの名前を尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。	相手に伝わっていることを確認しながら、ふるさとクイズを出したり答えたりする。

次のような子供たちの振り返りの言葉から、活動への満足感が窺える。

- ・クイズのヒントを出したり答えを言ったり、考えることが楽しかった。
- ・ALTの先生が、「宮田の校区のことがよく分かった」「大好きになった」と言ってくれたので嬉しかった。

5年生は、氷見の食を味わうレストランを開き、客と店員になり食のよさを伝えるやりとりを行った。

事例4 氷見の食を味わうレストランでのやりとり
Ex. A: What would you like? (店員)

B: What's this? (客)
A: It's yellowtail. Fresh and delicious. ※おすずめポイント
B: Fresh and delicious. What's this?
A: It's *Himi* beef. Delicious
B: OK! I want yellowtail. I like yellowtail.
A: Me too. Here you are. B: Thank you.

<視点2の実践における3つの仕掛け>

- ① はじめは、ALTから同じ話題(ふるさとクイズ・ふるさとの食等)でアメリカの話を十分に聞くことで新しい言葉や音に慣れ、ふるさとや食への新たな発見や共通性を感じ異文化に関心を深めることにより、自分たちも伝えたいという動機付けを高める。
- ② やりとりを促す「コミュニケーション・ワード」(宮田版)を意図的に、タイムリーに使う場を設ける。

資料3【宮田小コミュニケーション・ワードを作成し活用】

- やりとりを促すコミュニケーション・ワード
really cool nice Me too. I see. One more time. OK.
- 心が温かくなる「ほかほかワード」
Please. Thank you. After you.
- みんなで使おう、ほめ言葉
Good! Great! Good job.

—コミュニケーション・ワード表より抜粋—

③ 交流のストーリーを大切にするという構えで、1時間の振り返りは「英語を使ったこと」に終始するのではなく、交流の内容にフォーカスし、「感想や気付き」を出し合い共有する。

このように子供たちの「知りたい」「伝えたい」という思いに寄り添い学びの文脈に合致する活動を構成することにより、リアルな交流を保証することができた。

(3) 視点3: 汎用的な資質・能力の具体を見取る

各学年の外国語活動における子供の姿から、コミュニケーションを円滑に進める資質・能力の具体的な姿の共有に努めた。コミュニケーションを図る資質・能力は一定の言葉の働きに付随して実践されることに着目し、言葉の働きと関連付けて整理を行った。

【受容する力】

これは、相手を受け入れ聞き合う関係をつくり対話を進めていく力であり、次のような姿がみられた。

受け止める 事例2・4において、OK. という言葉を使って相手の発言を受け止めている。また、子供たちは、笑顔や明るい表情、目を合わせるなどの動作も受け止める働きがあることを実感している。

感謝を伝える 事例4では、Thank you. の言葉が関係をつくり対話を円滑にしていき、笑顔がみられた。

賛同する 事例4では、Me too. という言葉等を使って賛同の意思表示をし次の対話へ繋げることができた。

【論理的な力】

これは、多様な伝え方（文化）を背景にもつ人と、確実で的確な理解を図るために、筋道立てて話したり聞いたりする力であり、次の姿がみられた。

順序を示す 事例3のクイズにおいて、Hint1、Hint2 というように順序立ててクイズを進めていた。

明確に示す 事例4では、氷見の食材を使った料理をいくつか紹介するなかで、Aは、○は fresh、□は healthy、△は delicious といった氷見の食の特徴(よさ)を明確にして伝えた。Bは、それを確認し参考にして、注文する料理を決定した。

【方略的な力】

これは、対話の内容を確かめる、先に促すなど、対話を円滑に続けていく力であり、次のような子供の姿がみられた。

確かめる 事例1・2において、Bは、Aの発言の中のキーワードを繰り返すことで内容を確認している。また、OK. や One more time. の言葉を使って了解や要望を伝え相手の発言を促している。

問い返す 事例3・4において、What を使って尋ねたり Hint please. と返したりしながら、目的にそった会話を進めている。

反応する 事例2・4において、That's right. と Me too. の言葉を繋げ、相手の発言に対応している。

このように、言葉の働きを意識して会話を繋げる方略的な力は、コミュニケーションを深めていく重要な

資質・能力である。

いくつかの単元を実践した後、コミュニケーション能力の要素としてどのような力が確認されているか、教師アンケートを基にスタンダードの整理を試みた。

積極性	伝える力	聞く力	受容する力	方略的な力
自ら進んで話す ジェスチャー等の方法を工夫して話す 繰り返し話す 目的を意識する 自分とは異なる意見の人とも話す	はきはきと話す 資料等を根拠に話す 伝える内容がある場に応じた伝え方を工夫する	感想を伝える 質問を出す 比べて聞く リピートして確認する 大まかな意図を想像し把握して聞く	うなづく 笑顔で聞く 感謝を伝える 聞き取ったことを声に出し確認する 身振りで反応する 受け止める 違う考えも認める	確かめる あいづちをうつなど反応する 問い返し繋ぐ 意図を探り、いろいろな方法で伝える 交渉しながらやり取りを続ける
多様性の尊重	協力する力	情報収集力	論理的な力	相手意識
自己を理解する 他者を尊重する 文化の違いを理解し認める 伝え方の違いを認める 他者のよさに目を向ける	教え合う 助け合う 友達に繋げて話す 自分ならと考えて続ける 会話を楽しむ	目的を理解する 情報を集める 伝えたいことを選択する ICTを活用して話す	最後まではっきりと話す 順序立てて話す 構成を考えて話す 目的に応じた考えを話す 根拠や理由を伝える	相手を見て話す 相手が分かる表現で伝える 相手の話を最後まで聞く 相手の考えを理解する

表1 コミュニケーション能力のスタンダード (宮田小試案)

これは、実践途上のものではあるが、教員の意識は外国語活動を通した汎用的な資質・能力の育成へと向けられていることが分かる。

(4) 視点4: カリマネの視点を生かした研修

実践を重ねることで、教員は指導に関する経験知をもつようになってきたが、コミュニケーション能力を育成することへの手立ては十分とはいえなかった。そこで、**P**どんな力を付けるか(視点3) **D**そのためにどんなやりとりを構想するか(視点1・2) **C**どんな力が付いたか(視点3) **A**子供の実態や他教科との関連多様な資源の活用等からカリキュラムをどう改善するか(視点4)を検討・整理し、PDCAサイクルを意識して取り組むこととした。

① 授業VTRを見て行うリフレクション

授業者の単元構想の意図を聞きながら、子供の事実を振り返った。子供の表情や言葉から、やりとりを主体的・内発的に進める要因を具体的に挙げていった。



写真：事後研修(6年生)

② 悩みや実践を持ち寄り、協議を進めるミニ研修

外国語活動主務者が企画し、授業者が挙げるテーマや課題をPDCAサイクルに位置付け、検討を重ねた。

回	日時	提案者	参加者	内容
1	4月13日	6名	12名	・宮田小 コミュニケーションワード ・ALT(ポイド)タイムの内容の紹介 ・コミュニケーション授業をすすめるとは ・4年生外国語単元計画の構想
2	4月20日	4名	11名	・4年生の授業の設定と取り上げ方 ・外国語活動にも「学習課題」がある
3	5月11日	5名	12名	・5年生外国語単元学習の構想・1時間の授業の流れと進め方 ・バグワードデザインによる単元構想「自校化プラン」
4	5月25日	3名	13名	・授業における「聞く」との大切さ・活動の切り替への仕方 ・3年・5年の自校化プラン作成の題材について
5	6月15日	5名	14名	・7月実施の単元「クリスマス会しよう」についての提案と検討 ・バグワードデザインとゴールの設定について

6	6月22日	3年	13名	・「やどり」の力を育てる ・1時間のレッスンプランの提案と検討 ・毎時間の課題の提示の仕方
7	6月29日	6年	13名	・グループでの活動について ・教科書(素材)を、どのような理念で扱うか
8	7月6日	4年	13名	・レッスン4!アルファベットを単元構想 ・書くことの抵抗を減らす・コミュニケーション能力を構成する
9	7月13日	3年	13名	・公開授業に向けて、指導案と自校化プランの題材の検討
10	7月20日	3年 上 学年 部会	5名	・子供たちのコミュニケーション力を高めることのできるかという視点で、活動や流れの提案
11	10月19日	3年	12名	・課題提示のタイミングについて・ALTとの打ち合わせの仕方 ・担任とALTの指導の分担について
12	11月9日	4年 6年	14名	・外国語に対する苦手意識をもつ子供への配慮 ・映像資料の内容を取り取ることに困難な場合の指導について ・水貝市で制作した副教材「We love Himeji」の紹介
13	11月16日	1年	12名	・低学年における外国語活動について ・単独のやり取りによるコミュニケーション
14	11月30日	5年	12名	・「発表」や「やり取り」について ・リアクションワードについて
15	12月7日	3年	12名	・外国語活動における「振り返り」について (課題に対し、子供の何を見るか、どうするか)

表2 外国語活動 ミニ研修の記録

③ 教材を活用するカリキュラム・マネジメント

学校が目指す教育目標実現のため、文科省配信の教材をどのように生かしていくか自校化プラン作成に伴うカリマネを検討し、日々の実践に繋げた。

教科書(素材)をどのような理念で扱うか
— 外国語活動のカリキュラム・マネジメント —

☑ 何ができるようになるか: 自立と共生(自ら考え粘り強く考える、他者を尊重し共に学ぶ)
学力の3観点①コミュニケーションの素地となる知識・技能…教科書中心(学習活動)
②思考力・判断力・表現力…知識・技能をどう使うか
③学びに向かう力…コミュニケーションへの積極性
※教科書では、②と③はなかなか付けられない!! → 言語活動(リアルなやり取り)が重要

☑ 言葉の働きに対する見方・考え方を働かせる…「コミュニケーションワード」参考、語彙の質
<<バックワードデザインによる単元づくり>> ※ストーリーの重視
(どんなコミュニケーション活動をゴールに設定するかを決める)
1時、ゴールを示す 1時は、聞いて知る活動を中心に行う……教科書土口
2時から3時 対話を核とするゲームややり取り……教科書土口
4時 コミュニケーション活動(子供に既習言語からの選択がある主体的なやり取り)
<<1時間の学習過程>> ※使うことの重視(意味のあるやり取り・即興性)

学習活動(時間)	内容	留意点
Greeting 3	挨拶、QA	ルーティンにならない
Pair work 7	やり取りの図を見て必ず発話(英語、日本語) リアクションワードでつなぐ 考えて、使う	3・4年生 2~4往復 5・6年生 2~5往復 ・どきどき・わくわく(主体性のある話題)・即興性
Chants song 5	リズムに頼りしむ	クリアボイス
Activity 25	教科書 + 口 やり取りをする ALTと担任 ALTと子供 ペア、グループ等 伝わっていることを確かめる	教科書をとりかきりとして、子供のリアルなやり取りを構想 中間評価を入れて目当てを確認する 場の設定・具体物・画像・カード・ワークショップ等の活用
Share 5	課題について振り返る 言葉や内容についての 気付きを大切にする	ALTから 子供から 担任から

※ 教科書のアクティビティはすべて扱う必要はない
(教科書「所与の内容」で指導するのではなく、教科書を使って指導する)
※ 教科書を実態に合わせて加工する、自校化をマネジメントする

☑ コミュニケーション活動における「自立と共生」の評価 ※外国語活動における見方・考え方
・伝える内容をもっている、決めている・伝え方を工夫している・聞き方を工夫している
・やり取りを通して理解を深めている・論理的に伝えている・分かりやすく伝えている
・相手の理解を確認し、相手の考えを尊重しながら、共に理解を深めている・楽しんでる
※ 気付きを話し合い、自他の成長(成果と課題)を明確にし、改善する。

☑ 課題に対する改善策を具体化する
・よくなっている点に気付かせる(担任・ALT・友達の見方)
・受動的な学級づくり・積極性の具体を積み重ね、使いながら伸ばしていく

表3 教材を活用したカリキュラム・マネジメント

④ 外部講師を招聘し公開研修会を開催(9月20日)

文部科学省国立教育政策研究所名誉所員の渡邊寛治先生を招聘し公開研修会を行った。先生からは、提案授業を通して、外国語活動・外国語のねらいとカリマネの推進について講話をいただき、研修を深めた。

多様性の尊重、論理的な表現力等の育成において、子供が言語活動の内容に集中していること(交流のストーリー)が大切であることを改めて確認した。

4 成果と課題

(1) 成果

<子供> 考えて話す子供の育ちがみられた。

- ・教科横断的に学んだ知識を外国語活動に取り入れたことによって、「覚えたことをそのまま話す」ことから、言葉を自分で選び「考えて話す」意味のあるやり取りを行う子供が出てきた。(視点1)
- ・地域の魅力ある資源を題材にしたことで、主体的なやり取りが生まれ「自分・ふるさとへの気付き」「友達・ALT・異文化への理解」が深まった。(視点2)
- ・「うまく伝えられた」と発信の喜びを口にするなど、相手を意識した伝え方に関心が高まった。(視点3)
- ・リアクション・ワードやジェスチャー等の多様な表現を交え、場に応じた言葉の働きと組み合わせるやり取りを楽しむ子供が増えている。(視点3)

<教師> 外国語指導への意識が変わった。-アンケートより-

【1時間の指導において】

- ・「ゴールのやり取りの姿」から単元を構想する。
- ・子供の実態から、今、伝えたい話題を考える。
- ・生活や教科・総合等身近な話題との関連を図る。
- ・付きたい力(ねらい)は何かと具体的に考える。
- ・ALTとの打ち合わせから、持ち味を指導に生かす。
- ・異文化に触れることで、考える活動を意識する。
- ・知識よりも、伝え方を大切にする。
- ・自分がT1として授業を進める意識が強くなった。
- ・教師自らコミュニケーションを図るようになった。
- ・やり取りの場の雰囲気や言葉の働きを大切にする。
- ・課題について話し合い、理解して始める。
- ・どんな力が付いてほしいか考えるようになった。
- ・学習課題を提示し振り返りの視点を示す。

- ・外国語活動に主体的に取り組むようになった。
- ・外国語を「使う」ことへ意識がシフトし、コミュニケーション能力の宮田スタンダードを生かすことができた。(視点3・4)

(2) 課題

- ・コミュニケーション能力の宮田スタンダードを生かし、教科化のなかにおいても、英語を使って豊かな話し手を育てる実践の継続・改善に努めたい。

5 おわりに

今年4年目になる教師から、「外国語活動の研修に向き合う貴重な経験ができた」という言葉を聞いた。これから教科となって本格的に始まる外国語の学習においても、コミュニケーション能力の育成を理念として子供たちに関わってくれるだろう。

教師にとって日々の経験が何より指導力の向上に繋がると考えたとき、自分の思いを軸に自力で単元をつくること(カリマネ)の意味を学ぶことができたことに、本研究の意義を感じる。

「まず安心 わかった・できたを どの子にも」 生徒一人ひとりを大切にする学校づくり

～少人数指導学級・個別指導学級の設置を通して～

岩手県盛岡市立河南中学校

校長 岩崎 雅司

【学校の概況】

盛岡市立河南中学校は、盛岡市の中心部よりやや東よりに位置する生徒数424名 普通学級12（各学年1～4組）、特別支援学級2（知・情）の創立66年目を迎える中規模校である。学区は、名刹や史跡の多い大慈寺小学校区、新興住宅地として発展した中野小学校区、清閑な佇まいの旧川目小学校区からなる。

かつては、生徒指導に苦慮した時代もあったが、ここ数年は落ち着いた状況で、授業をはじめとして、生徒会活動・部活動に熱心に取り組み成果をあげている。

【主題設定の理由】

全国的に生徒数が減少を続けているにも関わらず、不登校生徒数は増加の一途を辿っている。また、生徒が自らの命を絶ってしまったという残念な報道も後を絶たない。経済格差の広がりや家庭環境の格差を生み、虐待事案も増加している。加えて、自閉症スペクトラム、学習障がい、ADHD、小児うつ、ネット依存症等で医療機関の支援を受ける生徒も増加している。生徒間のちょっとした行き違いから、いじめに発展することはいつでもどこでも起こり得る。大多数の生徒が、学習や諸活動に打ち込み、明るく充実感一杯に中学校生活を送っている一方で、心に様々な悩みを抱え、苦しんでいる生徒が少なからずいるというのが昨今の多くの中学校の状況ではないだろうか。本校も同様である。学校全体の教育活動を推進し、受容的な学級・学年づくりを進めながら、様々な事情を抱える個々の生徒には個別の対応が求められる。

そのために、校長として、どのような組織体制とし、限られた人材をどのように配置するのか、職員の意識をどう高めていくのか、マネジメントが求められる。以上のことから、校長として悩みながら取り組んできたことについて整理したものが本研究である。

【研究主題】

「まず安心 わかった・できたを どの子にも」

生徒一人ひとりを大切にする学校づくり

～少人数指導学級・個別指導学級の設置を通して～

【研究概要 ～構想から実践へ～】

◎赴任してすぐに直面した課題

現任校に校長として赴任して3年目、本年度末で定年退職を迎える。着任1年目「主題設定の理由」でも述べたように、新入生を中心として不適応傾向の生徒の対応に苦慮した。夜、保護者に車で送られて登校し、玄関で担任と会って帰宅する生徒。玄関で泣きじゃくったまま校内に入れない生徒。リストカットを繰り返す生徒…本人の苦しみはもちろんであるが、保護者の動揺や焦りも相当なものがあった。学習の遅れや、将来の進路に対する不安が再び生徒の上ののしかかり、「死にたい」と訴える生徒もあった。では、校内がいじめ等で殺伐としているかということ、多くの生徒は明るく和やかに諸活動に取り組んでいる。学校は、学級担任・学年主任・養護教諭、生徒指導主事・スクールカウンセラーを中心に関係機関との連携も図りながら誠心誠意、精一杯対応していた。しかし、授業や諸活動の指導に追われながらの対応では、十分とは言えなかった。学級担任は1日平均4時間もの授業も持っており、空き時間は生活記録ノートや家庭学習の点検、授業や諸行事の準備に追われている。遅れてきたり、早退したり、その日によって状況が大きく異なり、慎重で柔軟な対応が求められる不適応の生徒に十分に対応することには不届きと限界がある。また、市から配置されている不登校支援員の非常勤講師やスクールアシスタントは見守りや支援的な関わりが中心である。

◎ある著書との出会い

そんな折、『クリエイティブな校長になろうー新学習指導要領を実現する校長のマネジメント』平川理恵（現広島県教育長）著（教育開発研究所）で、教室に入れない生徒が学習できる学級を作り、担任を配置して学習指導を行っている実践を知った。不適応生徒に学習指導も含めてしっかりと対応する校内体制を作ることではできないかと思案する日が続き、年度末を迎えた。

◎偶然から、一歩踏み出す決断に

2年目、引き続き不適応生徒への対応を進めた。夜に母親が生徒を学校に連れてきて出席としているケー

スもあった。担任は、登校を待ってその都度30～40分も対応しており、教育愛と使命感に頭が下がった。

このままでは生徒にとっても、職員にとってもプラスにならない、思い切った手立てを打たなければならないという気持ちは確信になっていった。そして、これまで不適応生徒が自習しながら過ごしていた「別室」を少人数で学習する学級「少人数指導学級」とし、学級担任を配置して5教科を中心にできるだけ授業をできないかと考えた。ちょうど、10月中旬に育児休暇から復職予定の教諭があったので、その教員を担任に充てられそうであった。その職員の復職にあたっては、補充講師の免許教科が異なっていたため、免許外教科担当解消のために、その補充講師を年度内は継続して配置頂けることになった。正に「渡りに船」であった。教員が1名増えるのだから、教員の持ち時数の増加はない。また、翌年度、講師の任期が切れた後は、県で実施する35人学級による1学級増を「柔軟な学級編成」として、少人数指導に充てていた教員の1名増分を充てることで継続できると考えた。教室で授業を受けることができない生徒が「少人数指導学級」で教科担任から授業を受けられるのだから、少人数指導の一つの形であり、学力保障・学力向上にもつながる。

更に、その「少人数指導学級」にも適応が難しいと思われる生徒がいた。また、突発的に不安定な生徒も現れ得るが、デリケートな生徒が過ごす「少人数指導学級」で受け入れることの影響も心配される。そこで、一人きりで学習する「個別指導学級」を同時に設置しようと考えた。英語・数学免許を持つ不登校支援員が1日1時間程度、個別で指導にあたることとした。

また、学級の名称は、自然で違和感がない方が良くと考え、「5組」「6組」とした。通常学級が各学年1組～4組となっており、それに続く番号で自然である。因みに、本校では特別支援学級の知的障がい学級を「A組」、情緒障がい学級を「B組」としている。特別な印象を与えない、中学校らしい名称だと思う。「5組」「6組」もそれに沿った形である。必要なら「7組」「8組」も作ることも考えたが、今のところその必要はない。

◎教職員のコンセンサスを得る

夏休み中の研修会で時間を確保し、この構想について職員に説明した。平川理恵先生の著書からも引用させて頂きながら説明を行った。何よりも趣旨について丁寧に説明したつもりである。職員の反応は、強い賛同意見も、反対意見もなかったが、どちらかと言うと

何とも言い難いといった反応であった。質疑では次のような意見が出された。

ア 多くの生徒が少人数指導学級に行きたがってしまうのではないかと。そして居心地が良すぎて教室に戻ろうとしなくなるのではないかと。

イ「評価」はどうなるのか。

ウ そもそもこんなことが学校の判断でできるのか。

アについては、平川理恵氏も著書の中で述べておられるが、しっかり学習するのでそんなことにはならない。イは、教科免許を持つ教員が指導し評価するのだから可能である。定期テストはできるだけ受けさせる。授業を受けていない実技教科の場合は難しいが、できる範囲で評価に努める義務もある。ウは、そもそも「別室」で自習していた生徒に学習指導を行い、学力を保障しながら、不適応の解消に取り組むものであるのだから可能だと回答した。その上で、「構想の段階なので時間をかけながら詳細を詰めていきたい。」と答えた。

◎協働的に学級開設に向けて準備

2学期がスタートすると、学級開設に向け具体的な準備に入っていった。まず、この構想について、市教育委員会に説明し、担当課長から了解を得た。同時に、9月の運営委員会と職員会議で改めて詳細な提案を行った。疑問や不安もあるようだったが、「初めてのことで、まずはやってみよう。やりながら改善しよう。もしもダメなら止めても良い。」と話した。大きな異論は出ず、いくつかの賛成意見も寄せられた。

次に、教室開設にあたって必要な物品の準備を進めた。中庭を挟んで廊下から教室の中が見えるため、教室の窓全てにブラインドを設置した。なるべく明るく暖かい雰囲気にするため、薄いピンク色とした。少ない人数であっても、人間関係を築くことが難しい生徒が過ごす「5組」、一人の空間確保が必要な「6組」のために布製のパーティションを12～3枚購入した。量販店で安く購入できた。「5組」「6組」両方に、通常の生徒用の机の他に、大きなテーブルを用意し、ゆったりとした作業スペースを確保し、数名での語り合いができるようにした。また、遅刻して登校したり早退をする際に「5組」「6組」と職員室間で迅速に連絡が取れるようにワイヤレスのインターホンを設置した。職員室側のインターホンは職員室中に聞こえるよう設定した。その他に、「5組」には移動式の黒板・ホワイトボードをパーティションを兼ねて置いた。休み時間には生徒が思い思いにマンガを書く等、

コミュニケーションツールとしても活用されている。

<少人数指導学級「5組」の様子>



机が並び、窓にはブラインドがあるが十分に明るい



パーティションで区切られたスペースに広い机

<個別指導学級「6組」の様子>



パーティションで一人のスペースを確保



長机のスペースは個別指導や相談に活用

◎より「安心」を確保のために

どちらの教室にも植物を置いたり、動物のポスターを張ったりするなど、うるおいがありホッとできる雰囲気をつくるように心がけた。また、「5組」はトイレのすぐ近くにあるが、他の生徒との接触に神経を使う生徒も多いため、授業時間に入って廊下を通行する生徒がいなくなってから行かせるようにしている。

◎生徒・保護者へ周知し、理解を得る

このような学級を設置することについて、生徒や保護者への説明を慎重に行った。偏見や誤解が生じるとその後も影響を及ぼす。全校生徒に対しては、全校朝会で校長から説明を行った。すでに「別室」に通っていた該当生徒には直接丁寧に説明し、その後担任から具体的に話してもらった。該当生徒の保護者に対してはA4判両面刷りでパンフレットを作成し、担任から説明した。保護者全体には、学校便りで概要を紹介する程度にとどめた。設置に至る経緯や趣旨を理解頂くためには、紙面だけでは難しいと考えたためである。

◎キャッチフレーズ「まず安心…」をつくる

学級設置の願いを短い言葉で端的に伝えるために、キャッチフレーズを考えた。

「まず安心 わかった・できたを どの子にも」

学校がどの生徒にとっても、「まず安心」できる場であること。そして、「わかった・できた」と自分の成長を実感できる場であること。安心と成長のために生徒一人ひとりを大切にする学校。そんな願いをこの言葉に込めた。職員玄関や「5組」「6組」の教室に掲示して、職員や生徒が日常的に意識するようにした。

こうして平成30年10月中旬、少人数指導学級「5組」／個別指導学級「6組」がスタートを切った。

<時間割(例)>

☆少人数指導学級「5組」の週時間割

国語4＋社会2＋数学4＋理科2＋英語3＋美術1＋家庭1＝計週17時間 担任による体育を適宜実施

	月	火	水	木	金
1校時	自習	自習	自習	自習	自習
2校時	自習	自習	自習	自習	自習
3校時	数学	数学	家庭	数学	英語
4校時	社会	美術	数学	国語	社会
	昼食・休憩				
5校時	国語	国語	英語	英語	国語
6校時	自習	理科	理科		自習

遅れて登校する生徒もいるため、授業は3～5校時を中心に行う。授業は免許教員が受け持つ。朝定時に登校できる生徒は、各自の計画で学習や読書を行う。

☆個別指導学級「6組」の週時間割

	月	火	水	木	金
1校時					
2校時		授業			授業
3校時				授業	
4校時	授業		授業		
	昼食・休憩				
5校時					
6校時					

英語・数学免許の非常勤講師が1日1時間の個別指導。英数を中心に、他教科も含めた学習全体の指導を行う。

◎情報共有のための具体的な手立て

「5組」「6組」に担任や副担任が配置され、授業では教科担任が入り指導が充実していったが、間もなく、所属学年やもとの所属学級担任の関わり方が難しいという声が出てきた。多くの教師が関わることで、生徒の状況について職員間で情報共有を図る必要性が生じてきたのである。そのため、A3判1枚に関する生徒の1日の様子を記録して回覧することとした。

氏名	○○○○	▽▽▽▽	◇◇◇◇
朝短活	8:40 登校		欠席
1校時	国語自習	9:20 登校	
2校時	数学自習	理科自習	電話連絡
特記事項	表情良く… ……………	寝不足気味 と話し……	母親と相談 して………
回覧	校長	副校長	教務主 生徒指 1学年

A3判1枚に該当生徒の一日の様子を記録

この毎日の記録をファイルに綴り、関係する全ての職員が回覧できるように、目を通したら机の上に放置せず速やかに回覧することとしている。不適応傾向の生徒の日々の状況や教師の関わり、保護者とのやりとりが一目で把握できるようになっている。

毎週金曜日の1校時に行う「主任会議」では、管理職、学年主任を含む各主任、特別支援担当、養護教諭、スクールカウンセラーが出席して情報交換を行い、心配される生徒の状況や対応方針を確認している。

◎関係機関との連携

精神科に通う生徒の場合、医師や作業療法士と保護者を含めたケース会議が開催される。所属学級担任、少人数指導学級担任に加え、必要に応じて校長も参加している。結果として保護者が安心し、生徒も落ち着いていく。また、保護者の了解を得て教師が病院を訪問して医師との相談、教育委員会・児童相談所・警察等関係機関との情報共有や連携を図りながら対応した。

【生徒の変容～生徒・保護者の声～】

開始1年を機に実施したアンケートを紹介したい。

「5組ができる前は、勉強をたくさんやりたいし、誰かと話してみたいけど、クラスや学校の雰囲気は苦手と感じていて、すごく苦しい日々でした。5組ができて、自分のペースで勉強ができて、疲れたら先生が話を聞いてくれて、幸せな毎日を送れるようになりました。テストの点数も良くなって、部活にも毎日行けるようになりました。皆から表情が良くなったねと言われるようになりました。」(2年女子生徒～「5組」で学習)

「約1年間6組で過ごしていて、自分のペースで学習できるようになりました。今はすぐ先生に聞けるようになったし、授業を受けさせていただけなので、前より理解が深まってテストの点も上がったり、英検に受かったりして、できなかったことができるようになりました。」(2年女子生徒～「6組」に休まず登校)

「学校に行かない一言も出さず無言で訴えたあの朝から1年が経つとは…とにかく自らの足で登校する事だけに絞り1年が経ちました。個々の生徒に対応する体制として下さった河南中学校の先生方に心より感謝申し上げます。」(保護者～上記「6組」女子生徒)

【成果】

不適応傾向の生徒が落ち着いて生活できるようになり、各自のペースで登校して学習に取り組み、学力を身に付けるようになっている。定期テストで高得点をあげ自信を持ちはじめた生徒もいる。また、そのような状況に保護者も安心し、学校に信頼を寄せ、余裕をもちながら学校と協力して子どもの登校を促すことができるようになり、状況の悪化を食い止め、改善に向かうことが出来ている。現在、引きこもり等の完全不登校生徒はいない。また、少人数指導学級「5組」・個別指導学級「6組」の設置と共に、教職員が生徒一人ひとりに目を配り、個に応じたきめ細かい対応を大切にする意識が浸透してきていると感じている。小学校で完全不登校だった新入生は、保護者と綿密な相談を重ね信頼関係を深めながら個別対応をしたことでこれまで休まず登校している。通常学級1年生129名に不登校・不適応は無く、全員が教室で学習に励んでいる。

【課題】

不適応生徒一人ひとりの的確な状況把握と対応が必要である。軽度発達障がいの子も共に学べる授業のユニバーサルデザイン化を尚一層進める必要がある。

地域と子どもをつなぐ地域素材を活用した教科融合型授業への挑戦

～ふるさとへの思いをフレスコ画で表現する～

大分県津久見市立第一中学校

教頭 永松 芳恵

1. はじめに

津久見市は、大分県の南東部に位置する海あり山ありの自然豊かな町である。山地部の広大な石灰岩地帯の鉱山から採れる石灰石は推定埋蔵量が45億トンといわれ、全国有数の産出量を誇る。第一中学校は、全校生徒254名(平成30年当時)の中規模校であり、「ふるさとを愛し、主体的・協働的に学び行動する一中生」を学校教育目標に、班活動を中心とした学びや、仲間との絆づくりを推進している。

生徒は素朴で明るいが、生活体験や成功体験の乏しさから表現力やふるさとを誇りに思い、愛する気持ちが乏しいという傾向は、全国の小中学生が抱える課題と同様であり、県や市の過疎化問題にもつながる。このことから、市の教育委員会は、「郷土を学ぶこと」を通して人材育成を目指す、「ふるさと教育」の推進を、市教育方針の重点項目の一つとして掲げている。

2. 「ふるさと教育」について

津久見市学校教育指導方針では、指導目標を「ふるさとを愛し、自ら学ぶ意欲と活力に満ちた津久見っ子の育成」と設定し、学校・家庭・地域の協働による特色ある学校づくりの推進を掲げている。目標を支える重点項目4本柱(知・徳・体・特別支援教育)のうちの一つ「感動をとまなう体験を重視し心の豊かさをはぐくむ教育の充実(徳)」の実践項目に「ふるさと教育」はある。地元の基幹産業や文化財推進・保存団体と教育委員会が協力し、故郷の産業・文化を利用した教育活動であり、それらを学び、体験することで「ふるさとに誇りと愛着を持ち、グローバルな視点で社会に参画する津久見っ子の育成」をめざしている。

「ふるさと教育」は、下記のように計画され、市内全小・中学校各教科等の教育課程に組み込まれている。

- 小学校5年生～地元石灰鉱山見学
- 小学校6年生～扇子踊りの継承
- 中学校1年生～海事産業見学会
- 中学校2年生～(石灰を活用した)理科実験授業
- 中学生～河津桜の植樹



津久見市教育委員会「ふるさと教育」

<http://www.city.tsukumi.oita.jp/soshiki/24/7.htm>

3. 研究の概要

(1) 主題設定の理由

～地域に静かに根差す「フレスコ画」～

津久見市教育委員会では、平成15年(2003年)より16年間、一般市民の生涯学習活動として大分県石灰工業会(津久見市)主催(※注1)の「フレスコ画」教室を夏休みに開催してきた。本校は美術部が参加し、数々の美しい作品を描いてきた。それらは社会福祉施設に寄贈されたり、市役所・市民図書館に展示されたりしており、市民の目を楽しませてくれている。

私は平成28年(2016年)に主幹教諭として本校に着任したが、美術教師だったこともあり「フレスコ画」の取組には以前から興味を抱いていた。しかし、地元産業界と教育委員会が長期間取り組んでいる活動にしては広報活動が弱く、興味のあるごく一部の人々に広がる「静かな」活動という印象があった。同じ年、市教育委員会から「ふるさと教育」の通達があり、全面実施となった。特に中学生においては、先に示した海事産業見学会を経て、(石灰を活用した)理科実験授業を、全て大分県石灰工業会が協力し、実施した。更に、実施内容を整理し、各教科(社会科・理科等)や「総合的な学習の時間」の教育課程年間授業計画に組み込んだのである。市教育委員会が地元産業界・文化団体・学校と協力して行ったカリキュラムマネジメントであったが、私はこの「ふるさと教育」に「フレス

コ画」を加え、授業開発できないだろうかと考え始めた。

(2) 「フレスコ画」について (※注2)

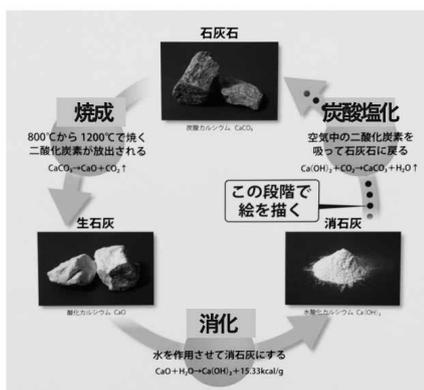
「フレスコ」という言葉はイタリア語で「新鮮な」とか「さわやかな」という意味である。消石灰を主原料に骨材(砂等)を調合した石灰モルタルを壁に塗り、生乾きの時に水で溶いた顔料(耐アルカリ性)で絵を描く。そうすると顔料が定着し、耐久性のある「フレスコ画」となる。すなわち「生乾き」＝「新鮮な」となるわけである。イタリアを中心にルネサンス期にキリスト教の教会建築に付随して発展した絵画技法である。イタリア南部のポンペイやヨーロッパ諸国にも数多く作品が見られる。代表的なものに、バチカン市国のシスティーナ礼拝堂のミケランジェロの天井画がある。石灰の壁の上に描かれる絵画としてみると、アジア各地にも見られ、日本の高松塚古墳・キトラ古墳の壁画も「フレスコ画」の仲間といえる。「フレスコ画」を描く技法として大きく分けて二つの方法がある。

※ブオン・フレスコ＝石灰モルタルで作られた壁が濡れている間に、顔料をバインダー(接着剤)なしの水溶性のみで画面に定着させる方法。
 ※フレスコ・セッコ＝石灰モルタルで作られた壁が乾いた後、顔料にバインダー(接着剤)を加えて描く方法。

津久見市民や本校の生徒たちが体験したのは「ブオン・フレスコ」である。石灰のサイクル、「ブオン・フレスコ」の仕組みは以下の通りである。

- 石灰石を窯に入れ、800℃～1200℃で焼くと生石灰になる。(焼成)
- これに水を加えると発熱し、消石灰になる。(消化)
- 粉の消石灰は水と練られて壁に塗られ、二酸化炭素と反応し、元の石灰石と同じ成分を作り出す。
- 石灰石と同じ成分が顔料を覆い、空気中の二酸化炭素と反応して透明な炭酸カルシウムの結晶(カルサイト)になる。

(炭酸塩化)

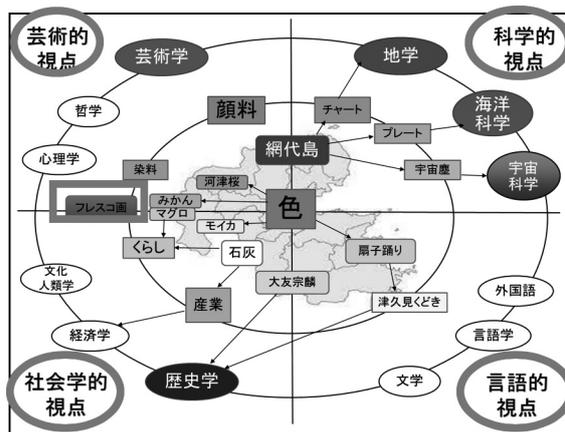


石灰のサイクル
 ～ブオン・フレスコのしくみ～

(3) 本校の教科融合型学習(「津久見プロジェクト」)の取り組みについて

平成28年度(2016年度)、「ふるさと教育」の始まりと同時に、美術科・国語科・理科・総合的な学習の時間の教科融合型学習「アートと言葉」(※注3)が、同年度入学生をモデル学年として、市教育委員会・県立美術館・大分大学が連携した学習開発「津久見プロジェクト」として、開始された。副題は～「(地域の)色」をテーマとした教科融合型学習の挑戦～。つまり、本校の学校教育目標「ふるさとを愛し、主体的・協働的に学び行動する一中生」の実現に向け、各教科様々な、新しい授業の開発により、学校教育の視点を広げ、教育課程との連動を図り、主体的で協働的な深い学びを創出することがこの学習開発の大きな目的である。

モデル学年が3年生に進級するまでの2年間、津久見市の大地の成り立ちを、理科教諭のサイエンスレクチャーで学び、地元の無人島に行き、岩石を採取し、美術で砕き、顔料を作り、それらをまとめた「津久見色辞典」を制作したり、地元の作家制作の石灰工場の風景を描いた油絵を国語で鑑賞し、鑑賞文を作成したりする中で、地元名産の石灰石についてその価値を度々振り返ることができた。そして、「ふるさと教育」も取り組む中で、「フレスコ画」も教科融合型学習の一つであり、3年間の教育課程に組み込み、体験学習をさせるべきだと授業構想が拡大した。



「津久見プロジェクト」のマッピング図 (※注4)

4. 実践内容

(1) 教育課程に位置付ける。

42ページの図は、本校3年生「総合的な学習の時間」の教育課程年間計画表の別表「単元配列表」である。先に示した、市教委の「ふるさと教育」や、津久見プロジェクトの「アートと言葉」を各教科から「総合的

な学習の時間」へ教科横断させ、関連付けながら実践していく計画を平成30年度(2018年度)に完成させた。そして、同年11月に3年生で初めて「フレスコ画」を実施した。丁度良いタイミングで、文化庁主催「子供・夢・アートアカデミー」(※注5)の指定も、3年生美術の授業で受けることに成功し、国内外で活躍中のフレスコ画家、K氏をゲストティーチャーに迎え、授業を実施する事になった。

	9月	10月	11月
国	魅力的な紙面を作ろう	言葉を選ぼう	説得力のある文章を作ろう
総合	津久見の将来を考えよう～地域の将来と自分の将来～ ○「自分の将来設計を考える(地元高校について等) ※「アートと言葉」 ○「津久見」の将来を考える(地域再発見・観光等) ※「食育」 ○「防災による安全な町づくり」を考える(防災マップ等)		
美	みんなのためのデザイン	フレスコ画に挑戦しよう!	

3年生「総合的な学習の時間」単元配列表(一部抜粋)

(2) 授業計画

題材は「ふるさと津久見をフレスコ画で表現しよう!」であり、ねらい・授業計画は以下の通りである。

ねらい

- ・地元石灰を使用したフレスコ画について学び、ふるさと津久見の良さを再発見させる。
- ・自分が表現したい「ふるさと津久見」を具体的に考え、特性を生かした制作を計画的に行わせる。
- ・フレスコ画のスペシャリストである作家のこれまでの歩みと現在を知ることで、自分自身の今後の生き方を考えさせる。
- ・作家による技術の指導により表現力を向上させる。

	生徒の活動	評価規準	時
授 業 の 展 開	1. フレスコ画について学ぶ。 ※生涯学習課職員による指導	美 ① 総 ①	1
	2. 作家について学ぶ。(鑑賞)	② ②	
	3. 「ふるさと津久見」を表現する題材を考える。	② ②	
展 開	1. 「ふるさと津久見」の下絵を完成する。	② ②	1
	1. フレスコ画の下地をつくる。	③ ①	1
	1. 作家を迎えオープニングセレモニー 2. フレスコ画を描く 3. 作品鑑賞・振り返り・まとめ	① ② ③ ③ ④	2

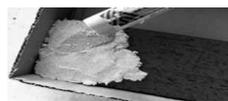
指導と評価の計画(5時間計画)

美術科 観点別 評価規 準の規 準	① 関心・意欲・態度	フレスコ画や作家の作品・制作姿勢に興味を持つ。
	② 発想・構想	自分なりの「ふるさと津久見」を表す題材を考えることができる。
	③ 創造的技術	フレスコ画の特性を生かした表現を獲得するため、指導者の指導を主体的に受けることができる。
	④ 鑑賞	自分の作品に対して、自分の考えを持ち、友だちとの交流でその良さも理解し、考えを深めることができる。
美術科【共通事項】を位置つけた指導のポイント	イ 形や色彩の特徴などを基に、対象(「ふるさと津久見」)のイメージをとらえること。	
総合 観点別 評価規 準の規 準	① 知識及び技能	石灰を使用したフレスコ画の歴史や制作手順を学び、制作工程を理解する。
	② 思考力・表現力・判断力等	「ふるさと津久見」の良さを再発見し、伝えることができる。
	③ 学びに向かう力・人間性等	作家の講話等に対して興味を持ち、真剣に聞く態度と同時に自分自身をふり返り、今後の生き方を考えることができる。

観点別評価規準(美術・総合的な学習の時間)

(3) 「フレスコ画」を学び、「ふるさと」を考える。

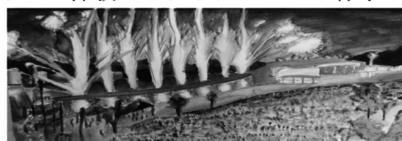
授業の導入では、津久見市教育委員会生涯学習課の職員の協力を得て、生徒に対し、「フレスコ画」の基礎知識や津久見市においての歴史を、具体的な作品や画像をもとに学習。その後、講師、K氏から「フレスコ画」の制作準備にあたり、石灰モルタルの浸透率が高く、安定感の良い「赤レンガ」の支持体を勧められ、それらを用意した。



↑「フレスコ画」の支持体となる赤レンガ

生徒に「フレスコ画」について説明する市教委生涯学習課の職員↑生徒は、導入授業後、「ふるさと津久見」を表現する下絵を考え、ワークシートにスケッチした。授業カウントは11月までの2時間は美術科で、本番の3時間は総合的な学習の時間でカウントし、評価はそれぞれ観点別評価規準を設け、教科融合的な視点で評価するようにした。

3年生は私が3年間持ち上がった学年であり、美術や総合的な学習の時間では、常に「ふるさと津久見」を中心に、課題をもって授業に取り組んできた。今回の特設授業でも、中心にあるものは「ふるさとへの思い」だということを押さえて展開し、生徒たちはそれに答えるように自分の心に残るものを描いて表現したのである。各クラス数名程、公民館活動の「フレスコ画」体験はあるものの、ほとんどが初心者。みんな初めての体験にワクワクしている様子が伝わってきた。



生徒のスケッチと作品に対しての思いより

津久見の祭りの中で花火大会が最初で浮かんだ。それでこの風景を描くことにしました。毎年楽しませてもらったので、何十年経っても津久見に残って欲しいという思いを込めてこの絵を描きました。絵の中には楽しんでいる人がいっぱいいます。このような風景が津久見の夏の風物詩であることを願います。

(4) ふるさと津久見「フレスコ画」を仕上げよう！

11月16日日本番授業の日、大分県石灰工業会と市教委生涯学習課の協力を得て、1時間目に前日から水に浸けていた赤レンガに石灰モルタルをのせる下地作りの作業を行った。体育館で89名の生徒たちは24グループに分かれ、左官さんが壁に漆喰をのせる要領で、私や各職員の方から指導を受け、石灰モルタルを鏝で厚さ5ミリ程度にのせていったのである。初めての活動だったが、周囲の方の協力もあり、順調に進めることが出来た。そして、5、6時間目がK氏を迎え、「フレスコ画」を描く本番の授業であり、1時間目に赤レンガにのせた石灰モルタルも少しずつ乾燥が始まった。それを狙って顔料を水で溶き、石灰モルタルの上に描いていくのが「フレスコ画」である。K氏到着後、「フレスコ画」のできるまでと、色の混合の仕方等の説明を受け、制作を開始。仕上がった作品は、「ふるさと津久見」への思いを込めた見事な作品群だった。



大分県石灰工業会の職員や講師から指導を受ける



制作する生徒達・完成作品群



(5) 地域へ発信

授業後、完成作品は2学期末PTAに合わせ、校内展示を行った後、「フレスコ画展」として、津久見市民図書館で全員分展示した結果、地域の方にも大好評であった。更に、3学期には大分県立美術館で開催さ

れた大分県中学校美術教育研究会主催の中学校美術展に展示し、推奨を受賞、津久見市役所ホームページや全国紙の新聞記事にも授業の様子が掲載され、地域に根差した取り組み、「フレスコ画」を一般の人々へ発信できたと手ごたえを感じたのである。



フレスコ画展の様子

5. 成果と課題

「美術はもちろん、化学や国語の事を詳しく教えて下さってとても勉強になりました。様々な色を混ぜ合わせ集中してフレスコ画を描く事ができました。」

ある生徒が授業後、講師に向けて書いた手紙の一部である。「フレスコ画」を制作することで、石灰の化学反応を活かした理科の学習、ふるさと津久見への思いを言葉にした国語科の学習、ふるさとを描く美術の学習、すべての学習の土台になる「ふるさと津久見」を考える総合的な学習の時間、これらの学習内容が、教科融合的に体験できたことに、生徒は満足していた。さらに、この学年は自己肯定感が低く、学力も伸び悩み現状があったが、様々な教育活動や生徒指導と共に、教科融合的な授業を組織的に取り組むうちに、全国テストの質問紙による自己肯定感は20%以上向上、不登校0人、高校入試においては、地元高校の進学率が前年度の30%から50%に増加し、第一希望の高校へ全員合格するという、素晴らしい成果が出た。

今後の課題は、学校全体でカリキュラムマネジメントを進め、「フレスコ画」や「ふるさと教育」を、地元の人々と協力しながら、津久見市の人材育成に貢献していける持続可能な学習活動に位置付け、発展させることである。

参考文献等

- (※注1) 古手川産業株式会社をはじめ、11社から成る石灰製造工業会
- (※注2) 大野彩著「フレスコ画への招待」岩波アクティブ新書2003年より引用
- (※注3) 公益財団法人博報児童教育振興会第12回児童教育実践についての研究助成「中学生期における『アートと言葉』をテーマとした教科融合型学習」(研究代表：大分大学 藤井康子)
- (※注4) JSPS 科研費「幼小期における地域の色をテーマとした教科融合型学習の開発」(16H03799)の学習イメージ図(姫島モデル)を参考に作成
- (※注5) 文化庁主催の社会貢献事業。日本芸術院会員が講話等を行う

主体的・対話的で深い学びを目指した農業教育の取り組み

～沖縄伝統島野菜「クワンソウ」の特産品開発及び地域連携を通じた人材育成～

沖縄県立中部農林高等学校

教諭 平良 一朗

I はじめに

急激な社会変化に伴い、農業においても情報化やグローバル化が急速に進行しており、発生する課題も多岐にわたっている。高等学校学習指導要領農業編でも、多様な課題を解決するためには確かな知識と技術に裏付けされた思考力や判断力、表現力が必要であるとされ、習得した知識・技術を相互に関連付けながら解決する探究活動の質的充実を重視している。

本校食品科学科は、食品関連産業に従事できる人材育成を目標に掲げ、「食品加工コース」「食品調理コース」の2コースを導入している。科目「食品製造」「食品調理」を中核科目とし、体験的・継続的な実習を通して農産加工・畜産加工の実践的な知識・技術の習得を図っている。本学科の課題として、地元の農産物を使用した加工品研究は多いが、開発のみの研究で発展性に乏しい状況がみられる。研究を深化・発展させ、学習成果を地域へ普及することが生徒の社会参画の観点からも必要とされている。地域農業の課題解決に取り組み、地域連携を積極的に進めることで、地域産業に関する学習が深まり、問題解決の能力や自発的、創造的な学習態度を育成できると考えられる。

そこで、研究目標を「地域資源を教材化し、地域連携を取り入れた探究活動を通して、主体的・対話的で深い学びを実現し、地域産業の活性化に貢献する生徒を育てる」とし、次の仮説を設定した。

II 研究仮説

(仮説1) 地域資源を教材化し、栽培から加工・販売までの実践的な学習を学ぶことで、特産品開発に必要な知識・技術を習得することができ、自ら考え主体的に取り組む態度を育成できるであろう。

(仮説2) 専門知識・技術を活用して、自ら課題を発見しその解決に向けて探究し、成果等を表現することで、思考力・判断力・表現力を育成することができるであろう。

(仮説3) 地域の農業やその課題に目を向け、生産者や地元企業、地域の方々と交流することで、地域産業の活性化や地域貢献などの社会性を育むことができ、地域産業の担い手としての意識の醸成が図られるであろう。

III 研究計画

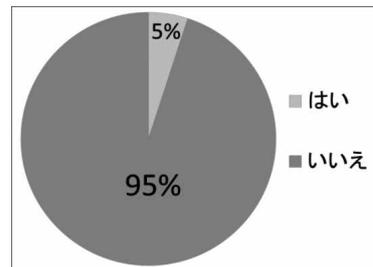
平成28年10月より、科目「課題研究」において「クワンソウの普及拡大」をテーマにプロジェクト活動を開始した。本研究では、この研究グループ14名(平成29年度3年生6名、平成30年度3年生8名)の生徒を対象に、授業および課外活動として放課後や休日に取り組んだ内容について報告する。

研究期間：平成28年10月～平成30年9月

IV 実施内容

1 地域資源の教材化

沖縄伝統島野菜(28種)は、これまで長寿県沖縄を支えてきた伝統的な食文化である。その中で、「クワンソウ」は、県内では古くから薬用や食用として栽培され、不眠やイライラ解消の効果があるとされてきた。しかし、食の欧米化、外食産業の増加、若い世代を中心にした伝統料理離れなど食生活の変化に伴い、この島野菜は家庭から消えつつある。平成28年度に本校で行った認知度調査(図1)でも、95%の生徒が知らないと回答し、伝統の島野菜にも関わらず、認知度が低いこともわかった。そこで、この「クワンソウ」を教材に活用し普及させることで、特産品開発に関する専門技術を習得させるだけでなく、沖縄の農業・食文化問題及び地域産業振興を学ばせるのに最適であると考えた。

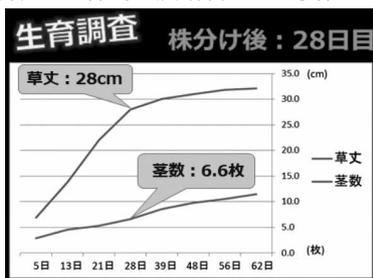


【図1】認知度調査(平成28年度)

2 クワンソウの栽培学習

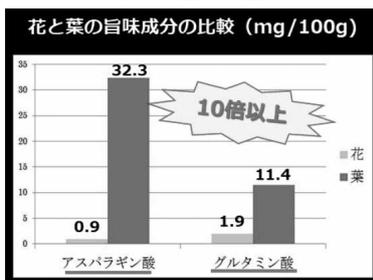
六次産業化を体系的に学ばせ、主体的に学習に取り組む態度を育てるため、本校農場にてクワンソウ栽培を行なった。日々の栽培管理を通して、栽培技術の向上だけでなく、記録学習を徹底することで、日々の疑問も生まれ、その解決方法を模索することで科学的思考力を学ぶ機会になった。また、地域の生産農家と連携した取り組みを行うことで、栽培のプロから直接指

導を受けることができ、農業への理解も増えた。そして、生徒自ら計画・実践する主体的な農場管理へと変化し、「クワンソウを普及する」という意識が高くなり、地域農業の課題にも取り組む意欲が向上した(図2)。



【図2 生育調査】

また、クワンソウはなぜ薬だけでなく食用としても利用されていたのかと「問い」も生まれ、それを解決するために、旨味成分



【図3 旨味成分分析】

の分析を行なった。結果は、旨味成分であるグルタミン酸とアスパラギン酸が検出され、花の10倍以上含まれていることがわかり、効能だけではない特徴を実証することができた(図3)。

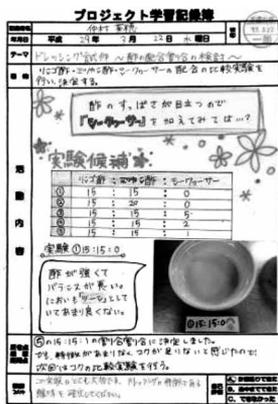
3 特産品開発の実践

(1) コンセプトシートの作成と商品の決定

特産品開発は、最初の方向性が今後の活動の指針になる。そこで対話的な学びを目指し、議論する時間を多く確保した。プロダクトアウト(送り手発想)ではなく、マーケットイン(市場が求めるもの)であることを徹底し、市場調査を行い、コンセプトシートの作成を指導した。多くの話し合いを重ね、保存期間も長く土産用としても活用できるドレッシングで開発を進めることにした。

(2) ドレッシング製造の取り組み

生徒達は次の4つの比較実験を行い、試食アンケートで味の調整を進め、その都度改善を行った。試行錯誤の末、ワインビネガーと砂糖を煮詰めて作る「ガストリック」を加えることで、料理にコクを与えることがわかり、味を決定することができた。また、酢の酸性が、花のアントシアニン色素を鮮やかに保ち、加熱殺菌後も変色しないことも発見



【図4 実験の記録簿】

できた。さらに花だけでなく葉も利用し、姉妹品の開発も行った。実験を計画・実施(図4)し、その結果を検証・改善していくことを繰り返すことで科学的思考が高まっていった。

【実験1】ドレッシングベースの比較実験

【実験2】酸味の比較実験

【実験3】クワンソウ添加量実験

【実験4】コクの比較実験

(3) 企業との商品検討会

ドレッシングの製造販売を行っている「株式会社赤マルソウ」及び「株式会社紅濱」で、商品検討会を実施した。これまでの研究データをまとめ、プレゼンを行った。味の完成度、科学性に基づいた安全性、デザイン構成等の実践的なアドバイスを頂き、生徒達にとつ

て、大変刺激になり、同時に商品開発における科学的見地の重要性を学んだ。この活動を通して、これまで



【図5 商品検討会】

の知識をまとめ、再構築することができ、今後の活動の自信に繋がった(図5)。

(4) 安全・安心の取り組み

科学的根拠に基づいた安全・安心な製品作りのため、下記の実験を行い、製品説明書作成に取り組んだ。授業で学んだことを活かし、検査することで、自信を持って商品をPRすることができ、科学的にも安全・安心な商品であることが実証できた(図6)。各活動のリーダーを決めることで、生徒が苦手とする実験分野でも、意欲的に活動する生徒が出てきた。特に賞味期限の設定ではリーダーがチームを引っ張っていき、食品衛生の意識向上に繋がった。

日数	微生物検査			官能検査	
	一般生菌数	大腸菌群	真菌類	風味	外観
5	300個以下/g	陰性		○	○
16	300個以下/g	陰性		○	○
23	300個以下/g	陰性		○	○
31	300個以下/g	陰性		○	○
38	300個以下/g	陰性	検出せず	○	○
46	300個以下/g	陰性	検出せず	○	○

【図6 微生物検査・官能検査】

【実験1】酸度、pH、Brix濃度の測定実験

【実験2】カロリーの算出

【実験3】一般生菌数検査実験

【実験4】大腸菌群検査実験

【実験5】真菌類検査実験

【実験6】官能検査実験（風味・外観）

(5) 商品化・販売に向けて

商品名は意見を出し合い、「クワンソウかけるドレッシング」に決定した。「野菜に彩りをかける」「クワンソウと地域の人達をかけあわせる」「私達の活動が一步一步駆け上がる」という意味が込められている。ラベルは一目で高校生が開発したことがわかる写真を配置し、生徒自ら考案したマスコット「クワンちゃん」を背景にデザインした。様々な課題を克服し、苦労の末、商品が完成した。生徒達は達成感を感じ、さらにクワンソウ普及に対する意欲も向上した（図7）。



【図7 商品PRパネル】

次に「クワンソウかけるドレッシング」の販売を実施した。これまでの特産品開発を中心にした活動から、普及を中心とした活動に移行し、PR用のパネル、パンフレットの作成を通して研究の振り返りを行った。試食会や販売会は非常に好評で、地域の方々にクワンソウを知ってもらうと同時に、交流を通して生徒達が成長していく姿を感じることができた。現在までに500本以上の販売実績があり、生徒達の努力が形となり、地域に浸透している。自分達が作った商品が多くの人の手に渡り、喜んでもらえることは、食品を学ぶ生徒の自己肯定感を高め、食品関連産業に従事できる能力と態度の育成に繋がると考える。

4 知的財産教育の導入

(1) 社会での実践力を育てる活動①（営業許可申請）

本校にはドレッシングを生産し、販売できる免許がないため、ドレッシングの営業許可である「ソース類製造業」を申請した。保健所との連絡調整、申請書の作成、指摘項目の補修等を行い、無事、営業許可証を取得することが

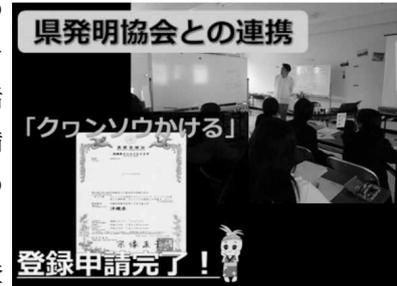


【図8 営業許可申請】

できた。学習活動として生徒自身が申請をすべて行ったことは、公的手続きへの理解など社会での実践力に繋がる活動になった（図8）。

(2) 社会での実践力を育てる活動②（商標登録申請）

社会のグローバル化に伴い、農業においても知的財産教育は喫緊の課題である。そこで、知財を活用できる力を備えた人材育成の観点から、ドレッシングの商標登録活動に取り組



【図9 商標登録の取得】

んだ。県発明協会の外部講師と協力し、知的財産及び商標登録の申請方法までを学ぶことができた。商標登録は、商品名ではなく、後輩にも繋げる活動にするため、シリーズ化も視野に入れた「クワンソウかける」で行った。申請には約一年と長い期間かかったが、無事に取得することができた。商標登録は、生徒達にとって取り組みにくい内容が多かったが、外部講師による指導の効果は非常に高く、モチベーションの向上になった（図9）。

5 生徒の指導性を高める活動

(1) 中学校での出前授業及び学校給食への提供

普及活動と食育活動の一環で、生徒が先生となり地域の中学校で出前授業を行った。沖縄東中学校と石川中学校に訪問し、研究発表やドレッシングの試食会を行った。「伝統島野菜やクワンソウについて初めて知ることができた。」などの声があり、同世代の学生に、生徒達の活動と地域農業や食の大切さを伝えることができた。



【図10 出前授業】

また、本校定時制の全生徒と職員に、給食と

してドレッシングを提供した。「こんな島野菜があるとは知らなかった」「思ったよりくせがなく食べやすい」などクワンソウを食べたことがない同世代の学生に、魅力を伝えることができ、次世代に繋げる大切な活動になった。今回の教える活動では、主体的・対話的で深い学びに繋がり、思考力・判断力・表現力を高めさせる機会になった（図10）。

6 関係機関との連携活動

(1) 農家との連携

クワンソウの六次産業化を行っている「今帰仁ざまみファーム」及び研究当初より苗の提供と栽培指導に協力して頂いている「ぎのざファーム」へ伺い、活動内容の報告会を実施した。「たくさんの農家に紹介したい。クワンソウの認知度向上に繋がる。」と活動が評価された。生徒達はこの交流活動を通して、今後の活動を発展させていくための自信に繋がり、地域農業に関する理解を深めた。

(2) 企業・大学との連携

これまでの研究の振り返りと発展のため「沖縄クワンソウ普及協会」への報告会や「琉球大学」と「株式会社クレイ沖縄」との意見交換会を行った。「クワンソウの新しい利用方法や魅力を十分に引き出している。」とこれまでの活動を高く評価して頂いた。若い世代の活動の重要性を再認識し、沖縄の食文化の発展のために貢献する態度の育成ができた。また、大学や産業界の方々と交流することで、知的好奇心が高まり、学ぶ意欲や社会性の向上に繋がった。

(3) 行政機関との連携

「うるま市食生活改善推進協議会」の役員会と総会で報告会を実施した。総会では発表のほかに、普及を目的とした苗の配布や販売会も行った。



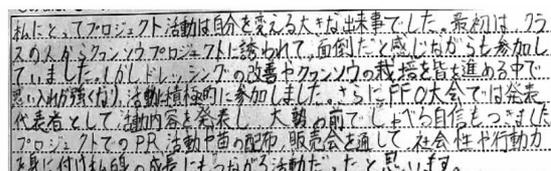
【図11 役員会・総会での報告会】

また、健康長寿 県復活を目指したメニュー「うるまの幸御膳」にもドレッシングが採用され、料理講習会では伝統料理への活用について学んだ。その中で今後も地域と食と健康のため、協力していきたいという思いが強くなり、クワンソウを通して地域の食文化に貢献する活動に弾みがあった(図11)。

7 研究の成果(仮説の検証)

(1) 自ら考え主体的に取り組む態度の育成

栽培から加工・販売までの六次産業化の工程を実施し、関連産業と連携することで、特産品開発に関する知識・技術を習得できた。さらに、主体的に活動していくうちに、食品開発に関する自信と誇りが芽生え、自分自身の成長を感じていることが記録簿からも読み取れる(図12)。



【図12 活動の記録簿(抜粋)】

(2) 思考力・判断力・表現力の育成

探究的な学習を実践する中で、多くの課題を見つけ、その解決に向けて一步一步取り組むことで、課題解決能力を培うことができた。また、継続的な活動の記録により、研究内容をまとめ、科学的に考察し、発表を繰り返すことで、思考力・判断力・表現力が身についた。さらに、チームでの意見交換、多くの活動報告会での発表や質疑応答、会議への参加などの多様な活動をする中で、生徒達は共に考え、共に学び、より深い学びに繋がったと実感している。

(3) 地域産業の担い手としての意識の醸成

地域の方々と交流することで、地域を大切にする心や協働精神などの社会性を育むことができた。また、研究成果の普及による地域貢献ができ、関わった方から多くの激励を頂き、地域産業の担い手としての意識の醸成が図られた。今回の実践により農業教育の大きな目標である地域産業を担う人材育成に寄与したと考えられる。

(4) 進路決定

研究グループ14名の進路先は、大学4名、専門学校2名(今年度の8名は現在3年生で進路活動中)と意識が高く、卒業生全員が進学している。特に知的財産を学んで、法律に興味を持ち法文学部に進学した生徒や、地域の食の現状を知り管理栄養士を目指し、沖縄の食文化に貢献したいという生徒も出ている。今回の活動を通して、関連産業と連携することで、地域産業の担い手としての資質向上が図られ、進路決定に結び付いたと考える。

(5) 主な活動の実績

- ・第65回沖縄県学校農業クラブ連盟大会(H29) プロジェクト発表 最優秀賞
- ・第60回九州学校農業クラブ連盟大会 優秀賞(H29) プロジェクト発表 優秀賞
- ・第40回沖縄青少年科学作品展 沖縄県教育長賞(H29)
- ・第66回沖縄県学校農業クラブ連盟大会(H30) プロジェクト発表 最優秀賞

8 おわりに

今回の実践を通して、生徒達だけでなく、私自身も成長することができた。そして、農業高校の持つ役割と可能性の大きさを改めて感じた。今後も生徒のため、地域のため、未来のため、将来の地域産業を担う人材育成を目指し、授業実践を重ねていきたい。

生徒が主体的に取り組み「わかった」「できた」と実感できる授業を目指して

～授業力向上を図る校内研修の工夫を通して～

茨城県行方市立玉造中学校

校長 小野口 吉政

1. はじめに

本校は茨城県東部に位置する行方市の北西部にあり、生徒数293名で、校舎からは霞ヶ浦と筑波山を一望できる水と緑豊かな景観に囲まれた中学校である。生徒たちは落ち着いた学校生活を送っているが、学力に関するアンケート結果（下表）から「半数以上の生徒が授業がよく分かっていない」「授業への取組が消極的である」ことが明らかになった。

表1 学力に関するアンケート結果（4段階でのA評価）
H30・6・1 290名実施

○ 授業がよくわかる。	46 %
○ 授業に主体的に取り組んでいる。	44 %

また全国的な傾向でもある経験豊富な教員の大量退職に伴い、本校においても毎年若手教員が増加しており（下表）、「二十代で経験年数が少ない」教員が全体の半数を占めている。

表2 教員の年齢・経験年数 教員26名

経験年数 年齢	～ 5	6 ～ 10	11 ～ 15	15 ～
～ 30	10人	2人	0人	0人
31 ～ 40	0	3	4	0
41 ～ 50	0	1	1	2
51 ～	0	0	0	3

令和3年度から実施となる「中学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 総則編」では、「単元や題材など内容やまとまりを見通しながら、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと。」と示されている。

また、平成28年に示された中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会から示された「審議のまと

め」では「『教育は学校で育つ』ものであり、教員の資質能力を向上させるためには、経験年数や職能、専門教科ごとに行われる校外研修の体系的な実施とともにOJTを通じて日常的に学び合う校内研修の充実や、個々の教員が自ら課題を持って自律的、主体的に行う研修に対する支援のための方策を講じる必要がある。」としている。

そこで、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、特に若手教員の授業力向上のために、授業改善に向けた校内研修を充実させることで、生徒が主体的に取り組み「わかった」「できた」と実感できる授業になると考え本主題を設定した。

2. 研究のねらい

全教科における本校独自の学習スタイルの共通実践と教員の授業力向上を図る校内研修の工夫を通して、生徒一人一人が主体的に取り組み「わかった」「できた」と実感できる授業づくりを目指す。

3. 研究の内容

(1) 玉中授業スタイル

- ア. 本校生徒の実態把握
- イ. 玉中授業スタイルの構築
- ウ. 生徒版単元計画の作成

(2) 授業改善に向けた校内研修体制づくり

〔玉中メソッド〕

- ア. 日常的に見合う相互授業参観
- イ. 授業を語り合う代表授業研究
- ウ. 教員同士が磨き合う研究協議会

4. 研究の実際

(1) 玉中授業スタイル

- ア. 本校生徒の実態把握

全教科で取り組む授業スタイルを構築するにあたり、全教員で本校生徒の実態把握を行った。全国学力・学習状況調査結果、学習アンケート、普段の授業の様

子等をもとに、本校生徒の授業における課題を以下の2点に絞った。

- 個人で考えたことを、意見交換したり、議論したりすることで新たな考え方に気がついたり、自分の考えをより妥当なものとしたりすることが苦手である。
- 自分の考えを筋道立てて説明することが苦手である。

イ.「玉中授業スタイル」の構築

本校生徒の課題を解決するために、日々の授業の中で「話し合い活動」を重点的にどの教科でも取り入れることにした。そのためには、まずは個人の時間をとり、課題に対しての自分の考えをまとめ（個人ワーク）、小グループ（4～5人）内での話し合いを通して、自分の考えを筋道立てて説明したり、他の生徒の発表を聞いて新たな考えに気がついたりする場面（グループワーク）を設定した。最後に本時のまとめや振り返りをする場面をつくる。

また、「話し合い活動」を活性化させたり、深めるために、出てきた情報を可視化し、整理することができるように、話し合いの中で「思考ツール」を取り入れた。

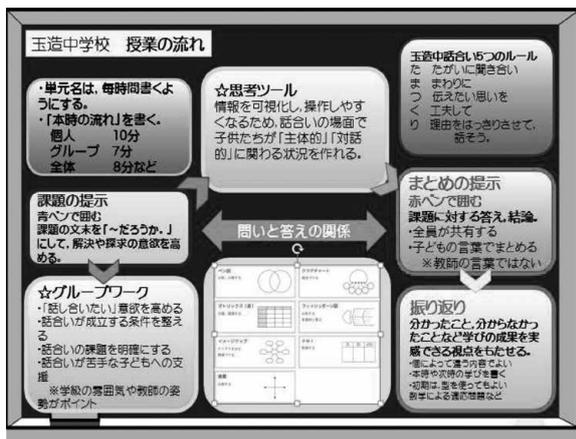


図1 玉中授業スタイル

全教科・教員で取り組むことで課題解決に近づくと考え、以下のことを全教員で共有し、実践することにした。

- ・全教科で「玉中授業スタイル」を実践する。
- ・各学級4～5人でグループを編成し、グループ形態で生活し、話し合いを日常化する。



図2 授業の様子

ウ.生徒版単元計画の作成

生徒が主体的に授業へ取り組むためには、授業の見通しを持たせることが大切である。本時の授業ではどのようなことをするのか、本時は単元の中でどのような位置づけになっているのかを生徒が知ることで、事前に準備をしたり、本時の学習のねらいを把握したりすることで、より授業に主体的に取り組むことができる。

また、教員にとっても単元計画を作成することで全体の見通しを持ち、生徒の実態等を踏まえて内容や時間を配分し、必要な人的・物的資源などの活用創意工夫をこらすことで授業の質的向上を図ることができる。（カリキュラム・マネジメント）

そこで本校では研究主任から生徒版単元計画の作成例（図3）が示され、全教科、全単元で単元計画を作成し単元の始まりには生徒に配布することにした。

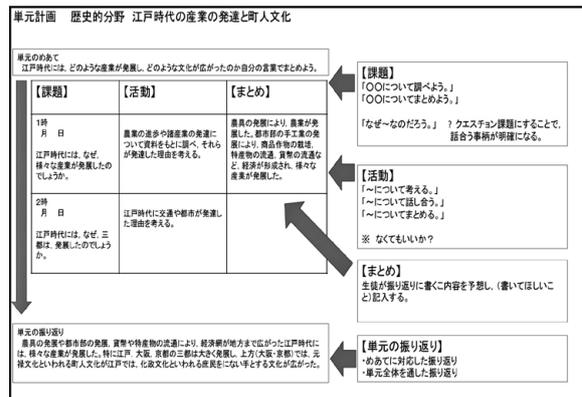


図3 単元計画作成例

(2) 授業改善に向けた校内研修体制づくり（「玉中メソッド」）

ア. 日常的に見合う相互授業参観

「授業力は実践で育つ」を合い言葉に、「玉中授業スタイル」での授業を実施した。互いの授業を見合って改善していくことの繰り返しが学校全体での授業力向上につながると思った。

そこで、昨年度から教員を4つのチームに分け、そのチーム内で毎月授業者を1～2人決め、チームのメンバー同士で略案検討→授業参観→研究協議を行うようにした。その際に、次期校内のリーダ候補であるチームキャプテンが中心となって、授業者、授業参観等の時間や場所、検討内容の調整を行うことで、校内のミドルリーダーの育成にもつなげていく。



図4 職員向け資料「チームによる相互授業参観とは？」

イ. 授業を語り合う代表授業研究

相互授業参観が一人一人の教員が授業実践を通して授業力向上を図っていく場だとすれば、学校全体としての授業改善の方向性を全教員で確認していく場が代表授業研究である。

本校では毎月、月曜日の6校時（学校裁量の時間）に代表授業研究を行っている。授業者は4つのチーム



図5 代表授業研究の様子

の中から1名選出し、授業公開をする学級以外の生徒を全員下校させ、全教員が公開学級の授業参観するようにしている。代表授業者のチームのメンバー

は授業者と一緒に指導案の検討を行っている。指導案検討の際は、前回の授業研究での課題を、どのように引き継いで今回改善していったというのがわかるようにする「リレー方式」で指導案作成にあたり、授業研究を行っている。代表授業者だけの負担でなく、指導案作成の段階から協働して取り組むことで、チームとしての意識を持たせるようにしている。

ウ. 教員同士が磨き合う研究協議会

授業研究後の研究協議が授業者や参観者の授業力向上の場であると考え、これまでの研究協議会の在り方を見直した。

〈授業参観シートの活用〉

これまでの授業参観では各自が思いのままに気づいたことを記録していたが、それでは授業の視点が広がりすぎて研究協議も深まらないで終わってしまうことがあった。そこで「授業参観シート」（図6）を作成し、授業参観のテーマを決め、Plus（参考になったところ）、Minus（こうすればもっと良くなる）、Interest（興味を持ったところ、他の先生に紹介したいところ）の三つの視点で参観し、具体的な生徒の姿で記述するようにした。

テーマ： 本時の授業のテーマ		
P プラス (Plus)	M マイナス (Minus)	I インタレスト (Interest)
※ 授業を参観して参考になったところを具体的に記入して下さい。	※ 授業を参観して自分だったらこうするであろう改善点を具体的に記入して下さい。	※ 授業を参観して興味に思ったところ、他の先生方にも紹介してみたいと思ったことを具体的に記入して下さい。

図6 授業参観シート

〈研究協議会の展開方法の工夫〉

研究協議会序盤

研究協議は相互授業参観チームで行う。グループ協議が始まる前に、授業参観シートにメモした内容を付箋紙に記入し、参観授業を参観しての自分の考えを整理する。

研究協議会中盤



図7 研究協議の様子

成果と課題が書かれた模造紙半分のシートに、自分の書いた付箋紙を一人ずつ貼りながら自分の意見を発表する。全員が貼り終えたらKJ法的手法を使って分類して

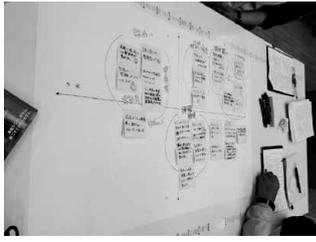


図8 グループの成果物

困ったり、矢印などを使って関連付けたりしていく。次にグループでまとめた成果物を全体に発表する。自分のグループでは本時の授業をどのような視点でみていたのかをグループの若手教員が発表する。若手教員に発表させるのは、グループで話し合ったことを自分で整理したり振り返ったりすることで授業力の向上につながると考えた。

研究協議会終盤

グループ発表の後は、本時の授業を総括するために、講師の先生から指導・講評を受ける。授業研究にあたって、相互授業参観チームキャプテンを校内指導主事に授業前に決めておく。校内指導主事は、授業を参観し、プレゼン資料等を作成し、指導・講評を行う。校内指導主事を位置付けたのは、次世代の授業改善のリーダーを育成するために、指導・講評のための準備を通して授業力を育成していくことにある。



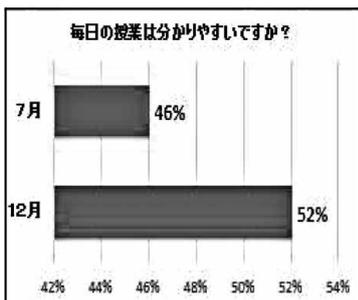
図9 校内指導主事の指導・講評

さらに今年度は校内指導主事への指導も含めて、専門的な指導を受けるために大学から講師を要請し指導を受けている。

5. 研究成果

教員の授業力向上のための校内研修の工夫を通して、生徒が主体的に授業に取り組み、「わかった」「できた」と実感できる授業を目指して取り組んできた。その結果、生徒・教員へのアンケートから以下のような変容がみられた。

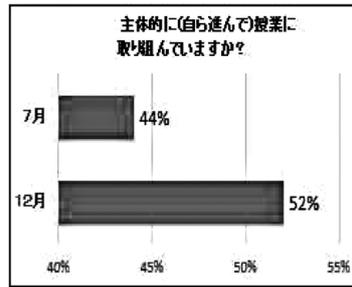
表3 生徒のアンケート結果



〈生徒の変容〉

授業改善に取り組む始めて半年余りであったが、「授業がよくわかる」と回答した生徒が増加した。(表3) また、授業への取組についても、

表4 生徒のアンケート結果

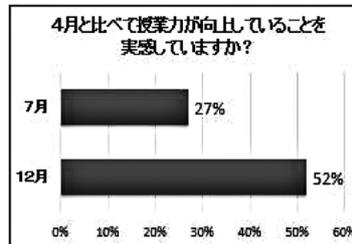


「主体的に取り組んでいる」と回答する生徒が増加した。(表4)

生徒が授業の先を見通し、本時の課題に対して、自分の考えを持ち、グループ内で話し

合いを取り入れた授業に転換したことで、主体的に授業に取り組むようになり、「授業がわかった」と実感する生徒の増加につながった。

表5 教員のアンケート結果



〈教員の変容〉

チームによる相互授業参観、代表授業研究を通して、授業を公開し、その後の研究協議で同僚からの具体的な指導・助言を受けることで、年度始めと比較し、自分の授業力が向上していることを実感している教員が増えた。(表5) 特に、教職経験年数5年以下の教員はほとんどが実感できている。また、校内研修に積極的な姿勢で取り組む教員が増えてきている。

6. おわりに
今回の研究を通して、今後も継続して学校全体として取り組み、教員には「玉中授業スタイルの形に固執するのではなく、生徒の実態、単元や本時の内容に応じた柔軟な授業展開をしていく力」、生徒には「授業だけでなく、すべての教育活動において、『話し合い』を通して、自分の考えを発表したり、友達と折り合いをつけ合意形成をしていく力」を身に付けさせていきたい。

《参考文献》

中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(平成28年12月)

グローバル社会を生きる子供を支える新たな外国語教育の創造

～系統性と必然性のある外国語の学びを通して～

静岡県浜松市立西小学校

校長 加藤 志緒里

1 研究目的

今、AIを中心とした科学技術の進歩により社会は加速度的に変化しており、未来社会やそこで生じる課題は予測不能と言われている。不確実な社会を生きる子供には、その時代に必要とされる知識や技能を主体的に学ぼうとする姿勢が求められている。また、進展するグローバル社会においては、国を超えて交流し、様々な立場の人と協働的に課題解決をするために、英語力の向上と異文化理解は不可欠なものとなっている。国からも新学習指導要領において新たな教科として小学校外国語科が示された。小学校教員にとって未体験の教科であり、その在り方を研究することは喫緊の課題であると考え、本研究に取り組むこととした。

2 研究主題

コミュニケーションツールである外国語を効果的に学んでいけば、英語力の向上のみならず異文化理解が図られ、豊かな国際感覚の基盤が養われるであろう。そこで、確実に積み上げていくための学びの系統性と、主体的な学びを引き出すための学びの必然性に視点を当てた研究が必要だと考え、研究主題を「グローバル社会を生きる子供を支える新たな外国語教育の創造～系統性と必然性のある学びを通して～」とした。

3 研究方法

研究主題に迫るために、2つの視点に沿って以下の方法を重点とした。

<視点①「系統性のある学び」の実現に向けて>

- 学習内容の系統を明確にする
- ステップを踏んだ活動を工夫する
- 何ができたかを実感する振り返りを工夫する

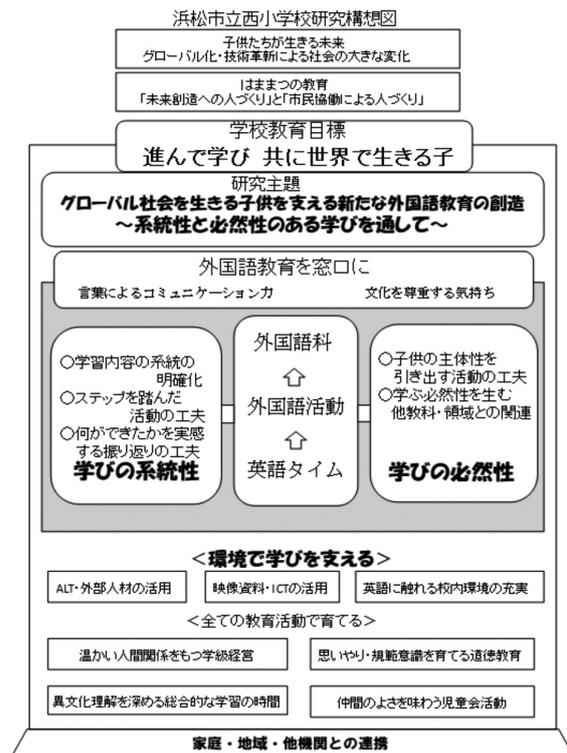
<視点②「必然性のある学び」の実現に向けて>

- 子供の主体性を引き出す活動を工夫する
- 学ぶ必然性を生む他教科・領域との関連を図る

<学びを支える環境の整備>

- ALT・外部講師の活用を充実させる
- 映像資料・ICTの活用を工夫する
- 日常的に英語に触れる校内環境を工夫する

また、研究の全体像を下の図のように構想した。



4 研究実践

(1) 系統性のある学びの実現

<学習内容の系統性を明確にする>

子供たちが6年間（低学年は授業カウントしない英語タイムを設けている。）で学ぶフレーズと単語を洗い出し、系統表にまとめた。そして、単元の内容が既習の単元の内容とどうつながり、どう生かすことができるかを押さえ、つながりのある外国語学習を構築した。

【3年 What do you like? ～何が好き?～】

What do you like? に対して I like ～. と応じるやり取りを学ぶ単元では、既習の Do you like ～? I like ～. の会話が生かされると押さえた。既習の会話を復習的に思い起こさせることで、I like ～. が違う形の会話でも使えることが分かり、表現の幅が広がった。また、同じフレーズを違う単元で再び使うことでより一層の定着が図られ、学習効果が上がった。

＜ステップを踏んだ活動を工夫する＞

授業の中で、無理なく新しいフレーズに慣れ親しんだり習得したりできるよう、スモールステップの活動を設定した。

【中学年で慣れ親しむためのスモールステップ】

慣れ親しむことがねらいの中学年では、授業の中で楽しみながら英語に触れる幅を広げること考え、次のようなステップを設定した。

- ① Let's Chantnの歌を歌って英語のリズムに慣れる。
- ② ゲームやクイズで楽しみながら英語に言い慣れる。
- ③ 全体で教師と子供の簡単な英語のやり取りを行う。
- ④ グループで楽しみながら簡単なやり取りを行う。
- ⑤ いろいろな友達と個々に簡単なやり取りを行う。

活動の際には、困ったときに手助けとなるカードを示し、それを見ながらでも自分が慣れてくればよいことを伝えた。それにより、個人差にかかわらず楽しみながら慣れ親しもうとする姿が見られた。

【5年 I want to go to Italy. ～行きたい国は?～】

行きたい国を尋ね、その答えに対してその国の魅力を伝えるという学習では、枠内に示す会話を想定した。国名やその国の魅力を表現する単語を複数扱うことの

A: Where do you want to go?
 B: I want to go to ~.
 A: OK. You can ~.
 B: It's nice/wonderful!
 A: Thank you. Let's go together.

負担感を減らすために、枠内①～⑧スモールステップを設定した。

- ① デジタル教材を視聴し、単語やフレーズを確認する。
- ② ピクチャーカードを活用して単語に慣れる。
- ③ 黒板にフレーズや単語を示す。
- ④ 言語活動が具体的にイメージできるよう、教師がデモンストレーションでやり取りを示す。
- ⑤ 会話Ⅰで、黒板を補助的に使いながら子供が実際に友達とやり取りを行う。
- ⑥ 難しかった点を共有し、解決を図る。
- ⑦ 黒板の補助カードをはずす。
- ⑧ 会話Ⅱで、自分の力で友達とやり取りを行う。

特に、黒板に貼られたフレーズを補助的に使いながらやり取りする会話Ⅰと、補助が何もない状態でやり取りする会話Ⅱという2ステップの活動を設定したことで、子供自身が自分の力でやれたという実感を得ることができたことに大きな意味がある。自分の力で会話のできた喜びは、学んで良かったという満足感となり、それが次の学習の意欲へとつながるからだ。

また、外国語科の授業の導入には既習のフレーズを使ってあるテーマについて子供同士が会話する small talk を位置付けた。既習内容を繰り返し使用する場を設定することで一層の定着を目指すものであり、外国

語科が聞くこと・話すことの習得を求めていることに對する有効な手立てになると考えた。

【高学年の聞く力を高めるスモールステップ】

ネイティブな英語を聞き取る活動は、経験の少ない子供にとって負担感が大きい。そこで、デジタル教材を視聴する際には、次のステップを取り入れた。

- ① まず自分の力で内容を聞き取る。
- ② 聞き取れたことと分からなかったことを明らかにする。
- ③ 聞くポイントを示す。(例えば can の次の言葉に気を付けて聞く、want to の次の言葉に気を付けて聞く等)
- ④ ポイントに気を付けて、再度内容を聞き取る。
- ⑤ 聞き取れたことを確認する。

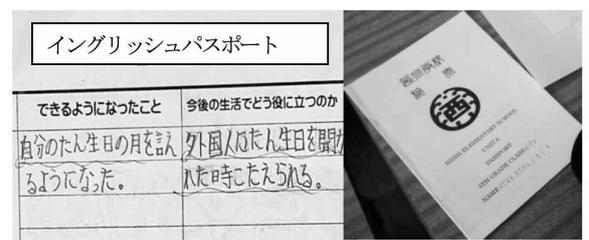
漫然と聞くのではなく、ポイントを押さえて聞くことで、全ては分からなくても大体をとらえることができる。小学生の今、大事な部分が聞き取れるということは次のステップにつながる原動力となる。

＜何ができたかを実感する振り返りを工夫する＞

外国に行くのとスタンプがたまるパスポートから発想を得て、学びの足跡を記録するためのイングリッシュパスポートを作成した。子供にとって、パスポートが増えることは、使えるフレーズが増えたという成果の実感につながった。振り返る観点は発達段階を考慮して次のように設定した。

- 低学年：○活動を楽しんだか
- 中学年：○どんなことができたか
 ○生活のどんな場面で使ってみたか
- 高学年：○何ができるようになったか
 ○どんなことに気を付けたか
 ○今後の生活でどのように役立つか

今後の生活でどのように役立つかという観点の設定は、英語を学ぶ意義を常に意識させる上で有効だった。



(2) 必然性のある学びの実現

＜子供の主体性を引き出す活動を工夫する＞

学ぶ対象への興味・関心があり、学ぶ目的を明確に持っているとき、子供は主体的に学び始める。そこで、単元のゴールに子供がしてみたいと感じるような活動を設定し、そのために学ぶという単元を構想した。

【6年 I like my town. ～浜松の魅力伝えよう～】

自分の住む地域や国の魅力を外国の人に伝えるという学習では、学習後に行う修学旅行で、観光に来た外国の人に浜松や日本の魅力を英語で伝えるという活動

を設定した。既習の単元で外国人講師と直接英語で会話する体験をさせてあったので、再び外国の人に伝えるという活動に子供たちはわくわくし、英語で伝える力を高めたいという明確な目的意識を生み出した。



実際の活動では、浜松や日本の良さを伝えるために折り鶴を用意したり、写真を見せて分かりやすくしようと工夫したりする姿が見られ、相手に配慮するという外国語科の目標に沿った活動が実現した。

＜学ぶ必然性を生む他教科・領域との関連を図る＞

子供の将来を考えた時、英語を単なるツールとして学ぶのではなく、学びを通して異文化を理解し、国際感覚の基盤を養うことが重要である。異文化理解を図るにはまず自国の文化の良さを知り、誇りを持ってそれを伝えたいと考えることが重要だと押さえ、総合的な学習の時間の内容を以下のように工夫した。

【本校の総合的な時間のテーマ】

- 3年：学区の生活や文化について探求する
- 4年：浜松市及び静岡県の文化について探求する
- 5年：日本の伝統文化について探求する
- 6年：日本と比較しながら諸外国の文化について探求する

総合的な学習で学んだ内容がそのまま伝えたい内容となることで、双方の教科に学ぶ目的が生まれた。先ほど述べた「6年 I like my town. ～浜松の魅力を伝えよう～」においても、これまで学んだ内容から自分が伝えたいことを選択しており、外国語科と総合的な学習が効果的に結び付いていることが表れていた。



(3) 学びを支える環境の整備

＜ALT・外部人材の活用を充実させる＞

【ALTによる授業のアシスト】

年間140時間はALTによるアシストを受ける授業である。限られた時数ではあるが、継続的に子供がネ

イティブな英語に触れる貴重な時間である。

【地域在住の外国人ボランティアの活用】

年間52時間は、地域在住のBobさん、Ruthさんに外国語の授業へのアシストを依頼している。分かりや



すい英語を使いながらゆっくり話してくれるので、子供がネイティブな発音に慣れて、簡単な質問なら無理なく答えられるようになった。

【異文化交流講座による外国人講師との交流】

5カ国（韓国、シンガポール、フィリピン、インドネシア、ブラジル）の外国人講師が自国の文化についての講座を開催してくれた御礼に、浜松や日本の文化を英語で伝える活動を設定した。（4年生と6年生）

次に示す子供の感想に、外国の人と直に英語で話す楽しさを味わえていることが表れており、こうした活動が効果的であることを感じた。

子供の感想

緊張はしたけれど、どんな答えが返ってくるのか楽しみでした。それを自分が聞き取れるかなという心配もありましたが、ちゃんと聞き取れてうれしくなりました。聞き取れるとまた質問したくなり、準備はしていなかったけれど、頭に浮かんだことを質問してみました。外国の人と話しているという実感がうれしかったです。また機会があったら外国の人と英語で会話してみたいです。（6年女子）

＜映像資料・ICTの活用を工夫する＞

週に1～2回という限られた授業を工夫するだけでなく、英語に触れる機会をできるだけ多くすることが効果的だと考え、週3回、朝の15分間に短時間学習「英語タイム」を位置付けた。英語タイムでは日本人教師の英語ではなくネイティブな英語に触れさせるために、全校でデジタル教材による学習を導入した。

動画で外国語に触れることで、耳で聞くだけでなく視覚を通した情報も取り入れながら英語を理解できる。「英語って、平たく言わないんだね。」という子供の言葉には英語特有のリズムに気付いたことが表れていた。

そして聞く力だけでなく、聞いたとおりに話すことにより、子供の発音が格段に向上した。教師の側も英語に慣れ、指導の負担感が減少するという効果を生んだ。



また、タブレットPCを活用することも子供のコミュニケーションを支えることにつながった。使いたい画

像を必要な分だけ簡単に保存できるのも強みである。それを示しながら伝えることで画像が助けとなり、分かりやすく伝わることを子供も教師も実感している。



<日常的に英語に触れる校内環境を工夫する>

英語のアルファベットについては、国語科のローマ字学習が唯一の学びである。そこで、単語としてのまとまりに慣れ親しませるために、基本的な単語にイラストを添えて校内のあらゆる場所に掲示した。階段には曜日や月を、昇降口には挨拶の言葉を掲示することにより、子供が授業で「これ、見たことがあるぞ」という意識を持ち、学習の負担感が軽減した。

また、教室には授業で扱う内容に応じた掲示を行い、日々の生活の中で新たな単語やフレーズを目にする環境を整えた。子供からは、「西小はあちこちに英語が掲示してあるので、自然と英語に慣れる気がする。」「Sから始まるってサ行の音なのだろうな…なんて思っている。」という声が聞かれるようになっていく。



5 研究成果と課題

(1) 成果

<西小学びのメソッドの確立>

学びの系統性と必然性に視点を当てた研究を通して明確になったことを、外国語教育を推進する上で重視する西小学びのメソッド10ヶ条として確立した。

西小学びのメソッド10ヶ条

- 1 既習内容を生かすことで学習効果を上げるべし
- 2 スモールステップを踏むことで無理なく学ばせるべし
- 3 small talk を取り入れて技能の習得を図るべし
- 4 聞くポイントを示すことで聞く力の習得を図るべし
- 5 イングリッシュパスポートで学習成果を実感させるべし
- 6 単元のゴールに設定する活動により目的を持たせるべし
- 7 他教科・領域と関連付け、異文化理解につなげるべし
- 8 外国人講師を活用して実践的な学びをさせるべし
- 9 ICTを活用してネイティブな発音に慣れさせるべし
- 10 校内掲示を工夫して日常的に英語に触れさせるべし

<新たな授業モデルの確立>

上に示した「西小学びのメソッド10ヶ条」を新たな教科である外国語科の授業の中に落とし込むことで、西小としての外国語科授業モデルが確立した。

西小外国語科授業モデル

Warm up

① Small Talk

- ・本時の内容に関連したテーマを設定する
- ・既習表現を繰り返し使うことで定着を図る
- ・対話を続けるための基本的な表現の定着を図る

② めあての確認

- ・本時のめあてがどう役立つかを子供に考えさせ、目的意識を持たせる。

Activity

③ デジタル教材の視聴

- ・自分の力で聞き取る→聞くポイントを押さえて再度聞き取る→聞き取れたことを確認する

④ 本時のやり取りをデモンストレーションで理解する

⑤ 会話 I

- ・黒板の補助カードを活用しながら会話する

⑥ 難しかった点を共有し、解決を図る

⑦ 会話 II

- ・補助カードなしでやり取りし、できるまで繰り返す

⑧ 本時で扱った単語やフレーズを書く

Review

⑨ イングリッシュパスポートで振り返りを記入する

- ・何ができるようになったか
- ・どんなことに気を付けたか
- ・今後の生活でどのように役立つか

導入期である今、こうしたメソッドと授業モデルを確立させたことで、教師も子供も自信を持って取り組むことができるようになった。

<国際感覚の基盤の芽生え>

4月に行われた全国学力・学習状況調査の児童質問の結果、次のことが明らかになった。

外国の人と友達になったり、外国のことについてもっと知ったりしてみたいと思いませんか。

「そう思う」
全国平均 39.2%
本校 53.1%

日本やあなたが住んでいる地域のことについて外国の人にもっと知ってもらいたいですか。

「そう思う」
全国平均 46.7%
本校 56.3%

異文化理解や交流を求め、自国の文化への理解も得たいと願う気持ちの育ちは、国際感覚の基盤の芽生えであり、本研究の大きな成果であると言える。

(2) 課題

評価については、本年度中に示される国のガイドラインに沿って研究することが課題として残されている。また、確立したメソッドと授業モデルについても研究を継続し、より良いものに磨き上げていく必要性を感じている。

自国の文化を知り、異文化理解や交流を求める思いは英語を学ぶ原動力となる。この取組を継続しながら、グローバル社会を豊かに生きていく子供の育成に努めていきたい。

読書活動を活発にする取り組みについて

～朝読書、ビブリオバトルを通して～

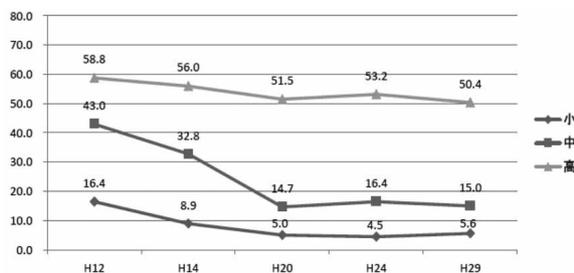
静岡県立富士宮西高等学校

校長 嶋 照生

I はじめに

—— 読書活動は、子どもが言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものである—— これは「子どもの読書活動の推進に関する法律」の基本理念の抜粋である。このような読書の意義は衆人の知るところであるが、高校生をめぐる読書の実態は実に危機的な状況にある。小中学生の不読率は改善傾向にあるのに対し、高校生の不読率は依然として高い（資料1）。学習や部活動に割く時間の増加やスマホの普及による読書への関心の低下などが主な原因と考えられる。

【資料1】子供の読書の現状（不読率の推移）



第63回学校読書調査（公益社団法人全国学校図書館協議会）

このような実態を裏付けるように、学校現場でも読書量の不足が一因と思われる漢字や語彙を含めた生徒の一般常識の欠如や、読解力・表現力・想像力の低下などが問題として認識されてはいるものの、日々の業務に追われ多忙な教員にとって、即解決しなければならない課題に比べ、後回しにされがちな課題であることは否めない。だが、このような状況が将来的にもたらす影響は決して小さくないはずである。学校として何かできることはないか。あまり気負い過ぎずに身近なことから着手でき、尚かつすべての生徒、教員を巻き込みながらできることはないかと考えた。

そこで、従来週2回だった朝読書を毎日の実施に変

更し、それに先んじてビブリオバトルを総合的な学習の時間に取り入れたところ、生徒の読書量が増加するなど、一定の成果が認められたので、以下にその実践例を報告していきたい。

II 実践報告

(1) 朝読書

本校では平成29年度まで、放課後の部活動や補講の開始時間が遅くなるなどの理由で、週2回のみ朝読書を実施していた。しかし、本校はほぼ全員が進学を希望していることもあり、実態は、教員が入試対策の朝学習に転用したり、小テストの勉強や授業の予習をする生徒がいたりするなど、朝読書への取り組みは必ずしも積極的とは言えないものであった。朝読書が衰退していく進学校が増えていく中で、本校において朝読書の毎日実施を提案した場合、やはり難色を示す教員が多いただろうと当初予想していた。

ところが、教員への事前アンケートの結果、「週2回では朝読書の位置づけが中途半端であり、徹底しにくい」「朝読書がある日とない日で時程が変わるのは生活のリズムをつくりにくい」などの理由から、むしろ「毎日実施したほうがよい」という声はかなりあることがわかった。そこで変更を提案したところ、比較的容易に教員の賛同を得ることができた。

こうして平成30年度より、朝読書の毎日実施がスタートした。その際徹底したことは、

1. 8時20分の開始時間をきっちり守ること。
2. 朝読書の10分間は読書に集中し、他の作業は絶対に行わないこと。
3. 監督には担任・副担任両方であたり、教員も生徒と一緒に読書すること。

の3点である。実施するからには、全職員の協力のもと、学校全体の取り組みとして行うことが肝要であると考えた。また、第1回目の朝読書の際、3分ほど時間を

いただき、図書課から生徒に向けて朝読書の意義や守ってほしいことを全校放送で伝えた。

2年目を迎えた現在、朝の10分間、学校全体が静まり返り、読書に集中する体制が確立されている。

(2) ビブリオバトル

① 導入の経緯

まず、試みに第2回静岡県高等学校ビブリオバトル(平成28年9月)に図書委員の生徒2名に参加してもらったところ、結果は思いがけず、1名が予選を勝ち抜き決勝に残ることができた。このことは参加した本人にとって大きな自信につながり、また、他校の生徒との楽しい交流もできた実のある経験となった。

実際に見たことでビブリオバトルに面白さと意義を感じ、校内でも実施したいと思い、平成29年度からの総合的な学習の時間に取り入れることを提案した。ビブリオバトルについては教員にまだ十分理解されていなかったため、次の3点をビブリオバトルの意義として提示した。

1. プレゼンテーション能力の育成
2. コミュニケーションの場の形成
3. 読書意欲の喚起

これらは文科省が「総合的な学習の時間」にうたっている、「思考力・判断力・表現力」の育成につながるものであるとの理解を教員から得ることができた。また、ビブリオバトルは教員の事前準備の労力がほとんど要らず、多忙な教員が専門知識やスキルの有無と関係なく、だれでも気軽に生徒に取り組ませることができることも重要な要素となり、実施が決まった。

② 進め方

全学年が学年ごと総合的な学習の時間とロングホームルームを使って年間3時間配当で実施し、以下のよう手順で行った。

1. 1年生はあらかじめビブリオバトルのガイダンスを行う。
2. 日程を生徒に予告し、発表の準備を促す。
3. 「グループチャンプ本決定戦」の実施
クラスごと6人から7人のグループを6つ作り、グループごと机を向き合わせる形で一人ずつ発表し、挙手によってグループ代表を決める。
4. 「クラスチャンプ本決定戦」の実施
クラスごと各グループの代表者が教室の前に出て発表し、投票でクラス代表1名を決める。

5. 「学年チャンプ本決定戦」の実施

学年で体育館を使い、図書委員がマイクや演台、カウントダウンタイマーなどの会場準備や司会進行を担当し、クラス代表者が学年全体の前で発表をし、チャンプ本を投票で決める。

なお、ビブリオバトルの公式ルールに従い、発表時間は1人5分、それぞれの発表の後にその発表に関する質問タイムを2～3分とった。投票の際には、「一番読みたくなった本」を基準にすることを周知しておいた。

③ 活動の様子

少人数で行うグループチャンプ本決定戦では、さほど緊張した様子もなく、リラックスした雰囲気や友だちとのおしゃべりを楽しんでいるようだった。反面、準備不足で話す内容をまとめきれていなかったり、5分間を使いきれず、意味のない間があいてしまったりした生徒もいた。ただ、発表の仕方を事前に教師があまりきちんと指導したり、形式を重視したりすると、生徒は委縮して負担に感じてしまい、「コミュニケーションの場」として楽しめなくなってしまう。まずは「よい」発表を取ってあまり期待せず、生徒の好きなようにやらせ、ビブリオバトルに気軽に参加させることが大事だと感じる。



<グループチャンプ本決定戦と
クラスチャンプ本決定戦のよう>

また、グループのメンバー構成により、質問タイムが盛り上がるグループとそうでないグループが出てしまう場合もあったが、質問タイムはビブリオバトルを面白くする大事な要素なので、グループを作る際に配慮するような手心を、教員が多少加えてもいいかもしれない。

クラスチャンプ本決定戦や学年チャンプ本決定戦になると、大勢の前に立って発表することになるので、さすがに生徒もしっかりと準備をして臨むようになった。このように生徒の発表は、上の対戦になっていくにつれて自然にスキルアップされていく。その際教員は一切介入しておらず、生徒は他の生徒の質問などを

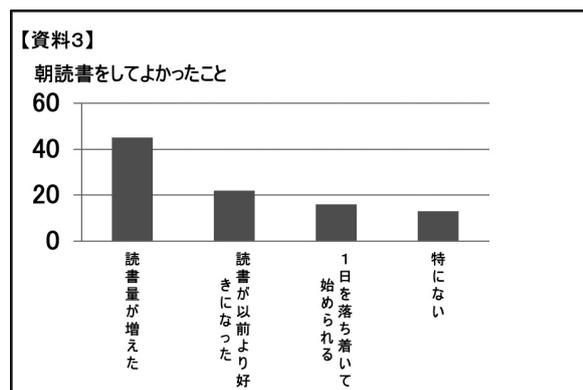
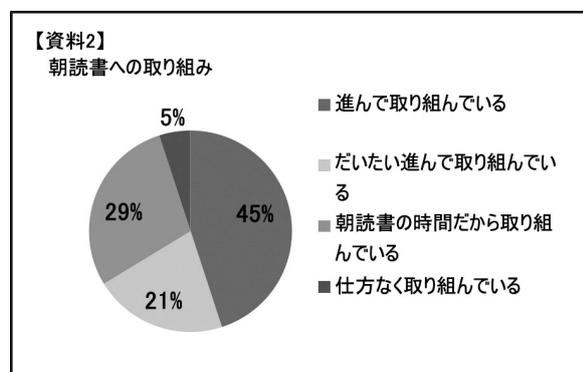
考慮し、自分で内容を工夫していった。観戦者としての生徒の聞く姿勢も必然的に真剣さを増していった。

また、生徒がチャンプ本を選ぶ基準はプレゼンテーションの面白さに傾きがちであり、紹介内容の深さとは必ずしも一致しない。学術的な本は敬遠される傾向もある。そこで本校では「チャンプ本」のほかに、教員が選ぶ「教員賞」を作り、内容の深さや本の選定の仕方も評価からもれないよう配慮した。

(3) 実践の成果

① 読書量の増加

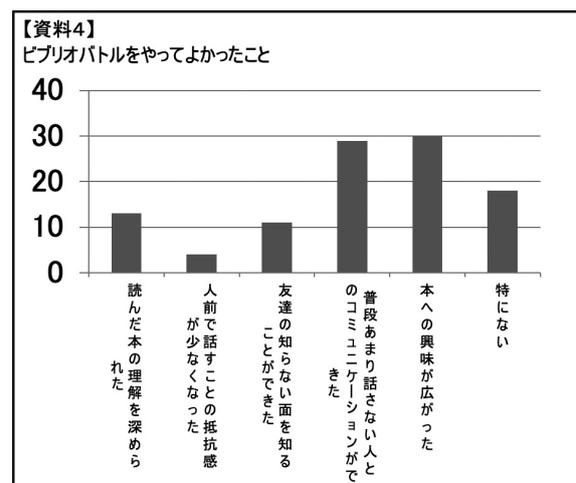
まず、生徒一人当たりの年間読書冊数は平成28年度の6.6冊から平成29年度は7.4冊、平成30年度には9.2冊と増加した。このことに朝読書が関係していることは、生徒へのアンケート結果で、朝読書への取り組みが「積極的」と「だいたい積極的」を併せて66%が積極的に取り組んでいると回答しており、また、朝読書をしてよかったこととして「読書時間が確保された」と答えた生徒が80人中45人いることによって裏付けられている(資料2)。加えて「読書が以前より好きになった」と答えた生徒が22人いたことから、読書にはある程度のトレーニングによる「慣れ」が必要だということもいえる(資料3)。



② ビブリオバトルの生徒評価

生徒のアンケートの結果、「楽しかった」と「まあ楽しかった」を合わせて66.3%の生徒が「楽しかった」と答えている。

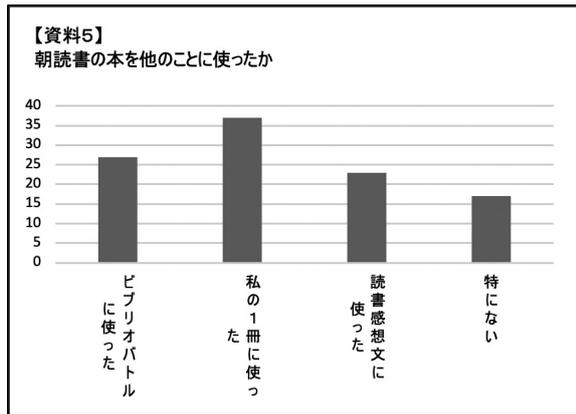
また、ビブリオバトルをやってよかったこととして、「本への興味が広がった」と答えた生徒が80人中30人、「普段話さない人とコミュニケーションができた」が29人いたことは、ビブリオバトルの意義である「読書意欲の喚起」「コミュニケーションの場の形成」にある程度合致しているといえる(資料4)。



③ 他の読書活動とのリンク

読書では、読んだ本の内容や読んだ時に感じたことを自分の記憶に少しでも残し、生徒同士で本の情報交換を行うことも大事である。そこで、「私の1冊」という名称で、おすすめ本の紹介文を生徒全員に書いてもらい、クラスごと廊下掲示をした。その際、生徒が気軽に取り組めることが大事だと考え、A6サイズの小さな紙に自分の名前、書名、著者名のほか、ポップのような簡単なフレーズを入れたりイラストを入れたりして、書く方も見る方も楽しめるような工夫を促した。さらに、図書委員に「私の1冊大賞」を選ばせ、内容の深いものは「国語科教員賞」として表彰した。

先のアンケートの結果、この「私の1冊」を書く際、朝読書で読んだ本を紹介する生徒がかなりいた。また、同じアンケートで、朝読書で読んだ本をビブリオバトルや読書感想文に使った生徒も少なからずいることがわかり、朝読書が他の読書活動にうまくリンクしたといえる(資料5)。



④ 地域とのつながり

3年生については、ビブリオバトル学年チャンプ本決定戦を、6月に行われる文化祭の一般公開日に設定し、図書委員が運営にあたった。事前に宣伝ポスターを作り、視聴覚室を会場に、スクリーンやマイクを準備し、パワーポイントで発表者名や書名、紹介する本の画面を作り、カウントダウンタイマー画面とともにスクリーンに映し出すなど、公式ビブリオバトルの本番に近い形を再現した。文化祭という一大イベントの中に組み込んだことで、学年を越えた行事としてさらなる盛り上がりを見せただけでなく、一般公開によって地域の方たちが本校の生徒の活動の一端を知る機会となり、本校への関心を高めることにつながった。



<文化祭での3年生学年チャンプ本決定戦のもよう>

また、そのような活動がもとになり、11月に富士宮市立図書館での、本校生徒による公開ビブリオバトルが実現した。これも文化祭の

やり方に準じて図書委員が運営に当たり、会場準備や図書館で事前に配るチラシ作りやパワーポイントでの画面作り、リハーサルなどを行った。たまたま平成30年9月に行われた第4回静岡県高等学校ビブリオバトルに参加した生徒の紹介した本がチャンプ本に選ばれ、その生徒が発表者の1人に加わったため、この企画に関心を呼び、当日は会場の富士宮市立図書館視聴覚室に40人以上の観戦者が集まった。質問タイムでは学校とは違う鋭い質問も投げかけられ、生徒にとっても刺激的な体験となった。また本校の生徒から地域の方たちに本の面白さを発信することができた。この公開ビブリオバトルは好評を博し、本年度も行う予定である。

⑤ 書店とのコラボ

前述した第4回静岡県高等学校ビブリオバトルの優勝者は、幸運にも平成31年1月に東京で行われた第5回全国高等学校ビブリオバトル決勝戦でも優勝し、新聞やテレビ、インターネットのサイトなど、多くのメディアで取り上げられることになった。さらに、紹介した本の出版社が、優勝した時の発表映像を使ったプロモーション動画を作成し、それが地元の書店で流され、大きな反響を呼ぶことになった。

その縁があって、書店から「西高コーナー」設置の提案があり、本校のビブリオバトルで学年チャンプ本に選ばれた本を、書店の一角で展示していただく運びとなった。ビブリオバトルを始めたことがきっかけで、様々なことが作用し合い、思いがけない方向へ好転していった。

III 今後の課題

読書量の増加という点では、高校生の「不読」に対し朝読書やビブリオバトルが一定の成果を上げたといえることができるが、数値化したり、具体的現象としてとらえたりできるのはあくまでも成果の一部であり、実際に一人一人の生徒自身にどのような影響を及ぼしたかを検証することはほとんど不可能といってよい。読書の効用は長いスパンで見るとべきであるし、個人のおかれた環境や様々な社会的要因と複雑に絡み合いながら時間を経て醸成されるものであろう。そのような意味で、朝読書やビブリオバトルが彼らにどんな影響を与えるかは、理想的展望をもって取り組んだとしか言いようがない。だが、当面の課題として挙げられることはある。朝読書もビブリオバトルも自分の好きな本を自由に読んだり紹介したりするものであり、読書を楽しむことや、人とのコミュニケーションを大事にすることが前提である。しかし、読書に表現力や創造力、人生を深く生き抜く力などの育成を期待するとき、読書の質を高めていくことがどうしても必要だと感じる。それには生徒の興味関心を、目の前のことから外の世界へ広げていく必要がある。理想論を言えば、生徒一人一人の読書体験が互いに刺激となり、未知の分野に手を伸ばしてくれたらよいのだが、それを期待するのは楽観的に過ぎる。より深い読書体験をするために、学校として何ができるか、今後も様々な方向からのアプローチを模索していくべきだと考える。

「視点」と「問い」の質を高めることで追究する子どもを育てる

～「社会的な見方・考え方」を働かせた社会科の授業づくり～

兵庫県佐用郡佐用町立利神小学校

校長 桑田 隆男

1 はじめに

昨今の社会情勢は大きく変化しており、情報化やグローバル化といった社会の変化が予測を越えて加速度的に進展し、今後は社会や生活がより一層大きく変化していくものと予測される。このような変化の中で生きていくために、児童一人一人が、これからの社会の担い手として主体的に社会や自分の人生に向き合い、それらをより豊かにしていくことが求められている。そこで、本校では昨年度より児童一人一人がよりよい社会の担い手となるよう社会科の研究を深めることにした。

まず、平成29年度末に3年生から6年生の児童の実態を社会科アンケートで把握した。

【肯定的な回答率の高かった設問】

設問②「社会科の授業はわかりますか」88.3%

設問④「タブレットやインターネット、本やパンフレットで調べることは好きですか」85.0%

設問⑤「地域の人と一緒に学習をするのは好きですか」85.0%

設問⑨「地図帳を使って日本のことや世界の国などを調べたりするのは好きですか」80.0%

【肯定的な回答率の低かった設問】

設問⑬「友だちの考えに対し自分の意見を言ったり質問したりできますか」60.0%

設問⑦「写真やグラフを見て不思議だと何かを調べたいという気持ちになりますか」61.7%

設問⑩「図や写真、グラフなどの資料を使って自分の考えを説明できますか」61.7%

設問⑫「自分の考えを文で書くことができますか」66.7%

これらの社会科アンケートの結果から、利神小学校の児童は社会科の授業は好きで、授業も理解している

子が多いが、自分の考えを持ってそれを説明したり発表したりすること、資料を読み取り、自分の考えを持つことや文章で表現することなどは得意ではないことがわかった。

2 研究テーマ

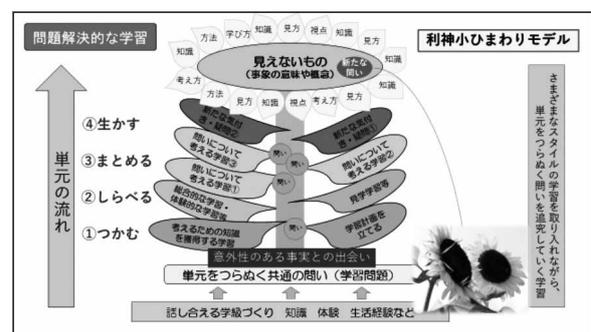
そこで、児童の実態をふまえて、研究テーマを「『視点』と『問い』の質を高めることで追究する子どもを育てる」とし、サブテーマを～「社会的な見方・考え方」を働かせた社会科の授業づくり～と設定した。

3 「社会的な見方・考え方」を働かせた社会科の授業づくり

「見方・考え方」を働かせる社会科の授業づくりとは、「単元等の目標を実現するために、教材化の視点とともに、問いや資料、学習活動などを含めた問題解決的な学習の展開を工夫することである」と本校では定義している。

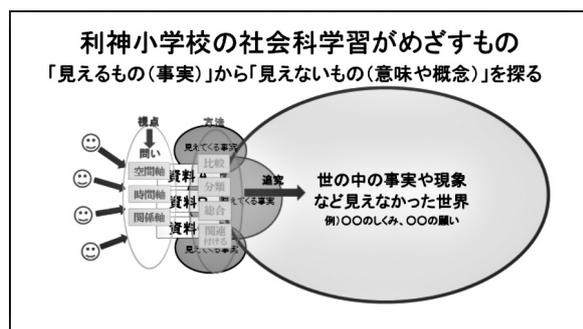
(1) 問題解決的な学習（利神小ひまわりモデル）

そこで、問題解決的な学習の流れを「利神小ひまわりモデル（下図）」として考案した。



単元の導入場面で、意外性のある事実（資料等）との出会いにより、単元をつらぬく共通の問い（学習問題）を持ち、「①学習問題をつかむ」「②学習計画に従って、しらべる」「③調べたことをもとに話し合い、まとめる」「④学習成果を生かす」という単元の流れを設定した。

そして、単元の流れの中では、問いについて考える学習や見学学習、体験的な学習等の「さまざまなスタイルの学習を組み合わせながら、単元をつらぬく共通の問い（学習問題）を追究していく学習」に取り組むことにした。これらの学びを通して、概念をつかみ、さらにその中から「新たな問い（種）」が生まれ、それが次の単元や学びにつながっていく（花開く）という問題解決的な学習を作り上げていくことを全職員で共通理解した。



まず、資料から「空間軸」「時間軸」「関係軸」を視点として問いを引き出し、見えてくる事実を「比較」「分類」「総合」「関連付ける」などの方法をとって追究することにより、世の中の事実や現象などの見えなかった世界が見えてくるような授業づくりをめざした。

**小学校社会科における
追究の「視点」と「問い」の例**

考えられる視点例	視点を生かした考察や問いに向かう「問い」の例
空間軸 ○位置や空間的な広がり 地理的位置、分布、地形、気候、環境、範囲、地域、構成、自然条件、社会的条件、土地利用 など	・どのように広がっているのだろう。 ・なぜこの場所に集まっているのだろう。 ・地域ごとの気候はどのような自然条件によって異なるのだろう。
時間軸 ○時期や時間の経過の視点 時代、起源、由来、背景、変化、発展、継承、維持、衰退、計画、持続可能性 など	・いつどんな理由で始まったのだろう。 ・どのように変わってきたのだろう。 ・なぜ変わらずに続いているのだろう。
関係軸 ○事象や人々の相互関係の視点 工夫、努力、願い、素直、働き、つながり、関わり、仕組み、協力、連携、対策・事業、役割、影響、多様性と共生(共に生きる) など	・どのような工夫や努力があるのだろう。 ・どのようなつながりがあるのだろう。 ・なぜ〇〇〇〇の協力が必要なのだろう。 ・どのように続けていくことがよいのだろう。 ・共に生きていく上で何が大切なのだろう。

考えられる視点の例としては、「空間軸」として、地形や気候、自然条件などの位置や空間的な広がり視点。「時間軸」として、時代や由来、変化、発展などの時期や時間の経過の視点。「関係軸」として、人々の工夫や努力、願い、つながり、しくみなどの事象や人々の相互関係の視点などに着目し、そこから生まれた問いを、比較、分類、総合、関連付けることにより、「社会的な見方・考え方」を働かせた社会科の授業づくりに取り組んだ。

(2) 地域教材の開発とその活用

児童にとって身近な地域の事象を学ぶことは、児童の関心・意欲を高めるだけでなく、地域を愛し、地域に関心を持ち続けようとする意欲を高めることに有効である。幸いなことに、平成29年



10月に利神城跡が国史跡に指定されるなど、改めて「ふるさと意識の醸成」を町全体で叫ばれることになった。そこで、地域とともにある学校づくりの観点からもこの機会をチャンスと捉え、積極的に地域教材の開発とその活用を進めてきた。

4 授業実践(平成30年度の取り組み)

(1) 「工場ではたらく人々の仕事」(3年)

3年生の「工場ではたらく人々の仕事」の学習で、地域教材「そうめん工場の仕事」を取り上げた。視点として、空間軸に着目したところ、分布、気候、自然条件などから、「そうめん工場が、なぜ、この場所に集まっているのだろう」という問いが出てきた。つまり、そうめん工場に適した立地条件に関する問いが引き出されたことになる。

授業展開の中で、児童は、どんなところにそうめん工場があるのかを地図で確かめながら発見し、それらを分類することで、揖保川流域にたくさんのそうめん工場があるということに気付いた。「なぜ、揖保川流域にたくさんのそうめん工場があるのだろう」という問いを考えていく中で、

- ・近くでそうめんの原材料である小麦や綿実油、塩が作られており、手に入りやすかった。
 - ・揖保川のきれいな水を利用した。
 - ・揖保川流域には、たくさんの水車があり、冬場に水車を利用し小麦を粉にすることができた。
 - ・冬、晴れる日が多い気候をうまく生かした。
- 等の事実を児童が見つけ出した。それらを関連付け

て、問いに対する結論をまとめた。

さらに調べていくうちに、外国へ出荷しているという事実と出会った児童は、「なぜ外国にそうめんを出荷しているのだろう」という新たな問いを



もち、発展的な学習へと展開した。

(2)「水害にそなえて」(4年)

佐用町では、平成21年8月に大きな水害が起こり、甚大な被害が出た。その水害の教訓を生かし、新学習指導要領における自然災害を扱った新単元として開発した。

視点として、空間軸に着目したところ、地形、気候、範囲、自然条件から「なぜ、平福でこのような水害が起きたのだろうか」、「水害が引き起こされた原因は何だろうか」という問いが引き出された。

また、関係軸に着目すると、工夫、努力、願い、連携、対策・事業、共生、安全の視点から、「どうすればこのような水害が起きた時、被害を最小限に抑えることができるのだろうか」という問いも生まれた。

さらに、時間軸にも着目し、過去の水害を調べ、未来につなげるという取り組みにもつながった。これらの問いを結び付け、問いの構成表をもとに授業として展開した。

まず、防災フィールドワークで水害の被害が大きかった校区(平福地区)を調べ、実際に見て回った。

地域の方から説明を受け、ハザードマップに気付いたことを書き留めた。被害が大きくなった



原因を探り、被害を少なくするための地域や町役場の取り組みを調べることで、被害を最小限に抑える取り

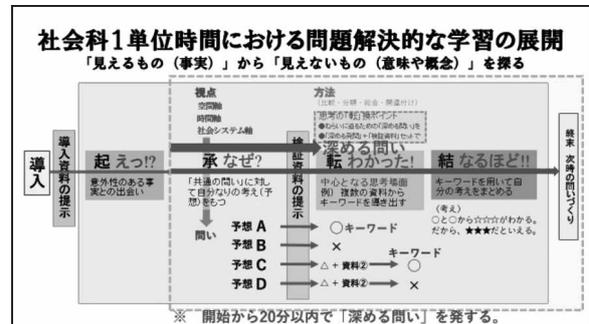
組みについて学んだ。

単元の終末(学習の成果を生かす)場面においては、自分の住む家の周りを家族と一緒に実際に見て回り、MYハザードマップを作成することで、自分事として水害に備えるとともに、今、自分たちができることを考え、話し合った。

5 中心となる思考場面を生み出すために

昨年の取り組みの中で、「問い」を生み出すために一単位時間(45分)のうち15分も費やすという課題に突き当たった。また、本当に深めたい問い(本校では「問い」の質を高めるという観点から「深める問い」と定義)を発する時間が授業時間の後半、つまり、授業開始後35分~40分くらいになってしまい、じっくり考える時間がないという課題にも直面した。単元における問題解決的な学習の流れは定着してきたものの、一単位時間における問題解決的な学習の流れには課題が残った。

そこで、本年度は、下図のような一単位時間における問題解決的な学習の展開を考案した。

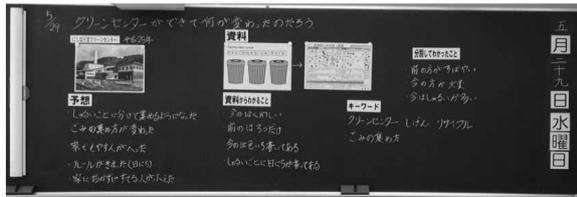


まず、前時に「問い」を作成することで、本時は「深める問い」を発するまで20分で展開できるように工夫・改善した。

前時に「問い」をつくることで、前もって教科書の内容に目を通してくるなど予習してくる児童が増え、見通しをもって授業に臨むという主体的な態度の育成につながった。また、「深める問い」についてしっかりと議論できる時間を生み出したことで、「深い学び」にもつながった。教師が児童の発言やつぶやきを問い返すことで、深めることが可能となった。さらに、「次時の問い」をつくることで、振り返りの視点まで生み出したことは大きな成果である。

『「視点」と「問い」の質を高めることで追究する子どもを育てる』という研究テーマを具現化するような児童の姿が見え始めてきたことに確かな手ごたえを感じている。

このことは板書や学習ノートの構成にも良い影響を及ぼしている。中心となる思考場面を板書や学習ノートの紙面の2/3を当てるように変化してきた。それだけ「深める問い」を意識した授業展開がなされてきた証といえる。



板書から見えてきた中心となる思考場面の変容

6 社会科の学びを生かす取り組み

「利神小版 未来伝承プロジェクト」

本校では、社会科だけの学びに終わらず、社会科の学びを生かす取り組みに重点を置いている。児童の「わかる」を「できる」に高めていくことが、児童の深い学びにつながると考えているからである。

一昨年より6年生は、歴史を学んだあとに、地域のボランティアガイドの方と宿場町「平福」の町を歩き、ARマチアルキというアプリを利用して、「ふるさと利神」を発信している。

ARマチアルキアプリは、スマートフォンやタブレットをかざすと、児童が作成した説明が浮かび上



がる仕組みになっている。昨年は、6年児童がパンフレットを作成し、地域住民や保護者、宿場町「平福」を訪れた観光客に「ふるさと利神」のよさを発信した。



児童が作成したマチアルキ画面

地域と学校が連携・協働し、「利神小版 未来伝承プロジェクト」として社会科の学びを生かした取り組みを引き続き地域ぐるみで推進していきたい。

7 まとめにかえて

今年7月、3年生から6年生に社会科アンケート（3回目）を実施したところ、平成29年度末調査において肯定的な回答率の低かった設問の結果は、以下のとおりであった。

設問⑬ 60.0% → 67.9% 設問⑦ 61.7% → 84.9%

設問⑩ 61.7% → 66.0% 設問⑫ 66.7% → 73.6%

上記の結果から、自分の考えを持って説明したり、発表したりすること、資料を読み取り、自分の考えを持つことや文章で表現することができるようになった児童が少しずつではあるが増えてきたことがわかる。

また、今回の調査で最も肯定的な評価が高かった設問は、設問②「社会科の授業はわかりますか」(92.5%)であった。また、伸び率の高かった設問が設問①「社会科の学習は好きですか」(75.0% → 90.6%)と設問⑦「写真やグラフなどの資料を見て不思議だなとか何か調べてみようという気持ちになりますか」(61.7% → 84.9%)であった。

この結果から本校において社会科を好きになり、わかるようになった児童が増えたこと、そして、資料を見て何か調べてみようと思う主体的な態度の見られる児童が増えたことがわかる。今回の取り組みを通して、『「視点」と『問い』の質を高めることで追究する子どもを育てる』という研究テーマに大きく近づいてきた。今後も引き続き研究を深めていきたい。

視覚障害教育におけるイメージの形成を目指した三角関数の指導

秋田県立視覚支援学校

教諭 深川 亮

1 はじめに

(1) イメージの定義

本研究におけるイメージを、「数学学習における動的な操作や触察から得られる、心に思い浮かべられる像」と定義し、数学的概念や数学的な見方・考え方に包摂し、概念形成や問題解決に不可欠な一部として位置付ける。例えば、点(4, 1)の座標は「グラフ盤で左手指を原点に置いたまま、そこから右手指を x 軸方向に4移動、 y 軸に平行な線に沿って1移動させてピンを差した点」という操作・触察のイメージである。

(2) 主題設定理由

本研究は平成29年度の実践報告である。(実践内容を選択し整理するまで時間を要し、今回の報告となった。)対象生徒は高等部3年男子で、先天性弱視、6才から盲(両眼光覚)となり、点字の読み書きを習得した。平成24年度に本校中学部入学、平成29年度に本校高等部普通科を卒業している。

点字の読み書きではスムーズに読む力及び点字盤を使用して聴写、転写する等の書く力をもつ。また、学習意欲があり、短期記憶に優れ、加減乗除や整式の展開、因数分解等の計算力、両手を効果的に活用して具体物を触る力を有する。

指導上の課題は、視覚障害(盲)のため、新出で抽象的、視覚的な情報となる図形やグラフを自力でイメージすることは難しく、継続して特別な支援が必要とされることである。そこで本研究では「三角関数」の指導に焦点を当てる。「三角関数」は、度数法と弧度法の関連、及び単位円やグラフによる図的表現、単位円とグラフとの関連など、抽象的、視覚的なイメージが多く、健常の生徒にとっても難易度が高い分野である。本研究は、本生徒の基礎学力を向上させるとともに、高校数学に関連する視覚障害教育の専門性を継続・発展させていく上で意義深いと考える。

2 実践の概要

(1) 仮説

数学Ⅱの「三角関数」の内容において、視覚障害を

有する生徒の触覚、聴覚等の保有感覚を十分に活用し、「操作的活動」「言葉による整理」を重視した指導の実践を行うことで、数学的概念や数学的な見方・考え方のポイントとなるイメージが形成され、問題解決する力や基礎学力の定着を図ることができる。

(2) 指導のポイント

ア 「操作的活動」と「言葉による整理」を重視した学習過程

(ア) 操作的活動…教具の触察や操作と数学的概念及び数学的な見方・考え方を意味付け・関連付けし、既習イメージを確認・修正したり、新出イメージの形成を促したりする活動。

(イ) 言葉による整理…既習及び新出イメージ等を言語化したり、それらを含む数学的概念及び数学的な見方・考え方をまとめや解答として整理したりすること。

イ 操作的活動の留意点

(ア) 教具の作成と活用

点図と比較した場合、教具の長所は、素材や凹凸等の違いで事象の比較がしやすくスムーズに理解できること、ピンを差したり、紙を貼ったりする等の記録ができることにある。教具の作成の際は、①自力で操作可能、②大きさや構造に配慮すること、③素材に配慮し、触覚で事象の変化が分かりやすいもの、④目印やガイドを使用することの4点に留意する。

(イ) 操作・触察の方法の明確化と指示

既習イメージの確認・修正をしながら、新しい数学的概念及び数学的な見方・考え方のポイントとなるイメージを習得できるように、操作・触察の方法を明確にして効果的に進める。

また、何をどうするのか、位置や方向を示す言葉を使って明確な指示で伝える。例えば「 $\triangle ABC$ のボードをAが上にBが左に、Cが右に位置するように置いてください。」等と指示する。

ウ 言葉による整理の留意点

(ア) イメージの言語化

a 既習イメージの言語化…時間が経つと忘れていた

り、誤っていたりする場合があるため、既習内容を言語化して、確認する必要がある。誤っていた場合は操作的活動を通してイメージを修正する。

- b 新出イメージの言語化…教師の説明や生徒自身の操作・触察で習得した新しいイメージを言語化して、形成や定着を促す。
- c 予測イメージの言語化…操作的活動で得たデータを基に、問題の結果や考え方について直観的に見当をつけたり、論理的に見通しをもったりするために言語化する。また、それが正しいかどうか操作的活動で検証する。

(イ) まとめや解答の記述

本生徒は、図形やグラフ等の視覚的情報を記述することができない。そこで、その代替手段として操作的活動で形成した視覚的情報のイメージをまとめや解答として記述する。

(3) 評価方法

1 単位時間における評価方法は次のとおりである。

- ア 操作・触察及びイメージや考察…問題に興味・関心をもち、適切な操作や触察を行い、問題をイメージしたり考察したりすることができたか。
- イ ポイントの説明…操作や触察、教師の説明により学習のポイントをつかみ、イメージを含む数学的概念及び数学的な見方・考え方を説明できたか。

(4) 研究内容

ア 授業実践 1 「三角関数：一般角と弧度法」

(ア) 本時の目標

弧度法の定義を理解し、度数法を弧度法に換算する。

(イ) 教具「単位円模型」の活用 (図 1 参照)

中心 O、半径 1 とする単位円 (長さ 80mm、厚さ 8mm、カラーボードにマグネットを添付して作成) に半直線 OX、半直線 OP を貼り付け

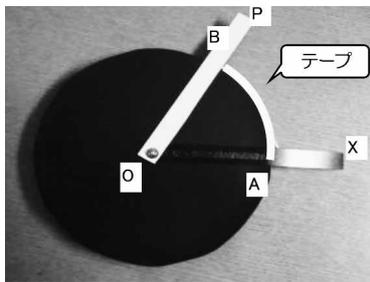


図 1 単位円模型①

た。半直線 OX は固定、動径 OP は点 O を中心に回転させることができる。弧の長さが分かるように厚みを付けた円の縁にスポンジテープ (以下、テープ) を貼って活用する。

(ウ) 操作・触察の方法

半直線 OX が右側に位置するように置く。半径 OA

(= 1) と同じ長さのテープを弧 AB に貼り、それに合わせて動径 OP を回転させ、そのときの $\angle XOP$ の大きさを 1 ラジアンと定義することを確認する。同様に角の大きさと弧の長さは比例することから、2、3、 2π 、 π ラジアン の長さのテープを弧 AB に貼り、動径 OP を移動させることで角の大きさをとることができるようにする。

(エ) 学習活動の様子 (一部抜粋)

問題 半径 1 の単位円について答えなさい。
 (1) 1 ラジアン、2 ラジアン、3 ラジアンに対する弧の長さにテープを貼りなさい。
 (2) 円の半径と弧の長さが等しい場合、角の大きさは何ラジアンか。
 (3) 動径 OP が 360° 回転、 180° 回転したときの中心角の大きさをラジアンでそれぞれ表せ。

問題 (1) ※以下、T は教師、S は生徒の言動を示す。

T: 単位円の半径 OA に貼っていたテープを弧 AB に貼り付けるよう伝える。「半径を 1 とみたときの弧 AB の長さ 1 に対する中心角の大きさが 1 ラジアンです。」

S: 同様に 2 ラジアン、3 ラジアンに対する弧の長さのテープも貼り、弧の長さに応じて角も大きくなることを確認する。

S: 3 ラジアン のテープに貼り、動径 OP を移動させ、 180° より少し小さい角なので、「3 ラジアンは 170° くらい。」と推測する。

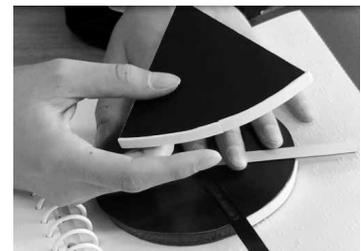


図 2 半径 2 の角 (下は単位円)

問題 (2)

T: 模型を提示し、「円の半径 2 で弧 AB の長さが 2 のとき、何ラジアンか。」と発問する。(図 2)

S: 実際に半径 2 で弧 AB の長さ 2 であることをテープを貼って確認する。「比の関係から 1 ラジアン。」
 「2:2 は 1:1 だから。」半径 1 と半径 2 の角を重ねてどちらも同じ角の大きさであることを確認する。

問題 (3)

S: 「 360° に対する弧の長さは円周の長さと同じから $2\pi r$ 。」

T: 「今、半径 r はいくつ?」

S: 「半径は 1 なので 2π です。」 「つまり 360° は 2π ラジアン。」 (180° 回転の問題は省略)

まとめ

T：模型にπラジアンに対する弧の長さのテープrを貼り、角をつくるよう指示する。(図3)



図3 単位円模型②

S：「なんとなく分かった。例えば、60°の場合は、 $2\pi + \pi$ ラジアンと60°だから、あと $\frac{\pi}{3}$ ラジアンということか。」

T：「60°はなぜ $\frac{\pi}{3}$ になるの？」

S：「180°を3つに分けただけ。30°、45°、60°がそれぞれ、 π の $\frac{1}{6}$ 、 $\frac{1}{4}$ 、 $\frac{1}{3}$ ということか。」と自力で気付く。

T：「大事なところはどこかな？」

S：「∠XOPの角の大きさは、半径を1とみたときの弧ABの長さで表せることです。」(新出イメージの言語化)

(オ) 学習活動の評価

操作的活動を通して、弧度法による角の表し方について「角の大きさは半径を1とみたときの弧の長さと同値」という触覚(弧)のイメージをもつことができた。その結果、既習事項(円周=直径×π)を活用して、中心角の大きさが360°や180°のときも弧度法で求めることができた。また、「半径が1以外でも半径と弧の長さの比が1:1であれば1ラジアン」と気づき、弧の長さとの角の大きさの関係を理解することができた。

さらに、模型の弧にπラジアン(180°)のテープを貼ったことがきっかけとなり、 $60^\circ = \frac{1}{3}\pi$ 等、自力で度数から弧度への換算をすることができた。

イ 授業実践2「三角関数：y = sin θのグラフ」

(ア) 本時の目標(評価規準)

単位円上におけるθに対応する弧及びsin θの位置と長さが分かりそれを基にしてy = sin θのグラフを作り、言葉で整理する。

(イ) 教具「単位円模型(以下、単位円)」「グラフ盤」の活用(図4~6参照)

単位円は縦210mm、横250mmで、その上に単位円(半径85mm、厚さ10mm)を固定して作成した。x軸、y軸は凹線、θが $\frac{\pi}{6}$ 、 $\frac{\pi}{4}$ 、 $\frac{\pi}{3}$ 、 $\frac{2}{3}\pi$ 、 $\frac{3}{4}\pi$ 、 $\frac{5}{6}\pi$ 、 $\frac{7}{6}\pi$ 、 $\frac{5}{4}\pi$ 、 $\frac{4}{3}\pi$ 、 $\frac{5}{3}\pi$ 、 $\frac{7}{4}\pi$ 、 $\frac{11}{6}\pi$ のときのsin θの値に凸線をひいた。グラフ盤は、縦450mm、横

650mmのコルクボードで作成した。x軸、y軸は凸線で示した。0 ≤ θ ≤ πの場合は、点の位置を決めるため、前掲のテープと波型段ボールテープ(以下、波型テープ)を用いた。

(ウ) 操作・触察の方法

単位円を用いて、θとsin θの値をグラフに表す手順を次のように進めた。

- a θと等しい大きさを示す単位円の弧(縁)の部分にテープを貼り、sin θ(線分PH)の部分に波型テープを貼る。(図4)
- b 単位円の弧(縁)に貼られたテープをはがし、横長にしたテープの左端をグラフ盤の原点に合わせて、横軸方向に貼る。(θの値)(図5参照)
- c bで貼ったテープの右端に合わせて垂直に波形テープ(yの値)を貼って点を決め、ゴム紐の上からピンを貼る。(図5参照)

(エ) 学習活動の様子(一部抜粋)

問題

動点PがX地点をスタートし、単位円上を反時計回りに動く。中心をOとし、OXとOPのなす角をθ、動点の高さPHをyとする。
(1) θを用いてyを表せ。(活動の様子は省略)
(2) 縦軸をy、横軸をθとして、y = sin θのグラフをかけ。

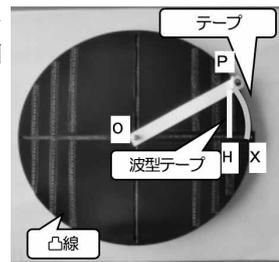


図4 単位円模型③

単位円におけるyとθに関わる復習

T：問題(2)を読むように伝える。

T：単位円模型を使って、OPを30°に位置させて「30°のところのθはいくつですか。」

S：「 $\frac{\pi}{6}$ です。」

T：「 $\frac{\pi}{6}$ って(模型の)どこと同じ大きさのこと？」

S：「斜辺1のときの高さ」

T：「それはsin θのことです。私はθを聞いています。」

S：「θってどれだ?」「ここ?」(単位円のcos θの部分指差す。思い出せない様子。)

T：「弧度法のθって何と同じ長さ?」

S：「分かった!思い出した。ここです。(弧XPをなぞる。)単位円の弧の長さです。」(既習イメージの言語化)

問題(2)

T：弧度法では角の大きさを単位円の弧の長さと同じ大きさで表すため、グラフの横軸が角の大きさ（単位円の弧の長さ）になることを伝える。

S：「横軸が弧の長さということは、こうなっていたのが（単位円の弧に貼られた $\frac{\pi}{6}$ のテープを取って）、このように（グラフ盤の）横に貼るということですか？」

T：単位円に貼られたテープをグラフの θ 軸に移動させるように伝える。「（単位円上に $\sin\frac{\pi}{6}$ の値を示す波形テープ

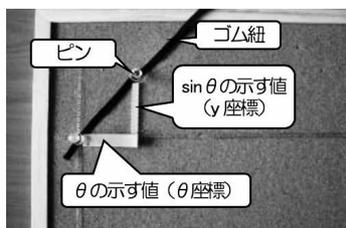


図5 グラフ盤①

を貼って) これは何を示しますか。」

S：「これはyの長さ。」グラフ盤に波形テープをy軸に平行に貼る。(図5)

T：「ということはどこを通る？」

S：「この点（原点から $\frac{\pi}{6}$ 横に移動し、 $\frac{1}{2}$ 縦に移動した点）を通ります。」「ということは、右上がりに増加して、 $\frac{\pi}{2}$ をすぎて下がってくる。三角形みたい。」（予測イメージの言語化）続いて $\frac{\pi}{4}$ と $\sin\frac{\pi}{4}$ のテープ、 $\frac{\pi}{3}$ と $\sin\frac{\pi}{3}$ のテープ・・・と順にテープを貼っていく。

T： $\theta = \pi$ までグラフを作った後、「この次（ $\pi < \theta \leq 2\pi$ ）のグラフの形はどうなると思います？」

S：「（ $0 \leq \theta \leq \pi$ と）同じようにまた上がって下がる。」と誤って予測する。

T：「 $\theta = \frac{7}{6}\pi$ のときのyの値は？」

S：「yはマイナス！ということはこういってこう！」と適切に π から 2π までのグラフを空書きして予測する。「面白い！へびみたいだ。」（予測イメージの言語化）

まとめ

T：「 $y = \sin \theta$ のグラフの形を整理しましょう。」

S：グラフを触って確認しながら

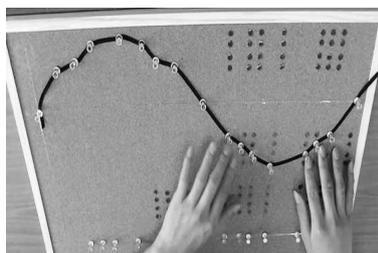


図6 グラフ盤②

「原点から π までのとき、 $\frac{\pi}{2}$ まで高さが上昇し、 $\frac{\pi}{2}$ から減少する。 π から 2π までは、 $\frac{3}{2}\pi$ まで減少し、そこから上昇する。」と自力で話し、ノート

にまとめる。(新出イメージの言語化)

(オ) 学習活動の評価

単位円の θ と弧の長さの同値関係など既習イメージの確認と修正に時間がかかったが、自力で修正できた。

操作的活動で単位円とグラフとの関連、グラフの成り立ちを理解し、 $0 \leq \theta \leq \pi$ のグラフの形状を「三角形みたい」と表現していた。 $\theta = \frac{7}{6}\pi$ のときのyの値を修正した後は、 $y = \sin \theta$ の全体のグラフを自力で予想し、イメージすることができた。また、グラフを触って確認しながら $y = \sin \theta$ のグラフを言葉で整理することができた。

3 まとめ

(1) 成果「知的好奇心の拡充とイメージの形成」

操作的活動と言葉による整理を意図的に設定することで、授業理解を促進し知的好奇心をもって意欲的に取り組むことができた。前述した授業のように、数学的概念や数学的な見方・考え方の簡潔で工夫された表現、それらと操作・触察との関連性の理解、新しい考え方の発見等において、生徒は「面白い！」といった驚きを伴う好反応をしたり、「三角形みたい」「蛇みたい」等と自らイメージを言語化したり、グラフの形等を予想したりする様子がみられた。これらの生徒の言動はイメージの形成を促すことができた証と考える。

学習意欲を促し、イメージの形成を図る授業を実践するためには、第一に、教師側で事前に教材研究を行い、指導内容を深く理解し、数学的概念や数学の見方・考え方のポイントをつかむことが重要である。第二に、そのポイントを教具の構造及び操作・触察の方法に意味付け・関連付けしてイメージの形成を図っていく。つまり、(通常の) 数学教育から視覚障害教育への橋渡しをすることが教師の役割であると考えている。

(2) 課題「イメージの長期保持と活用」

特に数学Ⅱの学習では、数学Ⅰ及び数学Ⅱの既習のイメージを活用することが多い。本生徒はそれらの既習内容を忘れていたり、誤って覚えていたりする場面が見られた。このようにイメージとは曖昧で変化し、忘れやすいものであると推測する。

そこで、既習内容について教具を使った操作・触察を通した形成的評価を定期的に行うこと、その評価に応じて操作的活動を通して既習イメージを修正する機会を設定すること等が必要と考える。このようにイメージの長期保持と活用を図ることで、着実に学習を積み重ねられるようにしたい。

「遊び」の出前授業を通じた集団づくりの推進

～人と関わる楽しさを共有できる学級集団を目指して～

富山県富山市立堀川中学校

教諭（カウンセリング指導員） 浜井 理

I はじめに

富山県では、いじめ・不登校等の生徒指導上の諸課題に対応するため、教員のカウンセリングに関する資質向上や児童生徒、保護者への援助・指導を行うカウンセリング指導員という役職を設置しており、県内の中学校には2019年度32名が配置されている。

本役職に就いて通算10年目になるが、日頃から不登校や別室登校の生徒と関わる中で、その保護者、担任が抱える心的疲労や負担の大きさを痛感している。こうした生徒を生まないためには、その土台となる学級集団づくりが重要であるが、その多くは学級担任それぞれの手腕に任されているのが現状である。

そこで、カウンセリング指導員という役職の特性を生かし、学級担任と連携した学級集団づくりを図ることを目標に本研究に取り組むことを決めた。

II 主題設定の理由

一昔前の子供たちは、近所の異年齢集団が自然に集まり、遊びを通してリーダーシップを発揮したり、小さな子の世話をしたりなど、いろいろな役割を体験しながら、人と関わる楽しさや集団の中でのルールやマナーを学んでいた。

しかし、現代の子供たちは、気心の知れた少人数の相手と一緒にいることを気楽に感じ、さらにそのグループの中で自分の居場所を守るために、自分の考えを主張できなかつたり、相手に無理に合わせたりすることもあり、人と関わる楽しさを味わう経験が乏しいように思われる。

こうした子供たちに、遊びを通していろいろな感情を味わわせ、人と関わることの楽しさや、役割を自ら負担して集団の中での関わりをつくる体験を積み重ねることによって、よりよい集団づくりを進めたいと考え、本研究主題を設定した。

学校生活に不適應を起こす生徒の原因は多様であるが、やはり学校での集団生活とそこでの人間関係に起因する場合が多い。そのため、予防・開発的カウンセリングが必要なことは以前から叫ばれているが、な

かなか定着しておらず、特に「遊び」に対する考え方には教員間でも温度差がある。

そこで今回、モデルケースとして1年生を対象に、内地留学で筑波大学の田上不二夫先生の下で研修した対人関係ゲーム・プログラムの理論を用いた出前授業を行い、「遊び」のもつ役割と集団への効果について研修を進めたいと考えた。

III 研究仮説

カウンセリング指導員が出前授業という形でモデルを示すことによって、担任の学級集団づくりをサポートすると同時に、学級担任自身の学級経営のスキルアップを図ることができる。

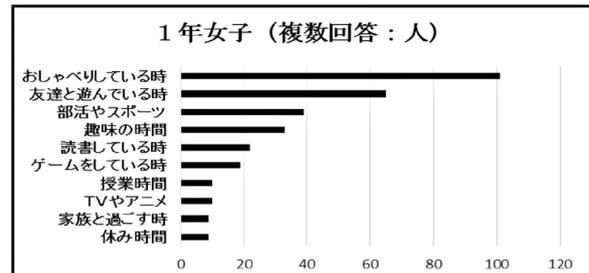
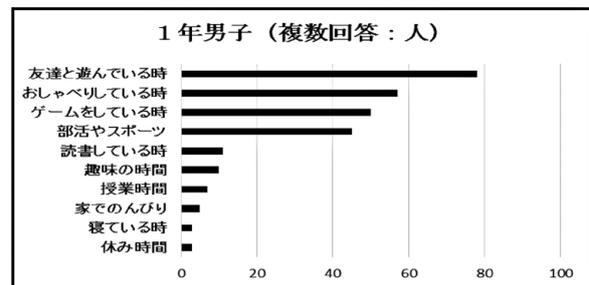
IV 研究の実践

1 「遊び」のもつ働きと効果

(1) 「遊び」に関する生徒の意識調査（2018 実施）

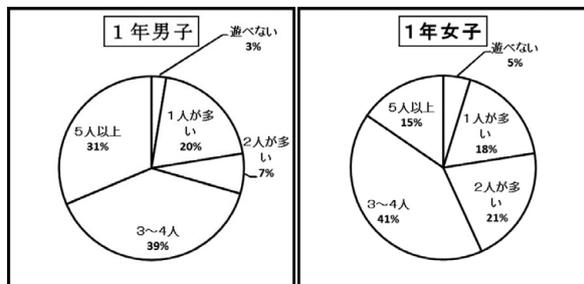
今回の研究実践に先立って、まず「楽しい」という感情や遊びのもつ効果について、生徒自身に考えるきっかけを与える目的で「遊び」に関する事前アンケートを1年生322名を対象に実施した。

【あなたが「楽しい」と感じる時はどんな時ですか】



最初の「楽しいと感じる時はいつ?」という質問に対し、予想通り友達と遊んだり、おしゃべりしたりする時間を楽しいと感じているという回答が圧倒的に多かった。このことから、生徒同士の関わりにおいて、「遊び」のもつ役割が大きいことが言える。

【あなたが放課後や休日に遊ぶ時は?】



上のグラフは、友達と遊ぶ際の人数について調べたものである。近年ゲーム等で1人遊びや少人数で過ごしている生徒が多いイメージがあるが、実際には仲間が集まって過ごす機会が多いことが分かった。

特に男子にその傾向が強く、遊びの内容も男女とも、公園や広場等でスポーツだけでなく、昔ながらの鬼ごっこ、かくれんぼ等の伝承遊びを楽しんでいる生徒が多いこともアンケート結果から知ることができた。

(2) 「遊び」に関する学年集会

遊びに関する意識調査の結果を資料化し、遊びのもつ役割や効果について、説明だけでなく体感的に生徒たちに感じ取ってもらうために、『「遊び」を通した仲間づくり』と題した学年集会を企画した。

その中で、生徒たちが色々な種類の「鬼ごっこ」を体験していることや、学級レクリエーションを企画するとしたら何をしたいかというアンケートで、ドッジボール等のスポーツに次いで、「鬼ごっこ」が男女とも第2位に選ばれていたことを受け、「なぜ鬼ごっこは楽しいのか?」という疑問を投げ掛けてみた。

それに対して生徒は、「捕まえたり、捕まったりするスリルがある」ことや「みんなでワイワイやれるから」といった理由を答えた。

こうした意見を聞いた上で、なぜそれが楽しさにつながるのかを【資料1】を提示しながら説明した。これは、人と人がつながる際の不安や緊張を緩和するために、身体運動反応と「楽しい」という情動反応を活用するために、「遊び」という手法を取り入れた対人関係ゲーム・プログラムと呼ばれるカウンセリ

【資料1】 「鬼ごっこ」ってなぜ楽しいの?

○自分がかまるとかどうかのスリル!

○仲間を助ける喜び!

○協力できた達成感!

など

ルールやマナーの存在!

○思い切り身体を動かす!

○自然に声が出る!

不安や緊張感の軽減!

安心した人とのかかわり

ング技法の理論に基づくものである。

さらに集会では、「遊び」がもたらす感情を体験するために「カモン」というゲームを実施した。

このゲームは、7~8名のチームを作り、一人ずつ他のチームの代表(王様)とジャンケンをし、勝てば次の人と交代し、チーム全員が早く王様とのジャンケンに勝ったチームが勝ちというゲームである。

ただし、王様にジャンケンで負けると、チーム全員を「カモン」と呼んで、みんなで王様の後ろを回って元の位置まで走らなければならない。しかも王様に勝つまで繰り返さなければならないので、負け続けると何度も仲間を走らせてしまうという「辛さ」が生じてくる。



遊びの感情体験「カモン」

そしてジャンケンに勝ち続けている王様自身にも、相手を可哀想だと思う感情が生まれる。しかし、何度も走らされている仲間は、「またか」と言いながらも一緒に走ることを「楽しい」と感じ、ジャンケンに勝って早くゴールしたチームは、最初は喜んでいるが、他のチームが続いている様子を見て、早く終わったことの「つまらなさ」を感じてしまう。

つまり、遊びの楽しさは単に「勝ち負け」ではなく「人と関わる楽しさ」「みんなで同じ時間を過ごす楽しさ」だということを、ゲームを通して体験したわけである。

このゲームで、何度もジャンケンに負けて、仲間を走らせ続けた生徒に感想を発表させたところ、「恥ずかしかったし、みんなに悪いなと思った」と辛い気持ちを語った。そこで同じ班の仲間に感想を聞いたところ、「負け続けて可哀想だったけれど、おかげでみんなでワイワイ走っているのが楽しかった」と労いと感謝の言

葉を返した。負けることが仲間を楽しませることにつながるといふ「遊び」のもつ不思議な感情を班員だけでなく、生徒全員が共有することができる集会となった。

【遊びの「楽しさ」はどんなところにある？】



遊びの「楽しさ」はどんなところにあるの？



- 1位(110人が回答)：人が集まり、言葉を交わし、みんなと触れ合えるところ
- 2位(64人が回答)：人と仲良くなり、友情や絆が深まる場所
- 3位(54人が回答)：みんなが笑顔になれる場所
- 4位(31人が回答)：みんなが助け合い、協力できる場所
- 5位(19人が回答)：お互いのよさが見つかり、わかり合える場所

6位以下：自由な場所、ワイワイ盛り上がる場所、ストレス解消できる場所、身体を動かし頭を使うところ等

集会の終わりに、遊びの楽しさがどんなところにあるのかを事前にアンケートした結果を紹介した。

「なぜ遊びが楽しいか？」と聞かれる経験はまずないと思われる。それを改めて考え、言語化したことによって、生徒の多くが遊びの楽しさが「人との触れ合いと関わり合いの深まり」にあることに気付くことができた。この集会が、これから学級で行う活動が単に「楽しい」だけでなく、人間関係づくりに必要なものが何かを考えるきっかけになったものと思われる。

2 対人関係ゲーム・プログラムによる支援と成果

(1) 集団活動の楽しさ「ボーリングジャンケン」

「集団とは何か、群れとは何か」を学び、よりよい集団づくりを支援する対人関係ゲーム・プログラムには5通りの目的に合わせたゲームが想定されている。

- ①関係をつけるゲーム ②他者と心を通わすゲーム
- ③集団の楽しさを実感するゲーム
- ④他者と折り合いをつけるゲーム
- ⑤集団の構造、役割分担を体験するゲーム

今回は、取組のスタートが1学期の後半だったこともあり、学級内での人間関係がある程度できてきた段階だったため、③～⑤を目的としたゲームを企画した。

カウンセリング指導員がリーダーとなって出前授業を行う目的は、集団づくりの支援を行うと同時に、今後学級担任がリーダーとなって実施していくためのスキルアップを図るためである。

そのため出前授業では、ウォーミングアップから、ゲームのねらいの説明の仕方、ゲーム内での雰囲気盛り上げ方、事後の振り返りと生徒たちの頑張りやよ

さをいかにフィードバックするかなど、学級担任が学級経営の手法の一つとして取り入れるためのポイントを丁寧に示すことを心掛けた。

ボーリングジャンケンとは8～10人が1チームとなり、交互にピンとボールになって、相手チームとジャンケンをし、ボーリングと同じようにスコアを付けて競う自作のゲームである。

ジャンケンとは誰とでもかけ声を交わすことや身体の動きがあることから、対人場面での不安や緊張を軽減するのに最も手軽に、そして個々の能力差に影響されずに行える活動であり、集団の関係性を築く初期の段階でも多く取り入れられている。

全てのクラスで実施したが、どのクラスにも共通していたのは、メンバーの活躍にチームとして自然と拍手が起こり、班員全員がジャンケンに負けてガーターになっても、互いのジャンケンの弱さに笑いが



仲間の勝負にみんな注目！

起こり、「負けることも楽しい」と感じた生徒が多かったことである。生徒の感想には「負けたけれど、とても楽しかったです」「私たちのチームのMVPは〇〇君でした」といった内容が記されていた。また普段教室に入りづらく感じている生徒も活動に参加し、自分が活躍する場面があったことを喜んでいていた。

(2) 折り合いをつける「新聞紙タワー」

この活動は、班ごとに決められた枚数の新聞紙のみを使って、より高いタワーを作るゲームである。糊やセロハンテープ等一切使わずに高いタワーを作るためには、折り方やつなぎ方にいろいろなアイデアが考えられる。

学校生活の中で、同じ目標を掲げたとしても、そこに関わる人の思いはそれぞれである。そうした思いを調整し合い、よいところを共有しながら目標達成を目指すことが必要である。これを「折り合いをつける」といい、集団が成熟する過程において必要なスキルである。

「新聞紙タワー」では、自分の考えを伝え、他者の考えのよさを見付け、一つの方法にまとめていく過程を経験することが主たる目標であり、タワーが必ずしも完成し、成功するとは限らない。そのため、うまくいかなかった班の取組の工夫や班員の協力等について



リーダーである教員がよく観察し、フィードバックすることが大切である。

事後の感想には、成功した喜びだけでなく、うまくいかなかったけれど班員と協力できてよかったことや、相手の意見を尊重することの大切さに気付いたことが多く記されていた。

手を離すまでドキドキ

(3) 集団の構造・役割を体験する「くま狩り」

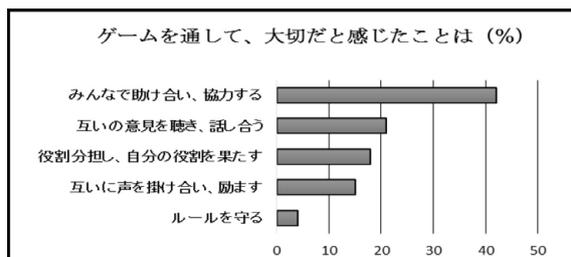
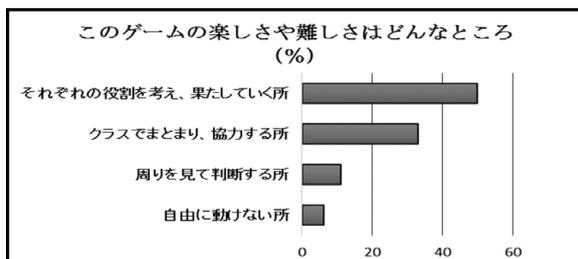
この活動は、クラス対抗またはクラスを2チームに分けて行うゲームである。チーム内で「くま」役を2人、残りのメンバーを「きじ」と「きつね」役に半々に分け、相手チームの「くま」を2人とも捕まえるか、相手陣地の宝を奪った方が勝ちという鬼ごっこ形式のゲームである。

ただし「くま」は「きつね」を、「きつね」は「きじ」を、そして「きじ」は「くま」を捕まえることができるという三すくみの関係が存在しているため、単独行動をすればすぐに捕まってしまう、陣地を守る者がいなければ、宝を奪われて簡単に負けてしまう。つまり、仲間同士が守り守られながら、チームの中で自然に自分の役割を意識し、さらに全体を意識しながら、その中で自分の役割を果たすことをゲーム体験を通して学んでいくことができるのである。

最初はルール以外のはあえて説明せずにゲームを行い、勝敗の原因を考えさせながら、本ゲームのねらいについて伝えることで生徒たち自らの気づきを引き出せるように配慮した。



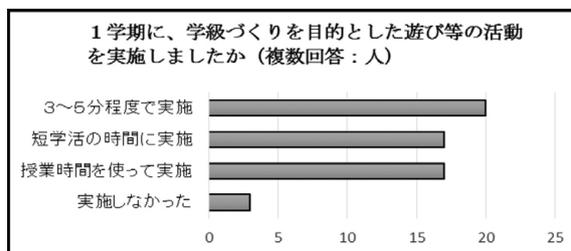
自然に役割を意識して行動



集団活動において、助け合いや協力が大切という考えは誰もが分かっていることではある。事後アンケートからは「なぜそれが大切か」を、ゲームでの役割体験を通して学ぶ機会になってくれたことが分かる。

V 成果と課題

次のグラフは今年度1学期末に学級担任27名に実施したアンケート結果である。



S G EやS S T等の技法はこれまでも広く取り組まれているが、今回の出前授業や校内研修会を通して、多くの先生方に学級づくりの手法として「遊び」が認知され、実践されてきていることが分かる。

また、実施時期も学級開きの4月だけでなく、学期を通して実施したという回答も7割に上り、「普段接点の少ない生徒同士が笑顔で関わることができた。相手のことを積極的に知ろうとしていた。学級全体が盛り上がった」等の感想を得ることができた。

個々に能力も得意不得意も異なるのが集団の特性であり、互いに意見を交わし、個々の役割を果たし、さらに互いに補い合うことによって集団の力が発揮されることを体験的に学習することはとても重要である。

そして、楽しみながら集団の関係性を高め、こうした様々な学びにつなげることができる点で「遊び」は優れた手法である。今後も「遊び」の出前授業を継続し、校内研修等も交えながら、学級担任のスキルアップの一助となるよう支援を継続したい。

VI 参考文献

「対人関係ゲームによる仲間づくり」田上不二夫編著

理科の「見方・考え方」を働かせる授業を目指して

～粒子概念を通して実践する主体的・対話的で深い学び～

鹿児島県奄美市立金久中学校

教諭 久保 秀仁

1 はじめに

これまで毎年試行錯誤しながら理科の授業をし、生徒がどのように科学的な概念を獲得していくかを見てきた。3年前に本校に赴任して、これまで学んできたことをさらに3年間の系統性をもたせて深めていくと、生徒が学習内容をより理解しやすくなるのではないかと考え、本研究を進めた。本稿はその3年間の取組をまとめたものである。

2 研究主題・副題の設定の理由

教育を取り巻く環境では、中央教育審議会(答申)(平成28年12月21日)で、生きる力をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で再整理したとあるように、今回の学習指導要領の改訂でも、資質・能力を育成することを目指している。

また、理科の「見方・考え方」について、理科の「見方」は「エネルギー」「粒子」「生命」「地球」の領域ごとに特徴があり、「考え方」は「質的・量的な関係や、時間的・空間的などの科学的視点」「比較したり、関係付けたりする科学的な方法」を用いることとしている。

本校3年生の1年次の標準学力検査(理科)の結果から、次の2点に課題があった。

○ 小学校で学ぶ条件制御の変える条件・変えない条件について、全国よりも6ポイント低い。また、どのような実験をすればよいかという課題は、全国より11ポイント低い。

○ 物質を特定する問題が8ポイント低いことから、他の物質の実験データを比較し、類推できていない。

このように、条件制御したり、実験データを比較し類推したりするなど、理科の「見方・考え方」を働かせることに課題があった。

そこで、理科の「見方・考え方」を働かせることに重点を置き、研究主題を「理科の『見方・考え方』を働かせる授業を目指して」として、研究を3年間進めてきた。

次に、学習指導要領解説理科編(平成29年7月)「理科の改定の趣旨」では、理科の「見方・考え方」を働かせ、探究の過程を通して学ぶことにより、資質・能力を獲得するとある。また、探究の過程を通して授業をする際には「主体的・対話的で、深い学び」を意識して授業を行うことが大切である。さらに、今回は、理科の「見方」の中でも粒子概念に着目して研究をまとめた。

以上のことから、副題を「粒子概念を通して実践する主体的・対話的で深い学び」とした。

3 研究仮説と研究の視点

(1) 研究仮説

探究の過程を通して、他者との関わりの中で科学的に思考・判断・表現させる指導の工夫や、粒子概念を理解しやすくするための手立てを行えば、理科の「見方・考え方」を働かせる授業ができるだろう。

(2) 研究の視点

研究主題に迫るために、次の2点を研究の視点として、研究・実践を進めることとした。

- 1 粒子概念を理解しやすくするための手立て
- 2 他者との関わりの中で、科学的に思考・判断・表現させる指導の工夫

4 研究の実際

(1) 粒子概念を理解しやすくするための手立て

粒子概念は、微視的であり、イメージしにくいことがある。そのため、粒子概念を感覚的にイメージしやすくして授業内容を理解しやすくするための工夫が必要である。また、3年間を見通して粒子概念を使えるようにする授業と、獲得した概念を活用する授業を意図的、計画的に実施することで、生徒が粒子概念をさらに深く理解することができると考えた。

そこで、次の二つの取組を実践した。

ア 粒子概念をイメージしやすくする教具の工夫

粒子概念を理解しやすくするためには、一般的に粒子モデルを使ったり、原子カードを使ったりしてイ

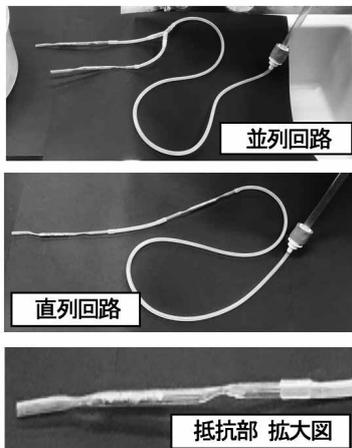
メージしやすくする。これらはすでに授業で使われており、本研究でも頻繁に取り入れた工夫の一つである。今回は、電圧をより理解しやすくするために、電気の粒をイメージで捉えやすくするための教具を開発した。

【実践例】

(ア) 電流・電圧説明器の開発

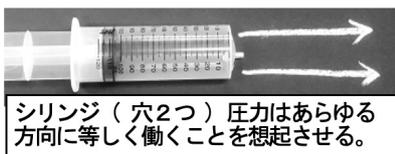
生徒にとって抵抗が一つのときは、理解しやすいのだが、直列回路や並列回路になると急に理解が難しくなる。そこで、実験後に演示実験として写真の教具を使って、視覚的、感覚的に理解しやすいようにした。これまでも似た装置はあったが大きすぎて実用的ではなかった。そこで、コンパクトにしかもすぐ手に入る材料で開発した。

装置の概要は、ガラス管を細工して、流れにくさを表す抵抗の代わりに、ガラス管の中に水槽用の細かな石を入れて、図のように直列回路と並列回路を作り、水を流した。実際に、電流の流れを水の流れとして捉え、流れやすさ、流れにくさを視覚的に実感させ、理解させることができた。



(イ) 並列回路における電圧説明器

大型のシリンジの前面に2か所穴をあけたり、横に4か所穴をあけたりして、教室でダイナミックに水を噴射する。並列回路でも電気の圧力は、水圧と同様にあらゆる方向に等しく働くことを実感させ、理解させることができた。



イ 系統的な活用を意識した、計画的な単元の展開

1年や2年の前半において、粒子のイメージを、前述の教具等やモデルを使って考察させたり、説明させたりする授業を繰り返し実施することで、粒子概念を獲得させていく。次に、2年生以降の授業を行う際に、獲得した粒子概念を働かせながら、実験の予想や企画をさせたり、考察させたりするように単元構成を考えて、授業を展開することで、粒子概念をさらに深く理

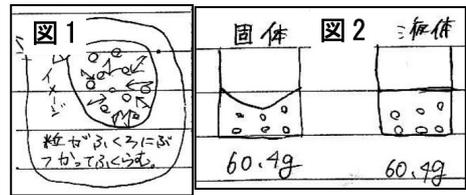
解することができる。粒子概念を使った単元構成及び授業を紹介する。

実験における考察の場面で、粒子で考える方法を獲得する <例>1年 状態変化 大気圧 2年 化学変化	実験における予想や企画、考察の場面で、粒子概念を活用していく <例>1年 水蒸気の凝結 2年 雲のでき方 電気の粒 3年 イオン
---	---

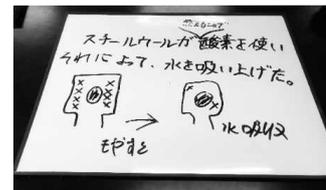
【実践例】 < 粒子概念を獲得する段階 >

(ア) 第1学年「身のまわりの物質」において、エタノールやロウの状態変化のイメージを、単なる暗記ではなく、熱と粒子のイメージで捉えさせる。図1はまよめるとき、

図2は考察の際に、粒子のイメージで考えた。



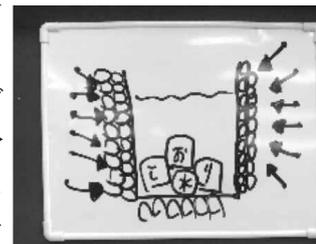
(イ) 第2学年「化学変化と原子・分子」において、集気びん内に水が上昇した現象を使って、酸素の粒子とスチールウールとの化合を推測させた。上の図のように、粒子のイメージで考察しようとしている。



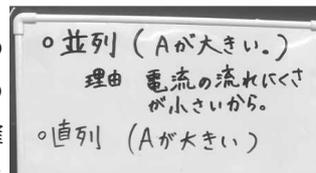
【実践例】 < 獲得した粒子概念を活用する段階 >

(ア) 第2学年「コップの水滴はどのようにしてついたのでろうか」において、空気中の核を中心に水蒸気

が水滴になる仕組みについて学んだ後に、それを踏まえて、コップに水滴がどのようにしてつくかを予想及び考察させた。図は、粒子のイメージで予想を立てようとしている。



(イ) 第2学年「電流の性質」「電圧の性質」の授業を行う際、単なる確認実験にならないように



粒子(電気)の性質を使って予想させた後に、実験させた。図は、並列回路と直列回路の電流の流れ方を予想したときの図である。

(2) 他者との関わりの中で、科学的に思考・判断・表現させる指導の工夫

「主体的・対話的で深い学び」は、探究の過程(特に学

習課題を見いだす場面、予想や企画の場面、考察の場面等)の中で行うことができる。また、探究の過程を通して、生徒が主体的に取り組み、他者(生徒または教師)と協働的に対話をする中で、多面的・多角的に思考を広げ深めていくことができ、思考力、判断力、表現力等を育むことができる。

そこで、生徒が協働的に対話し、深い学びが行われるように、次の三つの取組を実施した。

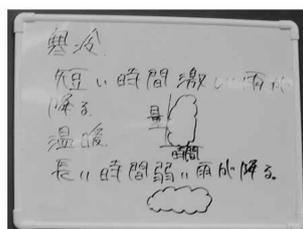
ア 話し合いを「見える化」する手立て

話し合いを活性化するには、現在何を話し合っているかを生徒が一目で分かること、そのために考えを共有する道具が必要である。

そこで、ホワイトボード(黒板に貼れるタイプ)を各班に準備した。ホワイトボードを活用することで、班での話し合いの際に、班員が自分たちの考えを理解しやすくなったり、説明しやすくなったりした。また、黒板に貼って話し合いの途中経過を示したり、結果や考えを全体で共有したりすることができる。教師も生徒がどのように考えているかなどの思考の様子を見ることができる。

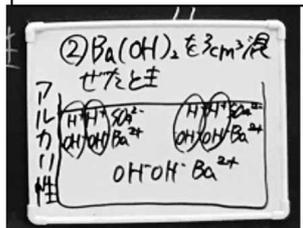
【実践例】

(ア) 第2学年の「雲のでき方」において、前線の特徴を説明する際に、前線にできる雲の形から、前線の特徴をつかもうと班で話し合ってたどめていた。



前線の特徴を図で説明

(イ) 第3学年の中和実験の際も、イオンを使って分かりやすく説明しようとしていた。ともに、図を使って、班員にどう説明するかを工夫していた。



中和の実験での考察

イ 互いに説明する活動の手立て

「協働的に対話することで」と先に述べたように、例えば、積極的に自分の考えを他者に説明する、他者から求められる説明に対して根拠や理由を述べる、他者の考えに質問するといった、他者との



個の考えを真剣に書く様子

対話が重要であると考え。なぜならば、生徒は分かったことを自分の言葉で他者に説明し直すときに、自分の理解が不十分であることに気付いたり、他者の説明を聞いて他者の視点を取り入れながら多面的・多角的に自分の考えを見直したりすることができるからである。

そこで、次の二つの工夫を行った。

(ア) 個の考えをもたせる工夫

自分の意見をもってはじめて対話が成立する。まずは自分の意見や考えを書く習慣から育てる。例えば、全員起立させて、自分の考え(以降「個の考え」)を書いたら座る。ただし、最後5~6人になったら全員座る。その際の注意点として、間違っても様々な発想ができたこと、自分のアイデアを出せたことを認めることが、次への意欲となる。その他に、机間指導しながら「個の考え」が書けた生徒のノートにスタンプを押していく工夫を行った。

机間指導しながら「個の考え」をチェック(既習事項の熱と粒子の関係を活用している。)

(イ) 学習形態の工夫

人は小集団になると発言しやすくなる。そこで、授業によって、ペア、小グループ、班、全体といった学習形態を組み合わせて授業を行うことで、生徒間の対話が活性化します。

例えば、ホワイトボードを班に2枚ずつ渡すことで、男子3名、女子3名の小グループができる。その小グループの考えをもって、班



小グループの話し合いの様子

でさらに意見交換をして考えをまとめ、全体で練り上げていく授業を行った。ペアだとまったく意見が出ないペアがあったり、班だとほとんど発言しない生徒がいたりするので、小グループは、ペアや班のときよりも話し合いが活発であった。

また、班編成も重要である。班を編成するときは、

席替えの際に、必ず話し合いの核となる生徒を班の中に男女1名ずつ入るように配慮して、対話の活性化を行ってきた。

ウ 問題解決的な学習(探究の過程)を計画的に実践

深い学びを行うために、これまで獲得した「見方・考え方」を働かせながら、次の授業を構成するなど、探究の過程(今回は問題解決的な学習の過程)を繰り返し計画的に実施していく。粒子の領域だけでなく、すべての領域で実施していった。

具体的には、授業を行う際に、学んだ内容をその後の授業の、予想や企画、考察の場面でいかに活用するかを考えながら授業を進めていくようにした。そのため、新しい単元に入る前に、必ず探究の過程を意識して単元の授業計画を立てた。

問題解決的な学習をどのような授業で実施可能かを、次の表で具体的に示す。

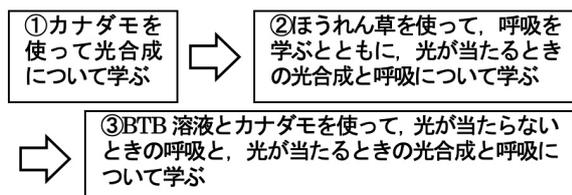
【問題解決的な学習(探究の過程)の主な計画(1年生)】	【問題解決的な学習(探究の過程)の主な計画(2年生)】
植物(顕微鏡、種子植物等) 植物(光合成、呼吸・蒸散) 金属の分類、密度、白い粉 ものの溶け方(ろ過、再結晶) 状態変化(アルコール、ロウ) 状態変化(沸点・融点、蒸留) 気体(アンモニアの噴水) 光(鏡、凸レンズ) 圧力、水圧、浮力 岩石(火成岩)の分類 地層(地層の広がり) 地震(震源、地震の発生時刻)	化学変化(カップケーキの膨張) 化学変化(炭酸水素ナトリウム) 化学変化(スチールウールの燃焼) 化学変化(質量保存の法則) 化学変化(定比例の法則) 動物(消化の実験) 気象(雲の量とよくなるのか) 気象(コップの水滴のでき方) 気象(温度と飽和水蒸気量) 気象(湿度と露点)(雲のでき方) 気象(前線のでき方とその特徴) 電気(回路に流れる電流/電圧) 電気(電力、電力量の考え方)

上記以外にも問題解決的な学習をしやすい授業があるが、紙面の関係上、記載していないものもある。この問題解決的な学習を計画的に3年間続けている。

【実践例】

(ア) 呼吸と光合成の単元計画

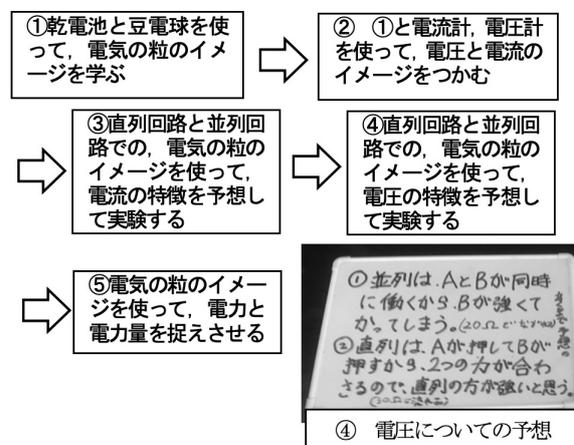
問題解決的な学習の基礎を学ぶために、呼吸と光合成の実験の方法を変えて実験した。



※光合成や呼吸について、繰り返し実験を行って学ぶことで、上記の②、③では学んだことを活用しながら予想したり、考察したりできた。

(イ) 電気の単元計画

電気の粒のイメージを活用して、直列回路や並列回路について予想や考察をさせたり、電力や電力量について考えさせたりするなど、既習の「見方・考え方」を繰り返し働かせるようにした。



5 研究の成果

- 鹿児島学習定着度調査では、平成29年度(1年生)平均通過率本校54.8県55.1、平成30年度(2年生)平均通過率本校52.4県49.5と徐々に結果が出てきた。
- 平成30年度のNRT(1年生の範囲)では、5段階評価の中で、2の生徒が最も多かったが、平成31年度のNRT(2年生の範囲)では、5段階評価の中で、3の生徒が最も多く、全体的に成績の底上げができた。
- 3年生のイオンでは、話し合い活動において、多くの生徒が粒子概念を使って説明をできるようになった。

6 今後の課題

- 個人で考えることが難しい生徒が固定化してきた。何を考えるかをさらに明確にして発問する必要があるとともに、生徒間の学び合いをさらに活用して、学習内容や粒子概念の定着を図っていききたい。
- どのような授業をしていくか、どんな工夫ができるかなどを、個人だけの研究ではなく、同じ理科の職員と今まで以上に情報を共有しながら、さらに研究を進めていきたい。

<引用・参考文献>

- ・文部科学省
中学校学習指導要領解説「理科編」(平成29年7月)
- ・三宮 真知子(編著)(平成22年4月1日)
「メタ認知 ~学習力を支える高次認知機能~」
- ・高垣 マユミ(編著)(平成20年10月10日)
「授業デザインの最前線Ⅱ~理論と実践を創造する知のプロセス~」

第25回 日教弘教育賞

教育研究集録 第31集

令和2年6月発行
編集・発行 公益財団法人 日本教育公務員弘済会
URL:<https://www.nikkyoko.or.jp>
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷 5-4-6
TEL 03-3354-4001
FAX 03-3354-4068

印刷 株式会社 ニシカワ
〒207-0005 東京都東大和市高木 3-351-1
TEL 042-566-6669
